kinokopress.com
www.kinokopress.com

デカルトはテロリスト

現代文明の毒唾1

生野以久男

第一章

1

長い眠りから目を覚ますと、まわりの様子が一変していた。いままで見たことがない妙にこじんまりとした部屋が薄明かりのなかに浮かんだ。

デカルトはそっと首を回した。幅の狭いベッドに身を屈め、小さくなって横臥していたらしい。一瞬、彼は牢獄に幽閉されたのかと思った。

ベッドは頭の方を壁に押しつけるような格好で据え付けられ、部屋の中央に伸びている。もう一方の壁の間には僅かばかりの空間があって、壁際に机兼用の折りたたみ式の鏡台が寄せてあった。右手には窓があるらしく、遮光カーテンの合わせ目から僅かに漏れた光がその前に並んでいるアームチェアーと小さな丸テーブルを照らしている。

彼はベッドから下りて、カーテンの隙間から洩れる光に近づき、重いカーテンを分ける。ライトブルーの厚いカーテンの裏に薄いレースのカーテンがあった。

恐る恐る窓の外に目をやると、眼下にやたらとけばけばしい色彩の広告塔が目立つビル群が乱立する見慣れない風景が広がっていた。ベルトのような高速自動車道路がビルのすき間を縫うように走っている。緩いカーブを描いて本線に合流した自動車の列が新たな幹線と出会い再び分かれ離れていく。

デカルトは窓辺に佇み、高速自動車道路を数珠繋ぎになって疾走している豆粒のような自動車に釘付けになった。

しばらく彼は珍しそうに自動車の流れを眺めていた。一瞬耳元でタイヤの軋む音がしたように感じた。

突然、なんの前触れもなく、平たい顔をした委員長が現れた。彼の脳裏に査問委員会での喚問の場面が生々しく蘇る。

臨時の喚問室となった会議室は滅多に使われることのない奥まったところにあって、天井が高く奥行きのある細長い室内の隅々まで重く淀んだ空気が支配していた。

「デカルト君、何度喚んでも応じようとしないので、今回は少々手荒いまねをしたが……、ところで、きみを喚んだのはほかでもないが、きみが秘密工作員として地球で仕掛けたことについて……」

金属性の良く通る単調な声がした。

早朝たたき起こされ、有無を言わさず引立てられてきたデカルトの脳はまだなかば眠りの世界にいた。喚問席で眠気の誘いと必死に闘っていた彼が顔を上げると、奥まったひな壇に居並ぶM星最高会議査問委員会メンバーの真ん中の席に平たい冷やかな顔をした委員長の青白く光る目があった。彼に向けられた委員長のトンボの目のように突き出た丸い目は底なしの湖を思わせる澄んだ青い色の淡い光を放つ。だがなぜか弱々しく焦点が定まっていない。

不意に、彼の脳裏に今朝見た巨大ビル崩壊の場面が浮かんだ。

M星では移住に備えて頻繁に移住予定先である地球に関する情報がテレビに流されていた。その朝放映されたのは地球上の大都市特集スペシャル

だったが、そのなかに二〇〇一年九月十一日の朝米国を襲った同時多発テロのビデオが含まれていたのだ。

画面一杯に、もくもくと黒煙を吹き上げている四角柱のタワーが映し出された。一角獣のように頭部から突き出している一本のテレビアンテナの尖端が黒煙のなかに垣間見える。しばらく黒煙を激しく噴き上げていたアルミニウムで覆われたガラスと鉄の一一〇階建ての巨大なツインタワーは南棟サウスビルの上部からずるずると沈んで落ち、つづいて北棟のノースビルが崩れ落ちる。書類の紙が空に舞い、ガラスの破片、崩れたコンクリートの粉末、灰色のススや砂じんが逃げ惑う歩行者に降り注ぐ。上空高く舞い上がった煙や埃がキノコ雲となって広い範囲にわたり視界を遮った。

空中高く聳えていた一一〇階建ての世界貿易センタービルが満員の乗客を乗せた巨大な旅客機の衝突によって一瞬のうちに崩壊していった。

映像を見て、胸が締めつけられた。自分が仕掛けたとおり、地球上を支配している現代科学技術文明はすでに自壊の最終段階に入っているらしい。

「デカルト君、きみはたしか……」

沈黙を守り続けているデカルトに委員長がふたたび呼びかけた。委員長は発言を途中で区切り、いままでと違った柔和な顔を喚問席に向けた。

秘密の査問委員会のせいか傍聴席は空席で、委員長と六名のメンバー、二人の書記、それに喚問席のデカルトのほか、誰もいない。委員長が時折思い出したように、骨張った小さな左手で長く伸びた純白の顎髭をゆっくりしごく。無意識に繰り返される単調な仕草が眠気を誘うような妙に落ち着いた雰囲気を醸し出す。

「あちらの暦でいうと、きみは十六世紀末、確か、西暦一五九六年に地球人として貴族の家に生まれたのだったね」

いやな喚問が始まった。なんでいま頃になって昔のことを蒸し返そうとするのか。帰ってきた当座計画内容については十分説明したではないか。もうあの問題には一切かかわりたくなかった。

「われわれは地球人ヴァージョンに調整されたきみのＤＮＡを地球に送り、フランスで地球人の胎内に潜り込ませたのだ」

ふてくされて黙っているデカルトに追い打ちを掛ける。

出生の秘密を人前でべらべら喋るとは何事だ。デカルトは委員たちの好奇に満ちた視線をはね返すように委員長に増悪に満ちた目を向ける。委員長は彼の視線には頓着せず、プリントアウトされたばかりなのか、それとも今日まで書類の山に埋もれていたのか分からない分厚い書類を手元にたぐり寄せ、これ見よがしに大げさな仕草で音を立ててページをめくる。

委員長の動作に合わせて他のメンバーも一斉に手元の書類をめくり出す。使い古したモーターの毛羽立つような音が響いた。デカルトは耳障りな音に苛立ち、上目遣いで委員長を窺う。

「……だったと思います」

デカルトは耳障りな音に堪えかね、短く応える。

「だった?」

委員長はとがめるように、平たい大きな顔を上げる。

「はい」

地球では近代哲学の祖と崇められているルネ・デカルトだ。だが四百歳となってはムリがきかない。無理やり連行されては喚問に応じないわけにもいかないが、いたずらに体力が消耗しないためには質問にも短く返答す

ることだ。なにごとにも合理的に振る舞うのだ、と彼は自分に言い聞かせる。

「で、いつまで地球に滞在したのかね」

「召還されたときまでです」

あくまで抵抗の姿勢を続けるデカルトに委員長は諦めたのか、先へ進める。

「それは何年のことかね。あちらの年号でいえば……」

「地球の西暦で、一六五〇年だったと思います」

デカルトは委員長の嫌みたらしい言い方に寒気がした。三百五十年以上も前のことだ。「いい加減にしてくれ」と言いたかった。

喚問席の堅い木の椅子でお尻が痛かった。いつのまにか催眠術にかけられたのか、こころの動きとは逆に、委員長に媚びるように、彼も無意識のうちに左手で長くもない顎髭をしごきはじめる。

M星は太陽系に近いX系のなかで地球と酷似した豊かな生命のある惑星のひとつであった。そこに棲息するM星人は小柄ながらも一見地球人と見間違うほど似ている。だが次第に明るさを増してきた恒星から送られてくるエネルギーが急増し、M星の自然環境条件が急速に悪化し出した。このため、M星人は人工的にコントロールされた巨大なドームでの生活を余儀なくされた。そのせいか、M星人は頭部だけが次第に大きくなり、それを支える体ほうが細く小さくなった。背丈も低く、成人になっても一メートル三〇センチほどしかない。体が小さくなった分、寿命が伸びた。M星では人口増加率が急速に低下し絶滅のおそれが出てきて、M星人の生き残り対策のひとつとして、寿命を延ばすさまざまな延命対策が実施されていたのだ。

デカルトは委員長を真似て顎髭をしごく自分に気付き、不機嫌な顔を向け、委員長を一瞥する。委員長が何を聞きたがっているのか分かっていた。地球から突然召還させられてからたびたび査問委員会の喚びだしを受けた。だが今日までなにかと理由をつけて、喚問に応じようとしなかった。査問委員会もしびれを切らして、とうとうデカルトの首に縄を付けて引っ張り出すことにしたらしい。今朝、召喚状をもった委員長の手下に眠っていたところを襲われ、無理やり喚問席に座らされたのだった。

突然の強制召還直後、デカルトは理由を聞きたくて最高会議に出向いたとき、委員長の頭にはふさふさとした長い髪があったことを思い出した。二〇〇年後、再び見かけたときにはまだ頭の両わきに僅かに頭髪が残っていたように思う。だがいまでは人一倍大きな頭には髪毛一本すら残っていなかった。

デカルトは思わず自分の頭に手をやった。幾分薄くなった感じがする。やがて自分も委員長の頭のようにつるつるに禿げてしまうのかと思った。彼は一日の大半を寝て暮らした。そのせいか、そんなに時間が経っているとは思わなかった。だがいつのまにか地球流にいえばすでに四百歳を超していた。それでも平均年齢六百歳を超えた最高会議メンバーに比べれば、彼はまだ若いほうに属しているのだ。

「ところで、どうしてこれまで喚問に応じようとしなかったのかね」

委員長は目を丸め、纏わりつくようなねちこい視線を向けた。

デカルトは縷々理由を説明したところで理解してもらえないだろうと思い、幾分俯き加減で口を閉ざしていた。彼は任務半ばで召還されたことを

思い出し、ただ不貞腐れて拗ねていたにすぎないのだが、こんな彼の様子に委員長は改悛の情を見て取ったのか、それとも諦めたのか、すぐ、話題を変えた。

「地球での行動を説明してください」

「要約しますと、地球で過した前半は、各地といっても、西ヨーロッパが中心ですが、転々として地球人の様子を観察し、どんな仕掛けが妥当かを探っておりました。後半に考えをまとめ、地球人絶滅のための工作をいたしました」

「確か、きみはオランダ、ドイツ、フランスなどで軍籍についたんだったね。最初はオランダで志願兵として……。なぜ何度もさまざまな国の軍隊に潜り込んだのかね」

デカルトはご老体の委員長にしてはよく調べていると感心した。彼はすでに最初軍務に就いた国がどこの国の軍隊だったか忘れかけていた。なぜオランダの軍隊を選んだのか、彼は必死で思いだそうと試みた。近代哲学の祖としてのプライドもある。忘れてしまったとは言えなかった。

「当時としては、軍隊が唯一最先端の組織だったし……、まず、その戦力を確かめて、わがM星『自衛軍』による地球人殲滅の可能性を評価しようと思ったからです。まあ、地球人の絶滅を待たずに、早急に地球を乗っ取ることができないかと考えたわけです。しかし西ヨーロッパの何カ国かを見ただけで、残念ながら、その考えが無謀であることを悟らされてしまいました」

「……」

委員長はなにか言いたそうに大きな顔を向け、水晶玉のように澄んだ底なしの大きな目でしばらくじっとデカルトを見ていた。彼は委員長の自尊心を傷つけたかと思い、急いで付け足す。

「わが『M星自衛軍』が非力だと言っているのではありません。わたしには『自衛軍』の真の力を知りません。もしかしたら、一般の人々が知らない秘密の巨大な破壊力を隠し持っているかもしれませんから……

でも、地球人たちは年がら年中戦争に明け暮れています。彼らは三度の飯より戦争が好きなのかもしれません。わたしが見た西ヨーロッパの各国間では権謀術策の限りを尽くし、なにかと理由をつけて領地の奪い合いをしていました。地球人の間では争いが日常茶飯事なのです……

とにかく地球人は闘争心が強く、相手を蹴落とすことが趣味のような人種です。そんなところにわざわざ『M星自衛軍』を派遣しても意味がないと思ったのです」

「……」

委員長は表情を変えずに、相変わらずデカルトに底なしの透明の大きな目を向け、口を閉ざしたまま話のつづきを促す。

「そこでわたしはこう考えたのです。このような争い好きな人種を絶滅させるには争いの種を蒔き、互いに競わせるのが一番じゃないかと。まあ、あれこれ考えて、結局、地球人の日常的営為のなかに自滅の構造を組み込むことにしたのです」

「なるほど」

「これらについてはまえに一度お話したことがありますので詳しいこと省略しますが、この仕掛けがやがて作動して地球人を絶滅へと導くことでしょう」

「そうかね。ところで、当時の地球人の数はどのくらいですか」
「地球全体の人口ですが……」
デカルトは虚を突かれて、じっと委員長の目を見た。
「おおよその数でいいのです」
委員長の右隣のメンバーが口を挟んだ。
「当時、フランスの人口は約二〇〇〇万人といわれていましたが、ヨーロッパ全体でも一億人いたかどうか。ですから、地球全体では、まあ、数億というところでしょうか」
「ところで、現在の地球人口はどうですか」
委員長はおもむろにデカルトに訊ねた。彼は言葉を失った。
「……」
地球人口はすでに六〇億人を超え七〇億人に近付いているはずだ。戦争好きの地球人が殺し合いを続けてきたにも拘わらず、あのときから三百五十年経た西暦二〇〇〇年に地球人口が六三億人と十倍以上にも増えている。となるとデカルトが考えた地球人同士の殺し合いによる絶滅作戦は全然効果を上げていないということではないのか。
「……確かに、当時に比べて人口は十何倍にも増えていますが、地球上ではこれまで戦争で何億人もの地球人が死んでいます。それに現在、人口が増えているにもかかわらず、それゆえにいま絶滅の危機が間近に迫っているのです。人口が増えているからこそ、それだけ絶滅が早まっていると考えるべきなのです」
デカルトは苦し紛れに強弁する。
「M星では現在、人口が減退して、M星人が絶滅に瀕している。地球では人口が増えると地球人は絶滅するのかね」
別のひとりのメンバーが不思議そうに呟く。
「地球では、いまの地球人口が消費する資源量はすでに地球の再生可能な資源量を超えていると……」
「それにもかかわらず、地球人口は増え続けている」
「人口が増えれば増えるほど絶滅への重しが増えていくのですよ。現在、地球では人口の三分の一である二〇数億人が飢えに苦しんでいる」
「地球人はいずれ石油などの再生不可能な地球の資源をもすべて消費し尽くしてしまうということになるのかね。そうなれば、地球にはやがて一人も生存できなくなってしまう」
委員長は深刻な声を発した。
「それで地球の現状をどうかね」
「地球の現状……ですか」
デカルトは「絶滅寸前」と言おうとしたが、息を詰め、用心深く、相手の出方を窺う。
「ところで、きみの仕掛けによって、地球人は間違えなくもうじき絶滅するのだね。仕掛けを修正する必要は全然ないというのだね。きみ、そうだね。われわれM星人もそろそろ地球への旅立ちの準備をはじめなければならない時期に来ているのだよ。諸君、そうだったね」
委員長は両脇に居並ぶ六名の委員に目をやった。頭髪のないつるつる頭の六名の委員が一斉に頷く。
「きみが地球にいたころ、M星にはまだ一五〇万人のM星人がいたが、現在では十分の一の一五万に減ってしまった。それでも全員を無事地球に送

りとどけるためにはかなりの時間が必要だ。余裕がないんだ。地球への移住がわれわれM星人の生き残りの最後のチャンスとなってしまったんだよ。だから、確実を期したいのだ」
「最後のチャンス？　ほかのオプション星は？」
「ないのだ。残されているのは地球だけだ。これが最後のチャンスなのだ。まだ秘密にしているが、M星には残された時間が僅かしかない。X星からの光線の強さが急増して以来、水の蒸散量が急激に増え、水資源がいよいよ底を突きつつある。水が無くなるまえに、われわれは行動を起こす必要がある」
「残されている時間は……」
デカルトは委員長を見た。目は急に光を失い、秘密の帳で閉ざされた。
「僅かだ。詳しく計算する余裕はない。とにかく、準備が済み次第、われわれは一刻も早くM星を離れたいのだ。延び延びになっていたが、漸く移住について全員の合意をうることができた」
「地球への移住、ということですか」
「まあ、そうだ。現在建設を進めている前衛基地をめざして明日にも第一陣を送り出したいくらいなのだ」
「前衛基地？……、どこですか」
「地球のすぐ近くだ」
「でもわたしに対する命令は『五百年計画で地球人を地球上から消すこと』でした。計画目標期限までには百年を切りましたが、まだ優に数十年は残っているはずですが……」
「あのときはな」
「あのとき？　なぜか任務半ばでわたしは強制的にM星に呼び戻されたのですよ。もう一度言いますが、まだ任務半ばだったんです、あのときは……」
「実を言えば、きみを送り出してから計画期間が長過ぎたことに気付いた。もっと短期間に移住できる可能性のある星を探したところ、五つの候補星が見つかった。そのなかに環境条件がさほど良いとは言えないが、高等生物のいない星がひとつあった。そこでその星への移住を最優先に検討して、移住先をその星にすることにした。決定後ももしものときのオプションのひとつとして地球を保留しておいたが、急いで計画遂行する必要もなくなった。そこで計画は変更せずに残しておくことにして、取りあえずきみを急遽召還することにしたのだ。だからこれまできみの喚問を延ばしていたのだが、最近になってその星に重大な欠陥があることが見つかった。ある周期で小惑星が衝突することが判明したのだ」
「候補星は他にないのですか」
デカルトは愛くるしい目をした気品あるクリスティナを思い浮かべた。召還の命令を受けたとき、彼はもう少し地球に留まりたいと何度思ったことか。一時は、命令に違背し任務を放棄してでも地球に残ろうかとさえ考えたくらいだった。
「残念ながら、ほかにはない。現在残されているのは地球だけだ」
「といわれても、計画に従い、二一〇〇年を目標としてきたことですし……、それに現状がどうなっているのか、わたくしには……」
デカルトは曖昧に応えた。実はあのとき、すでに計画した工作はすべて終了していた。いつでも召還に応じることができた。だが、クリスティナ

を一目見て以来すっかりこころが奪われ、滞在期間の延期を申し出たのだった。それにひとつ気がかりなことがあった。

「まあ、それはそれでいい。地球人同士で殺し合うことだけがこの『プロジェクト』のために仕組んだ仕掛けじゃあるまい。きみの仕掛けた他の罠がこの三百五十年の間期待通りに機能しているかどうかだ。予定通り、地球人は絶滅して地球上から姿を消すと、いまでもきみは確信しているんだろうね。その辺のところを詳しく聞かせて欲しいのだ」

「多分、そうなることでしょう。でも正確に判断するには情報が不十分ですし……」

デカルトは委員長の目に狡そうな光を感じて、ぶっきらぼうに応えた。彼には目の前に見える形で現れているもののほか、すべてに懐疑的だった。たとえ自分が仕掛けたことでも、時間の経過のなかでどう転ぶか分からないではないか。委員長はいつ自分の頭髪がすっかり抜け落ちて完全に禿げてしまうか、事前に正確に予測することができたのか。

「査問委員会としては、地球がわれわれM星人の安全な移住先となりうるか、早急に評価査定しなければならないのだ。地球環境が安全で、移住が可能と評価されれば、最高会議は第一陣をいつ地球へ送りだすかを決めることになる。とにかく、地球が移住先として安全なのか、その可能性があるのか、早いとこ、正確に掴んでおきたい。きみの仕掛けがうまく機能しているのか知りたいのだ」

「わたしの仕掛けによって地球上に地球人がひとりもいなくなるかどうかは、目標年になってみないと分かりません」

デカルトは未練がましく、あくまで懐疑を捨てきれずにいる。

「なにを寝惚けたことを言うのかね、きみは。自分でそうなるように仕掛けてきたんだろう。そうしてきたのなら、そうなるとどうして言えないのかね」

「でも未来には未知のことが多々ある……」

「未知のことでも、とりあえず既知と仮定して処理すればいいのではないかね。そうすれば解が見いだせるんじゃないのか。きみが地球でそんなことを言いふらしたというではないのかね」

「そう言われても……」

「ところで、きみは地球にどんな仕掛けをしてきたのかね。ここにある資料では地球には現在いたるところで環境問題とやらが発生して地球全体に広がっているそうだ。その地球環境問題というのはなにかね。きみの仕掛けと関係があるのかね」

「地球環境問題ですか……、まあ、わたしが仕掛けたものと大いに関係があるでしょう」

「それが地球人を全滅する仕掛けではないのかね」

「地球環境問題とやらが発生しているにもかかわらず、地球人口が増えているのはなぜか……」

デカルトの応えを待たずにメンバーのもうひとりが口を挟む。つづいて他のメンバーが口々に意見を言いだす。

「これから地球環境問題が段々酷くなるのかね……」

「そんなところにM星人を移住させることができると思っているのか。われわれ自身の生存も脅かされるのじゃないかな。環境問題が解決しなければM星人を移住させることはできない」

「確かに、地球上は地球人絶滅後一時的に生存不適な環境になります。しかし、地球人が絶滅したあと、数十年を経ずして地球環境は完全に回復し、ふたたび瑞々しい地球に戻ることでしょう」

デカルトはメンバーたちの声を振りきるように声を高める。

「デカルト君。地球人が絶滅すると地球規模の環境問題の原因もなくなり、地球は元に戻るというのかね。きみは少々楽観的過ぎるのじゃないかね」

「そうでしょうか……」

デカルトは「地球にどんな仕掛けをしてきたかも知らないくせに」と言おうとして、彼をじっと見ている委員長の目に気付き、口を噤んだ。

委員長は口を閉ざしたまましばらくデカルトをじっと見ていた。だがその目は彼を通り越してもっと先を見ているようにも見える。

「じゃ、こうしよう。最初に、きみの仕掛けを聞こう。そのあとで、地球の現状と見比べて、きみの仕掛けが現在どのように機能しているかをわれわれが評価する。きみが地球の浄化期間をも計算に入れているというなら、すでにきみの仕掛けの効果も目に見えるものになっているだろうからな。これをもとに目標実現時期をチェックすることにしてはどうかね。それとも目標実現計画時期にこだわらずに、単純に、地球人たちの絶滅時期を予測してもいい。どうかね」

「それまでいろいろなことが起こると考えられるけれども……」

デカルトはできれば予測をしたくなかった。それに計画についての詳細な説明もなんとかして避けたかった。

「言いわけはもういい。想定されるいろいろなケースを取り上げてシミュレーションすればいいことだ。どんな仕掛けをしたのか、仕掛けの詳細な内容を話してもらおうか」

最後はデカルトを頭から押さえ付けるように、委員長は強く絶対命令の口調で言った。彼は口を閉ざしたまま、これ以上抵抗することができないとでもいうふうに、委員長の威圧する大きな顔を上目遣いに見上げた。

デカルトはふと、あのとき、召還に応ぜずに地球に留まっていたらどんなことになっていただろうか、と思った。そうすれば少なくともこんな不愉快な目にも会わずに済んだはずだ。

「とにかく、きみが地球に仕掛けてきたという仕掛けについて詳しく話してもらおうかね。仕掛けの具合によってはもう一度地球へ行ってもらうことになるかもしれないがね。そのまえに、きみの仕掛けがどのようにして目標時期に目標を実現しうるのか、もう一度詳細に説明してもらいたいのだ」

委員長の重々しく響く声には押し付けがましさと威厳があった。デカルトは上目遣いでちらりと委員長の凹凸がはっきりしない平たい大きな顔に目をやる。偉そうに構えた横柄な大きな面構え。彼の胸の内にむらむらと悪戯心が湧いてきた。

「いくら天才といわれたわたしでさえも、目標時期にぴったり合わせて『地球人の絶滅』という目標を実現することは至難のことです。ただできることといえば、十分なゆとりをもって目標時期までになんとか目的を達成することです。目標時期である五百年後までまだ数十年も残っていますが、多分それまでに地球人は絶滅するはずです。そのあと、地球上は急速に浄化されていくことでしょう。いまは目に見えなくとも、地球上では刻々とシナリオ通りにことが進んでいるはずですよ」

「で、どんなシナリオかね」
「日常的営為のなかで、地球人は自ら吐き出す『毒唾（マイナス）』で死に絶えることになる……」
デカルトはシャーレの培地で分裂を繰り返していたバクテリアが自分の分泌物で突然死に絶える瞬間をイメージした。地球人は自ら築き上げた文明（近代科学技術文明から発展した現代科学技術文明を指す、以下単に現代文明という）のもとで、永年、自分の欲する「プラス」を追い求める過程で発生する「毒唾」ともいうべき「マイナス」を自分の生活の場である地球環境に吐き捨ててきたのだ。
「その『毒唾』というのがいま地球に出現している地球環境問題ということかね」
「まあ、それもそのひとつということになりますか」
デカルトは『毒唾』と言ったが、特定のものを指すものではなかった。地球人が吐き出す自らを害するものすべてを指すのだ。
「それだけでは仕掛けについての詳細な説明にはなっていない。とにかく『毒唾』の仕掛けにはひとつ問題がある。地球人が絶滅したあとの地球環境の状態だ。地球人が死に絶えるほどだったら、その『毒唾』によって地球環境はかなり悪くなってしまっているといわざるをえないだろう。そんなところにM星人が大挙して移住して大丈夫か。デカルト君、きみは地球の自浄作用によって元に戻るというが、誰がこれをどうチェックするのかね。もっと詳しく仕掛けについて説明して、このような疑問を払拭してもらいたいのだよ」
委員長が薄気味悪い愛想笑いを浮かべて、じっとデカルトの顔を覗き込む。彼は嫌な予感がした。委員長はなにを目論んでいるのか。あの暗い闇のような目をした笑顔がくせ者だ。彼は一瞬気を引き締める。その一方で、また悪戯心が顔を出す。仕掛けを詳しく説明したところで、こんな老人たちに理解できるはずがないではないか。
「そんな心配は無用です。いまの地球は数十年も持ちません。ほどなく地球人は絶滅します。絶滅をもたらすほどに悪化した地球環境も目標の年までには必ずすっかりきれいになっていることでしょう。ですから、そのまえに、M星人の移住計画をスタートさせてしまっても大丈夫です。わたしが保証しますよ」
デカルトは調子に乗って、一言多かった。
そのとき、微かなノックにつづいて、ドアが開いた。黒い服を纏った一人の男が入ってきた。委員長の席に近づき、委員長に小さな紙片を手渡すと、そのまま背を向ける。委員長は皮肉な薄笑いを浮かべながら、鋭い視線をデカルトに向ける。
「そうかね。きみが保証するというのかね」
「いや、言い過ぎました。自分の仕掛けに自信を持っているので……」
「ことに最近、地球上で問題化しはじめている環境ホルモンと称されている内分泌撹乱化学合成物質はどうかね。極低レベルの濃度でも影響をおよぼすそうだね。他の化学合成物質との複合影響も考えられるそうだ。このようなこともきみのいう『毒唾』の仕掛けによってもたらされるものであろうけど、この種の化学合成物質によってすでに地球全域くまなく汚染されているというではないか。大気や水域、それに土壌はいうにおよばず、すべての生態系までがすっかり汚染し尽くされているというではないかね

……、そのうえ厄介なことに、これらの化学合成物質が生体内で濃縮され、それが生殖を通して、世代から世代へと汚染が引き継がれていくそうだね」

「……」

「きみは地球には自浄作用があるというけれど、大丈夫かね。M星人といえども、地球に移住すれば、地球の生態系のお世話にならざるをえない。汚染されたものを食する羽目になれば、長寿を誇ったわれわれM星人の平均寿命も現在の十分に一なって、地球人並になるかもしれないな。その結果、すでに生殖能力がかなり衰えたM星人はここにいるより、早く絶滅の危機を迎えることになるかもしれない。そうなると、なんのために苦労して地球を乗っ取るのか分からなくなってしまう。わざわざ絶滅を早めるために、地球に移住する必要は全然ない」

「内分泌撹乱化学合成物質ですか……、まあ、そんな心配は無用です。地球では自然がすべてをきれいに掃除して……」

「そうかね。きみはあくまで地球の自浄作用を主張するが、ではなぜ地球環境問題が発生したのかね。それともきみが責任をもってきれいに掃除してくれるとでもいうのかね」

「そうではなくて、現在『毒唾』の吐き出しが続いているから地球環境問題が起きているのです。『毒唾』の吐き出しが途絶えれば、地球の自浄作用がフルに機能し、これによって地球環境は次第に回復していく……」

「もしそうなるとしても、誰かがそれを確認する必要があるね」

デカルトは内心ですっ惚けたやつだと思っていた平たい大きな顔の委員長に自分がいつの間にか完全に嵌められていたことにようやく気付いた。

「それよりも、デカルト君。地球の環境をこれ以上悪化させない方法がないのかね。地球人が絶滅しても、汚染し尽くされてしまった地球では元も子もないからね」

「はあ……」

「そこでだ。もう一度、きみにご足労を願おうと思うがどうかね。目標が確実に達成すると保証するなら、もう一度、現地に行って、現状はどうか、自分の目で確認してきて欲しいのだ。ことに環境悪化の進行程度をね。地球人が絶滅したあとで予想される地球の状況をとくと調べて、われわれM星人が安心して住める環境条件を確保できるかどうかをこころいくまで確かめてきて欲しい。もし一寸でも疑問があるのなら、工作員としてのこれまでの経験を生かして、地球環境を現状より悪化させないで、なんとかM星人が地球に移住可能な道を探してきて欲しいのだ。地球人と共棲できるならそれでもいい」

「はあ……」

デカルトは曖昧な返事を繰り返し、どんなことを言われても地球には決して行くまいとを思った。ふたたび地球に行けば二度とM星には戻ることができないだろう。たとえさきがないといっても、地球で死ぬよりM星で死にたかった。

デカルトは委員長の大きな顔を見上げた。強い決意を示すように、委員長の薄い唇が一層薄く一文字に堅く結ばれていた。それでももう年だから代わりのひとを送って欲しいと彼は何度も哀願した。しかし委員長は大きな顔をゆっくり横に振って、地球人絶滅後の地球環境の安全性について自信をもって保証するといった以上、この仕事はそう請け負った本人がなすべきことだ、もし地球環境を現状より悪化させないほうがよいと分かった

場合にはその役割は仕掛け人こそ最適だと強く言い張り、彼の願いを決して聞き入れようとしなかった。

「一体、ここはどこだろう」

窓の外を見たとき、デカルトは一瞬パリだと思った。三百五十余年を経て、すっかり変わったのだと思った。だが暗灰色の空のもと、道路を行き交う車の列、街路に蠢く人の群れ、町全体が薄汚れて妙に慌ただしい感じがする。目に入るけばけばしい広告塔も以前と違う。広告の文字は初めて見るもので奇妙な形をしている。身体が震えた。

顔だけが妙に大きい委員長に再度呼ばれ、平たい大きな顔を目の前に突き付けられて目的地をボソボソした声で告げられたとき、デカルトは再派遣というショックとパニックで頭の中が真っ白になってなにも聞いていなかった。というより派遣先はてっきりヨーロッパで、前と同じパリ近郊に送られるものと頭から決めつけていたのだ。それ以外は想像できなかった。彼には委員長の声も耳に入らなかったし、取り立てて注意も払わなかった。もし別のところだと分かっていたら、即座に異議を唱え、行き先の変更を願い出たことだろう。

後の祭りだった。ここはパリでもヨーロッパでもなかった。デカルトはあれこれ思いを巡らすが、ここがどこか全然思い当たらなかった。

彼はなぜか、M星人たちの移住を見届けるまえに死んでしまいそうな気がしてならなかった。大体、地球人絶滅計画のもとで存分に汚染させてしまっている地球環境で地球人と一緒に生活すれば、清浄なドームの生活に慣れきったM星人の彼は地球人より先に命を落とすことになることは決まっている。もし運良く命を永らえることができても、地球人が絶滅するときには彼らと運命を共にすることになるのだ。

委員長に謀られ、ついいい気になって口を滑らしてしまったことを後悔した。わが身を呪いながら、彼はぼう然と窓辺に立ち尽くしていた。ようやく覚悟を決め、なんとか最善を尽くすほかないと思い直し、彼はカーテンから身を翻して、電話のある壁際の机に取って返す。

受話器をとった。

「え？　トウキョウ？？？」

「そうですが……」

「あの極東の……、東京ですか」

受話器を耳に当てたまま、デカルトは棒のように立ち尽くし、何度も「トウキョウ」と呟く。

耳元で自分の声がこだまする。

彼は無意識のうちに机の蓋を開け、鏡を立てた。

鏡いっぱいに大きな顔が映し出された。自分のものと思えない奇妙なつくりの顔を彼はしげしげと見た。全く血の気のなく、まるで死人のように白い顔。頭からブラウンがかった灰色の頭髪が肩まで長く延び、濃いまゆ毛が出目気味の大きな目のうえで幾分離れて大きな弧を描いている。間延びした両目の間には大きな鉤鼻が聳え、鼻先がヒゲで埋もれている。ヒゲは大きな口の近くまで長く伸びていた。一言で言えば、纏まりのない大まかなつくりの異相で、死の影さえちらついて見える。

彼はしばらく鏡のなかの自分の顔を珍しそうに見つめていた。持て余し気味の長い髪が邪魔だった。いっそのこと短くカットしてしまおうかと思っ

た。だがそれも面倒くさく、彼は乱暴に後ろに束ねてしまう。

地球への出発が決まると、デカルトはM星を離れるまえから、密かに、委員長の命令とは別の道が残されていないかと考えていた。命令された「地球人の絶滅」計画の進行状況の調査や「絶滅後」の地球環境の安全性チェックとは別に、彼は考えうる他のいくつかの代案を取り上げ、脳の回路にセットした。強制的に冬眠状態に入れられるまえに、彼は眠っている間を利用して代案の問題点をチェックし、これらを比較考量するためであった。脳の回路は冬眠中でも働き、長い眠りから覚めたとき、結論が出ているはずだった。だがこれには「トウキョウ」をインプットしていなかった。

すべてを初めからやり直さなければならなかった。

デカルトにとって、東京は初めてだった。三百数十年前、ヨーロッパ中を歩き回ったが、結局、ヨーロッパから一歩も出ることがなかった。オランダには随分長い間逗留したが、あのころ、ヨーロッパではオランダが一番隆盛を誇っていた。アムステルダムやロッテルダムなどオランダの港には大きな帆柱を持った外洋船で満ちあふれ、そのなかにインドや日本から帰ってきたという大きな船もあった。さまざまな人種が集まり、なかには長崎から来たという日本人もおり、街は年がら年中騒々しく、活気に溢れていたような気がする。

ふと、あのときのような活気が窓の外の世界にもあるように感じた。そう思ったとき、あの忌忌しい委員長がなぜ東京を選んだのか、デカルトはその理由が理解できるような気がした。

人々の活動が激しく人口密度の高いところはエネルギーや資源の消費量も多く、また環境に対する負荷も大きいところだ。東京は人口密度も高く、地球でも一、二を争う経済活動が盛んなところだ。となれば、エネルギーや資源の消費が多い東京は環境悪化が酷く激しいところに違いない。委員長の奴、エネルギーや資源の大量消費と環境悪化の最先端にある東京と日本全体の状況をチェックして回れば、将来の地球の姿が見えてくると考えたにちがいない。

それに環境問題に満ちた一番酷い環境の東京に高齢のデカルトを送り込めば、たとえ彼がどんなに抵抗を試みようとも、彼をモニタリングするだけでM星人移住計画に必要な安全性に関する貴重なデータを手にすることができるというものだ。彼の東京滞在そのものが悪化している地球環境における生身のM星人による生体実験であった。

デカルトはふたたび窓辺に立ち、レースのカーテン越しに外に目をやり、三百五十数年前自分が仕掛けた仕組みをもう一度思い返した。地球人に対して自滅するように仕向けた仕掛けが三百五十数年後のいまどんな結果をもたらしているだろうか。そう思うと、彼は激しい興味を感じ、居ても立ってもいられない思いに駆られた。

デカルトはM星で仕入れた情報をもとにおぼろげながら地球の現状について一応知っていたものの、現実にいま地球になに起きているのか、地球と地球人は一体どのような状態にあるのか、一度徹底的調べてみたいと思った。だがどうすればいいのか迷った。なんの備えもなしにふいに外に出ていっていいものか、汚染した地球環境に身を曝した途端、取り返しの付かないダメージを受けやしないか、不安だった。

かといって、いますぐ仕掛けをストップする必要があれば、どうしてもそのまえに彼の仕掛けによって生じた地球上の変化を自分の目で実際にチェッ

クしておかなければならないのだ。そうしなければ、果たして仕掛けをストップすることが可能か、いま仕掛けをストップすれば地球環境をもとに戻せて、自分の身も安全に保てるか、その辺のところを詳しく評価することはできない。だが彼にとって、M星で手に入れていた地球の最新情報よりもさらに詳細で新しい情報をどのようにして手に入れるかが問題だった。

思い悩んでいると、デカルトはふと背後に微かなエネルギーを感じた。彼はゆっくり体を回した。

部屋の片隅に、彼と一緒にM星から届けられた大きな鞄があった。彼は鞄を開けたが、とくに変わったものはなかった。M星で愛用していたものだったが、一緒に運ばれてきたものすべてが地球仕様に変更されているはずだ。

鞄から小型の端末を取り出すと、デカルトは辺りを見回し、インターネットの接続端子を探した。

突然、デカルトの脳裏にクリスティナの白い裸身が鮮明に浮かんだ。

「クリスティナ」

デカルトは思わず声を出した。

あれからすでに三百五十数年の歳月が流れているのに、こうも鮮明な映像が結ぶとは一体どうしたことか。クリスティナがどこかで生きているのだろうか。もし彼女が生きていれば、よろこんで彼の手助けをしてくれるにちがいない。彼は胸の奥から温かいものが湧いてくるような不思議な気分に襲われ、しばし呆然と立ち尽していた。

2

委員長はメンバーを臨時の喚問室となった会議室から離れた奥まった一室の導いた。天井が高く、一種荘厳な雰囲気が漂う喚問に用いた会議室に比べ、飾りひとつない質素な造りで壁に囲まれた窓のない地下牢のような小さな部屋で、部屋一杯に大きな円卓がひとつぽつんと置いてある。薄暗い照明も陰謀や秘密の相談にはもってこいの雰囲気を醸し出していた。

「さて、諸君、そろそろ地球への移住の最終決定と出発の時期を決めなければならないが、これに先だって地球の現状をどう把握するか……」

委員長は大きな顔をゆっくり動かし、メンバー全員が円卓の席についたことを確かめるように、左から一人ひとりの顔を見回していく。委員たちは委員長と同様に、口は小さく、目だけが異様に大きいが、なぜか顔は委員長に比べて一回り小さい。

「そこで、委員メンバー諸君。前衛基地から地球の現状についての報告が届いているが、どう評価するかね。デカルトの調査報告をまってこれを検討するほうがいいのだが、いつ報告が届くか分からない状況だし、まず、前衛基地報告をチェックして、もし必要があれば、デカルトに対して新たな任務を追加要請することも考えられる」

委員長はデカルトの不貞腐れたような態度が気になっていた。デカルトを半ば強制的に地球に送り出したものの、彼が果たして熱心に任務を遂行するか不安だった。

それにしてもデカルトがとうとう最後まで仕掛けの詳細な内容を伏せて決して明らかにしようとしなかったのはなぜなのか。仕掛けの詳細を明ら

かにしなければ地球へ再派遣されることはないと踏んでいたのか。
　委員長はもう一度円形テーブルの席に着いている委員たちを一人ひとり見回した。
「ところで、われわれにはあまり時間が残されていない。一刻も早くつぎの行動についての結論を得たいと思っている。たとえデカルトの仕掛けが功を奏して、計画通りに地球人が絶滅したとしても、まえにも指摘したように、いまひとつ心配なことがある。地球人が絶滅したあとの地球のことだ。果たして、デカルトが言うように、地球人の絶滅後、短時間のうちに、M星人が生存可能な地球を取り戻すことができるかどうか……、前衛基地からの報告によると、地球ではいま、地球人がつくり出した残留性の高い有害化学合成物質が地球全体に広がり、これらによる環境汚染がことのほか酷いらしいが……」
　委員長はメンバーの注目を意識して、大きな顔の角張った顎のあたりを小さな手の平でゆっくり撫で回す。それからおもむろに口を開き、話をつづける。
「このような地球の現状についてどう考えればいいのか。それにこの報告によると、いま地球社会は『グローバル化』の嵐の真っ只中にあるようだ。このことがデカルトの仕掛けとどのような関係があるのか。この辺をどう理解すればいいのか……
　地球は地表の七〇パーセントが海で、残りの三〇パーセントが陸地だ。地球表面の三分の一しかない陸地に、現在七〇億に近い地球人が生活している。そこを二百もの主権国家が分割領有支配しているのだが、これらの国々の国境を超えて、いま『グローバル化』の嵐が吹き荒れている。これによって諸国間にあった国境が消失し出している。一体、このさき地球はどうなるのか……
　地球におけるこのような現象をどう見たらよいのか。これがデカルトの仕掛けによるものか、彼にも確かめてみようと思っているが、諸君はこれをどう考えるかね。このさき地球はどうなると思うかね。とにかく、いま、地球人の社会は急速に変わりつつあるようだが……」
　地球はネットワーク社会に突入し、インターネットで覆われた地球社会は情報技術革命の真只中にあった。二十一世紀を迎え、世界はかってないスピードで変貌を遂げている。資本は新たなフロンティアを求めて国境を飛び越え、世界の隅々までグローバル化を押し進め、市場という独裁的権力を行使し、市場経済に都合よく構築された巨大な世界経済システムをつくり出しているのだ。
　新しい世界経済システムでは、国家に変わって、巨大企業、コングロマリット、金融グループなど市場権力を掌中しているグループがわが物顔に闊歩し、世界制覇を企てている。そこでは目標が領土の獲得から富の占有に代わったものの、かっての植民地時代と同じように、力による征服・支配がキーワードだ。その結果、資本は政治権力を従え、企業や組織体は国家を超えて巨大化を目指す。その行着く先は少数の巨大企業、コングロマリット、金融グループなどによる絶対的な権力の出現か。
　さらにいま、情報技術革命は遺伝子操作から生命自体の操作を目指して新たな段階を迎えようとしているのだ。人間ゲノムの解読が進み、遺伝子操作から『万能細胞』である胚性幹細胞（ES細胞）による臓器や組織の生産、そして生命の創造へと進む遺伝子工学の新技術が私有化され、ヒトの

生命自体が私的所有物と化しつつある。究極的には生命そのものが私的支配の対象となることだろう。

「さて、諸君、地球の現状をどう評価しますかね」

委員長はもう一度けしかけるように繰り返すと、発言を促すように居並ぶメンバーの一人ひとりに目を向ける。

「問題はこのような現状がどのようにデカルトの仕掛けと関係しているかではないでしょうか。こんな地球人でもデカルトの仕掛けであえなく絶滅することになるはずですからね」

メンバーの一人が恐る恐る低い声で言う。

「いや、デカルトの仕掛けの結果こうなったのか、それとも彼の仕掛けと関係なくそうなったのか、分からない。そのいずれかで地球人絶滅の可能性に対する評価が変わってくるということですかな」

「デカルトの仕掛けとは無関係に現状を評価することも可能でしょう」

別のメンバーが異を唱える。

「それじゃ、あなたは現状をどう評価しますかね」

委員長は鋭く一瞥を与えると、ことさら穏やかな声を出した。デカルトの仕掛けと関係させて評価するとなるとややこしいことになる。

「えーと、それは……、なぜ地球がこうなったかと考えますと、デカルトが派遣されたころは武力が富の源泉だった。武力で獲得する領土を植民地とすることで富を獲得していたが、一八三〇年ころから始まった産業革命で資本家が生まれた。まあ、それからいろいろなこともあったが、とにかく、彼らは共産主義との戦いにも勝ち残り、資本主義が今日に至ったということでしょう。資本主義が現在どのような発展段階にあるか、その将来はどうかという評価については……」

「一寸古いが、ここにこんなデータがある」

新しいメンバーが議論を遮るようにメモを片手に立ち上がる。

「地球上では現在、一分間ごとに、アメリカン・フットボール場六〇ヵ所分の熱帯雨林が消失し、貴重な土地がほぼ〇・五平方キロメートルずつ砂漠化している。また一分間ごとに、飢餓や栄養失調で二十三人の子供が死んでいる」

「いったいいつのデータかね」

「ワールドウオッチという研究所が集計した一九九九年のデータです。こんなものもあります。一分間ごとに、農薬中毒で五十人が死んでいった。暴風雨は地球温暖化や森林破壊など人間活動の影響によって一層スケールアップしているが、一分間ごとに五百七十人が風水害などのために住まいから避難しなければならなかった」

「すると、資本主義というのは段階が進めば進むほど、社会や環境の状態を悪くするというものかね」

「地球がいま酷い状況にあるということは確かなんですか。地球上に現に七〇億もの地球人が生存しているということはどういうことですか」

「もし環境条件がそんなに悪化しているのであれば、人口が減っていくと考えられるのに、反対に増加しているとすれば、これをどういうふうに考えればいいのですかね。どうもわたくしには信じがたいことですが……、本当は地球環境がそんなに悪くないんじゃないんですか」

「環境悪化が急激に訪れたため、人口への影響はこれから現れるのかもしれませんよ。地球人の世代交代には一、三〇年必要ですから……」

「ここにきてだいぶ人口増加率が低下しているというデータもある」
「地球上では現在石油などの化石燃料を大量に燃焼しているが、一分間ごとに燃焼されているエネルギーを地球上の植物が生産するとすれば一万倍の一〇〇〇〇分（一六六時間四〇分）も必要だそうだ」
「『グローバル化』のもとで地球上の隅々までに張り巡らされた大量生産大量消費大量廃棄型の資本主義経済システムは大食漢で、つねになにかを食べて成長しつづけていないと死んでしまうらしい」
「となると、地球上の化石燃料はいずれ枯渇するということになるわけですな」
「化石燃料だけじゃない。資源全般が枯渇の運命にある」
「その結果、地球上では地球環境問題がとくに大きな問題となっている。資源の大量消費が地球環境を悪化させているのだ」
「やはり、デカルトの調査報告を待つほかないですかね。大量生産大量消費大量廃棄型資本主義経済システムの『グローバル化』でデカルトが言っていた『毒唾』が地球中に大量に吐き出され、地球の隅々まで拡がり、地球環境が急速に悪化しているらしいが、これをどう評価するかだね。絶滅に至るような地球人同士の戦争はいつ起こるか分からないが、日常的に地球人が『毒唾』を吐き続けるなら、時間とともに『毒唾』による環境悪化は確実に進むことだろうからね。これが決め手ということかな」
　委員長は一同を見渡した。この最後の一言が延々と続く議論の終止符となった。委員たちは自尊心を傷つけられたのか、議論が急速に収まり、一瞬、小さな会議室に静寂が支配した。委員たちは自分に非難の矛先が向けられ、無能のレッテルが張られることを恐れるかのように、一様に委員長の視線を避けた。
「委員長」
　一人が手を上げた。最古参の委員だった。
「デカルトは『地球人の日常的営為のなかに、地球人絶滅の構造を組み込んだ』と言っていましたよね。地球人の目ぼしい日常的営為と吐き出される『毒唾』とおぼしきものを関連させて問題点を検討して見てみてはどうですかね……」
「ああ、そうですね」
　うるさ型の一言居士をあまり刺激しないほうが得策というふうに、委員長は穏やかに応える。
「前衛基地から報告してきた地球の現状についてチェックするなら、デカルトの仕掛けのこうした構造と関係させてチェックすべきだ。こうすればデカルトの工作に対する評価にもなるから」
　もう一人の委員が追従する。
　委員長はほかに意見がないかというふうに、他の委員を見回す。委員長にはデカルトの仕掛けがよく分からなかった。地球人絶滅を日常的営為のなかに構造として組み込むといってもこれがどのようなことかよく理解できなかったし、またなにを意味するのかさえ分からないのだ。大体、地球人の日常的営為がどのようなものかも知らなかったし、それらが相互に相乗して作用するのか、それとも相殺してしまうのか判然としない。
「デカルトのいう『毒唾』の意味するところは必ずしも判然としないが、一応『毒唾』が地球環境の悪化をもたらすものということに限定して地球環境悪化に関するものを中心に見てみることにしましょう。念のために、

これに関連すると思われる問題や派生する問題まで広げ、これらを重点的にチェックすれば十分でしょう」

委員長は早々と結論付けるように言い、委員たちの頷く様子を見て、先に進める。委員の間にも幾分緊張が和らいだ雰囲気が漂いはじめた。

「環境悪化とは環境問題のことですかね。とすると『毒唾』によって地球人が絶滅するケースは、地球人を取り巻く環境が『毒唾』で生存に適さないまでに劣悪化する場合ですかね」

「そんなとこでしょうな」

「どんなケース？」

「最近では、地球環境問題という、地球人の日常的営為によって地球的規模で環境が悪化するさまざまな現象が出現しているらしい。地球温暖化とか、海洋汚染とか」

「環境悪化といっても、これには環境の『状態』を悪化させるものと環境の『機能』を悪化させるものとがあるようだ。大気や土壌の汚染といった環境状態を悪化させるタイプと、環境を構成しているものを著しく増減させて環境を撹乱させたり破壊したりして生じる環境機能を悪化するタイプだ。たとえば、有害化学合成物質による環境汚染が前者の例だし、現在地球上で大問題化している地球温暖化は後者の例だ」

「地球温暖化は大気中の二酸化炭素濃度が著しく増加することによって生じる地球気候システムの撹乱であるし、オゾン層破壊は上層のオゾンが減少して有害紫外線をカットする機能が阻害されたものだね」

「要するに、地球人の日常的営為によって地球環境の状態や機能が損なわれて地球環境条件が劣悪化し、地球人の生存に適さないようになるということだな。ということは、何度も言うが、そのように劣悪化した環境はわれわれM星人にとっても生存に適さない環境条件じゃないのかね」

「デカルトは地球には浄化能力があると言っていたが……」

委員長の脳裏を疑問が過った。もし地球環境に自浄作用があるなら、なぜ「毒唾」から環境問題が生じるのか。地球人の日常的営為によって毎日のように吐き捨てられる「毒唾」といえども、地球に自浄能力があるならば地球規模へと拡がるまえに浄化されてしまい環境問題が発生することにならないのではないか。それとも地球の浄化能力には限りがあって、それを超えて「毒唾」が吐き出されて地球環境へと拡がる結果、「毒唾」による地球環境問題が発生するというわけか。とすればその「毒唾」は猛毒でなかなか分解されない長寿命な厄介なものにちがいない。だから吐きだされた「毒唾」は浄化されることなくそのままえんえんと地球規模に拡がっていき、地球環境を汚染させていくのだろうか。

「有害な化学合成物質、ことにＰＣＢとかダイオキシンといった毒性の強い残留性のある有機化合物による汚染が地球規模に広がって、地球の果てまで汚染してしまっているというが、これらの残留性の高い物質が果たして完全に浄化されるかどうか問題だ。どうしてもデカルト自らの生体実験によるチェックが欠かせないのでは……」

「一体、地球人はなにを考えているんだ。こんなことはわがM星ではありえないことだが……」

「地球人の三分の二が住んでいる都市の環境はすっかり悪化している。大気、河川や湖沼などの水域、土壌はさまざまな重金属や化学合成物質で汚染され、住民の健康を阻害し出しているそうだ」

「なにも都市だけではない。北極から南極の果てまでいたるところで水銀やＤＤＴといった有害な重金属や化学合成物質が検出されているし、海洋全体が汚染され、そこに棲息する魚介類もすっかり汚染しつくされている」
「ダイオキシンなど環境ホルモン（内分泌撹乱物質）といわれるものの汚染が問題だ」
「さきのことは別として、いま問題だと思うことは、残留性の高い有害化学合成物質による汚染だ。それらの複合汚染がさらに問題だ」
「ことに内分泌を撹乱するという環境ホルモンの問題が重大だ。これによって、いま、地球人の生殖機能がじわじわと冒されていっている。これがいずれ地球人を絶滅させることになると思う。これが地球環境にいつまでも残留し続けるとなれば、われわれＭ星人にも影響をおよぼすことになるかも」
「生殖機能障害だけではない。神経系にも影響を及ぼしているらしい」
「地球人はむやみやたらと人工的に化学合成物質をつくり出し、なんらのチェックもせずに環境中に放り出している。オゾン層破壊をもたらしたフロン（クロロフルオロカーボン）の場合もそうだった。このような環境汚染によって地球人が絶滅するとすれば、そのあとに乗り込むＭ星人にこれがなんらの影響も与えないということがありうることだろうか」
　ＰＣＢ（ポリ塩化ビフェニール）は意図的に製造された化学合成物質であり、ダイオキシンは燃焼過程などで生成される非意図的生成化学合成物質である。ともに強い毒性があるうえ、なかなか分解されにくく、大気や水域を移動して地球上に拡散する。生態系のなかで食物連鎖を通して濃縮され、動物や人体に摂取されると脂肪組織に蓄積する。体内に蓄積されたＰＣＢやダイオキシンといった化学合成物質は胎盤や母乳を通して次世代に引き継がれていき、染色体異常、先天異常、白血病などの増加を招く。またこれらの化学合成物質のなかには内分泌撹乱作用をもつ物質（環境ホルモン）が多く、この種の作用はごく微量でも影響が生じ、動物や人体に生殖障害や神経障害などを引き起こすのだ。現に、この種の化学合成物質であるＤＤＴの影響で、フロリダのワニのペニスが成長を抑えられ、小さくなって生殖能力が奪われいる。ＰＣＢやダイオキシンにも同様な働きがある。人体においても新生児に尿道下裂などの生殖器障害といった異常が多く見られるようになっている。
「デカルトが仕組んだ仕掛けによって地球人が惑わされた結果、こういうことになったんだろうか」
「地球温暖化だって問題だ。これによって地球気候システムが完全におかしくなってきている。気候システムのような巨大なシステムは一度撹乱しだすとなかなか収まらないものだ。地球上では今後何百年何千年にわたって大雨や日照りなど異常気象が頻発する」
「そういえば方々で飲み水が不足しているというではないか」
「それだけではないよ。農業用水が足りないので地下水を汲み上げて使っているが、それが枯渇しはじめているところが出ている。それに地下水を使いつづけると、そのなかに含まれている塩分によって農地が使いものにならなくなってしまうが、こうしてダメになった農地がすでにかなりの広さに達しているというではないか。これでは森林を伐採して新たに農地をつくっても追いつかない」
「森林を伐採してはダメだ。そんなことをしても追いつかないようだ。そ

れに家畜の過放牧によって、草を根こそぎ食べ尽くし、土地を痛めつける結果、いたるところで砂漠化が進んでいる」

「なんと言ったって、これから地球がどこまで温暖化するかが問題だな。地球では石油などの化石燃料を湯水のように使っているから、今後大気中に二酸化炭素などの温室効果ガスがどれほど蓄積していくか分からない。それにある限度を超えて地球温暖化が進むと、海水中に溶解している二酸化炭素が大気中に吹き出してくる。そうなると、地球の気温が一挙に上昇して、地球が灼熱地獄となってしまう。こうなっては、たとえ地球人が絶滅しても、われわれM星人も住めない地球になってしまうかもしれない」

「むやみの暑いのもこまるが、それよりも温和だった気候が気まぐれな暴れものに豹変して、地球上いたるところで暴風雨が荒れ狂い、洪水が頻発している」

「干ばつもそうだ」

「温暖化で地球上の熱分布が狂いだすと、逆に、寒冷化するところも出てくるんじゃないかな」

「温暖化の果てに寒冷化か」

「それにオゾン層の破壊が進んでいる。とくに南極の上空のオゾン層には巨大な穴が空いて有害紫外線が洩れてきているそうだ。これが広がると、地球人を含む地上の生命体が破壊される。北極にも穴ができているらしいぞ」

「地球環境問題の影響にも急性のものと慢性のものとがある。もっとも、地球環境問題といっても地域的にかなりの違いが生じているが……、いまのところ地球全域規模での急性影響はまだ見られないようだが、今後はどのような状況が現れるか全然わからない」

「オゾン層破壊によってかなり広範囲にわたりじわじわと急激な影響が出てくるだろう」

「とんだ『毒唾』だが、後遺症の問題もある。これはあとでさらに詳しくチェックすることだ。まず、ここで検討すべきことは、デカルトの仕掛けた環境悪化が予定通り『地球人の絶滅』をもたらしてくれるかどうかということだ。それと、このような環境悪化よって当然地球上で引き起こされる問題群について併せて検討しておくべきでしょうね。デカルトは当然計算に入れていたことだろうから」

委員長は委員たちの議論を整理するように言う。

「デカルトは『毒唾』による直接の影響とこれから派生するもろもろの間接的影響が相乗して『地球人の絶滅』をもたらすというシナリオを描いていたということですか」

一人の委員は感心したように言った。

「他にどんな問題があるかな」

委員長は気のない声で言う。それからおもむろに大きな顔を上げて、メンバーを見渡す。

しばらく静寂が会議室を支配した。それが過ぎると、委員同士が再び勝手に話しだした。

「地球温暖化が進むと、豪雨や干ばつなどの異常気象で食糧生産量が激減するだろう。それなのに最近になって、地球人の人口が爆発的に増え出している。これは環境問題以上に問題だ。爆発的人口増による環境負荷のため環境がますます悪化するわけだ」

「デカルトがヨーロッパを動き回っていたころはまだ五億人に達していなかったらしいのに、戻ってきた一六五〇年ころには五億五〇〇〇万人になった。二百年前の一八〇〇年には九億一〇〇〇万人程度、それが百年前の一九〇〇年には一六億人、それが一九七四年になると三七億人、一九九九年には六〇億人を超えてしまった。一体、どうなっているんだ、地球人の激しい繁殖能力は。M星人も見習わなければ」

「いや、あれは絶滅寸前の悪足掻きといった感じだな」

「はじめのうちは食糧生産も増加し、これに応じて、地球が養いうる人口も増えていくことでしょう。それに医療や公衆衛生の向上による乳児や幼児の死亡率低下も人口急増の要因のひとつだ。所得の低い貧しい国においてはひとりでも多くの働き手を欲しがるため出生率が高いが、そのうえ乳児や幼児の死亡率が急激に低下するようになれば人口が爆発的に増えることになる」

「たしかに、地球ではこの数十年の間、高所得の国々ではむしろ減少の傾向にあるのに、低所得の貧しい国を中心に人口が爆発的に増えている」

「だがこれは全く異常な増え方だよ。単に乳幼児の高い死亡率が改善されたせいかね。別の原因が考えられないのかね」

「地球人が大繁栄期に入ったのではあるまいな」

「まさか、現在すでに人口の三分の一が食糧不足に悩まされている状況だし、一部では飢餓状態にさえある」

「食糧生産量が頭打ちになってから一五年以上になるらしい。なんでも、これまで肥料を大量投下すれば食糧を大増産できていたのが、一九八四年を境に、肥料を増やしても生産量が増えず、逆に、減り始めたということだ」

「爆発的に人口が増えれば、それに応じて食糧が増産できないと、当然、食糧不足になってしまう。地球温暖化による気候変動が食糧生産に影響を及ぼしているので、人口爆発はますます重い負担になっていく。いずれ致命的になるかも」

「当然なことだ。で、デカルトの仕掛けとの関係だが、人口爆発もそのひとつなら、食糧の無限な供給を期待させて地球人に自ら人口増加に励むように仕向けたということかね」

「いや、デカルトは地球人が自然の生物界における個体数調節作用を免れるような仕掛けを仕組んだのじゃないんですか。それで地球人の個体数、すなわち人口が爆発的に増えると当然食糧不足になる……、彼は人口増加と食糧不足をセットとして考えたのでしょう」

「となると、これもあまり当てになることではないね」

「でもある種における個体数（人口）の爆発的増加は往々にして当該種に絶滅をもたらすことがある」

「ただ、地球人の場合は地球上に広く分布しているので、地球人が全域にわたって全面的に絶滅にいたるとは一寸考えにくい。それに人口が爆発的に増加している地域は所得水準の低い低開発の貧困国だ。高所得の富裕国では人口増加率は低下して人口を維持することすら難しくなっている。とにかく地球人口は地域的にアンバランスな状態だね」

「じゃ、これも当てにすることのできない博打的な仕掛けということになるのかね」

委員長の顔に失望の色が浮いた。

「どうして彼らは生産できる食糧に見合った人口に調節できないのかね。地球人の行動にはわれわれの理解を超えるところがあるらしいな」
「食糧が不足すればどうなるんだ。漫然と餓死するのを待っているというわけでもあるまいし……」
「そりぁ、地球人同士で食糧の奪い合いがはじまり、必死の食糧争奪戦がいたるところで頻発することになるだろう」
「戦争か」
「まあ、そうだ。局地的な紛争が方々で起きるが、もしかしたら地球規模の世界大戦争となるかもしれない」
「では、戦争による地球人絶滅の可能性は……」
委員長は急に熱くなった議論に水を差す。
「それは期待できるかも。地球では地球人を全滅させるような巨大な大量殺戮兵器として大小さまざまな核兵器が開発されているし、通常兵器の破壊力も極大化しているそうだ。これらはすでに実戦用に配備されているので、戦争による地球人絶滅の機会が増大していることは事実でしょう。それに兵器は核やミサイルだけではない。貧しい国でも生物化学兵器や地雷など安価な兵器が開発されているらしいから、ひとたび戦火が地球全域に拡がれば、地球人は一気に全滅するかもしれないね」
委員長はいつもの調子を取り戻して、委員の面々を一人ひとり見渡す。これに応えるように、男か女が判然としないひとりのメンバーがかすれた声を発し、ボソボソと話し出す。
「デカルトが召還されたころから一七八〇年にかけての百数十年間、ヨーロッパの列強は海洋に出て未知の世界の発見と探検を繰り返し、植民地化と政治勢力の拡大を通して大規模な領土併合を行なった。この時期には人口と経済が急成長し、科学や芸術の分野も大いに発展を遂げたようだ……。一八世紀末から一八三〇年にかけて、革命がいたるところで勃発する。そして地球社会は近代秩序の夜明けを迎えることになる。一八三〇年から一九一四年まで帝国主義の時代、一九一四年から一九四五年までの世界戦争の時代、そして戦後から共産主義対資本主義の東西冷戦時代を経て現在まで、という時代に分けて概観すると、大戦争の度ごとに、科学と技術が密接に結びついて科学技術が飛躍的に向上していることが一目瞭然だ……」
「そうだ。黒色火薬からダイナマイト、そして核分裂や核融合へと破壊力が増大するなかで、鉄砲から大砲、ロケットからミサイル、原子爆弾など、これらを利用した兵器が開発され、各国の軍事力が巨大化高度化の道を歩んでいく。二度目の世界大戦後における東西間の冷戦時代に核兵器の巨大化高度化が進み、アメリカ、ロシアなどにおいては何年も前から、弾道ミサイルや巡航ミサイルを運搬手段とする大量殺戮兵器である戦略核兵器が配備されて世界中の大都市に照準が合わされているそうだ。その結果、一端世界規模の核戦争が勃発すれば、大都市は一瞬のうちに破壊尽くされ、爆発時に飛び散った放射能を帯びた死の灰が空中高く舞い上がる。太陽光線が遮られ、地球上に降り注ぐ死の灰は地球全域をくまなく汚染していくだろう。生き残った地球人もつぎつぎに死んでいく。あらゆる生命は放射能に汚染され、地球人は絶滅することだろう……」
「このほかに、核兵器のように巨大な物理的破壊力をともなわないものの、核に代わる貧しい国の大量殺戮兵器として化学兵器や生物兵器の開発も着実に進んでいるらしい。とにかく、地球上にはすでに地球人を何度も殺戮

できる大量の兵器がつくり出され、現在、各国が大量に保有している。これもやはり、デカルトの仕掛けの効果と言っていいのではないかと思う。彼の仕掛けがこのような結果を生み出している」

委員長は話し終えたメンバーらを労るように、じっと目を凝らして彼らをしばらく見ていた。

「……ということだが、ほかに意見はないかね」

「兵器の破壊力は仕掛け通りに極大化したとしても、地球全体を巻き込む大戦争はいつ起こるのか。もしかしたら、地球上では大規模の大戦争が二度と起こらないかもしれない。核抑止力という概念があって、各国間では互いの牽制しあっているようだから」

「そう単純じゃないんじゃないか。核抑止は核の反撃がありうることを相手が知っているから機能するものだ。そのためには核兵器を実戦配備するとともに常にチェックし開発改良を加える必要がある。とすれば偶発する危険もあってかえって危険性が増すことになりかねない」

「かといって、即大戦争が起こることにはならない」

「もし大戦争が勃発しなけりゃ、この仕掛けも『絵に描いた餅』ということになる」

「これでは『地球人の絶滅』がいつになるか不明だ。この仕掛けは一発で『地球人の絶滅』をもたらす可能性があるが、不発となる可能性も大いにあるということか」

「じゃ、これも大博打タイプということかね」

「でも、戦争が一番手っ取り早い。それに食糧不足だけが戦争の原因じゃないし……」

「地球全域が戦場となったとしても、一瞬で地球人が全滅するとは限らない。核戦争になれば強烈な放射能汚染が地球上を覆い尽くすことになるだろうし、そうなれば後処理が大変だ。地球全域にわたる放射能汚染のため、いつまで待ってもM星人が移住できないこともありうる」

委員長は委員たちの発言に耳を傾けながら、次の問題に移るころ合いを見計らっていた

「生産力が増大し消費量も増えれば、いつかは資源枯渇に当面するのは当然のことだ。だが資源を循環して利用するとか、あるいは代替物を開発するとかすれば資源が枯渇する時期は遠のく。資源が枯渇する事態ともなれば、戦争を誘発することになるかもね」

「科学技術を基本とするヨーロッパ文明は別名エネルギー文明あるいは物質文明といわれている。いまやこのヨーロッパ科学技術文明が世界文明化し現代文明を形作っている。これが原動力となってアメリカ流の大量生産大量消費大量廃棄が世界に広まり、世界中がいまや大量生産大量消費大量廃棄文明化して、資源を浪費し大量のゴミをつくりだしているようだ」

「地球が有限なものである以上、地球の資源も有限であることは当然で、大量消費をつづければ資源はいずれ枯渇することになる。このことは当然のことだ。だが問題はドンピシャリに資源が枯渇して、これによって『地球人の絶滅』が期待通りに実現するかだ」

「多分、そうはいくまい。地球上での資源分布や地球人の生存域を考えれば、資源枯渇が核戦争のように一発勝負というわけにはいかないだろう。資源が枯渇し、これによって地球人が絶滅するまでにはかなりの時間がかかるだろう」

「資源枯渇といっても、絶対的な枯渇だけではなく、それにいたるずーと前から相対的な枯渇という状態も考えれらるが……。現在、すでに相対的に枯渇の状況にある資源もあるようだが……」

「もちろん、資源枯渇以前における資源の逼迫状態のことを考えても、これによっていとも容易く地球人が絶滅するとは考えにくい」

委員長は委員たちの資料を捲る音を耳にしながら、外の様子を窺うような目つきをしてドアに目をやる。

「資源には再生が可能なものもあれば、再生が不能なものもある。また代替可能なものがあれば、そうでないものもある」

「現在、人口が増加している低開発国では水、草木（飼料用、燃料用）、土地（耕地）などの再生可能な資源が失われ、枯渇し出している。森林生態系の破壊や人口増加が原因だ」

「ではこの辺で、つぎはなにかね」

委員長は発散し出した議論を抑えにかかる。

「温暖化が進めば、マラリアも広がることだろう」

「マラリアなどを媒介する病害虫が生息域を広げ、罹病率も高まることになるので、デカルトはこれらの影響も加算して仕掛けを仕組んでいるのでしょう」

「文明が進んでいるはずの地球社会において、最近、なぜか新顔の殺人ウイルス、耐性をもった病原虫や菌が増え出し、大きな脅威となってきている」

「現在、エイズという感染症が猛威を振るいだしている。それにインフルエンザも侮れない」

「ウイルスが地球人を滅ぼすというのか」

「ＳＡＲＳという新顔もある」

「ジェットなどの高速交通網による人や物の移動に付随してウイルスや病原菌までが世界各地に運ばれ、各種の感染症が地球上で爆発的に蔓延することになるのだ。地球では文明の進展が感染症を防ぐよりも、逆に蔓延を助長させている」

「これもデカルトの意図ということかね」

「デカルトはさまざまな医薬の開発や医療技術が高度化したときに、多剤耐性病原菌や新種のウイルスによるさまざまな感染症が地球人に対して逆襲するというシナリオも描いたのでしょう」

「それは大いにありうることです。だがそれらが果たして『地球人の絶滅』をもたらすまでにいたるかは疑問ですね。このようなシナリオを考えるならば、むしろ、未知のウイルスをＭ星から送り付けるほうがより確実性がある」

委員長は顎を撫で俯き加減で考え込んでいたが、しばらくすると、ふたたび大きな顔をメンバーの一人ひとりに向け、同意を求めるようにゆっくりした口調で話しはじめた。

「これで一応重要なケースを全部見たことになるが、まあ、総括すると、個々的に見た場合、デカルトの仕掛けはあまり芳しくないということになるかね。それともこれらをうまく組み合わせれば、個別のケースを超える相乗効果を生み出すかもしれないが、その辺のところは本人に直に確かめないと分からないね」

委員長は再派遣に際してデカルトに新たに課した任務を思い浮かべた。

第一は計画通りに地球人が全滅するかどうかの詳細チェック、第二は地球人全滅後の地球環境が早急に浄化され、M星人にとって安全なものとなりうるかどうかのチェック、そして第三が、たとえ地球人を全滅しえてもその後の地球が浄化しきれず、M星人にとって安全なものとなりえないなら即刻計画を中止して、地球人と共存共棲する道を探すというものだ。だが無理やり再派遣されたデカルトは果たしてこのような任務を滞ることなく遂行するだろうか。

委員長はデカルトの妙に自信に満ちた顔を思い出し、一瞬顔を歪めた。デカルトは仕組み全体の詳細を決して明かすことがなかった。なぜデカルトは詳細を明かそうとしなかったのか。委員長はいろいろ思いを巡らすが、大きな頭のなかで脳が空回りするだけであった。

大きい顔に再び意味不明の笑いを浮かべると、委員長は大きなくしゃみを立て続けに二つした。その拍子に、委員長はふとデカルトが仕組みについて話そうとしなかったのはそこになにか大きな秘密を隠していたからではあるまいかと思った。となると、われわれのこれまでの作業は全くの徒労だったということになるのか。

その大きな秘密はなにだったのか。仕組みの詳細を聞きだす前にデカルトを地球に送り出してしまって果たしてよかったのか。地球上で化学合成物質による環境汚染のもっとも酷い日本に彼を送り込んだことが果たして妥当だったのか。

委員長はふと焦りのなかで下した自分の判断が間違っていたような気がした。かといって今更どうすることもできなかった。たとえ間違った判断だったとしても、地球上の化学合成物質汚染に暴露されたM星人デカルトの人体実験データだけは間違いなく手にすることが出来るのだ、と自ら慰めるほかなかった。

「委員長、このまま予定通り『地球への移住計画』を進めていいものでしょうか」

顔を上げると、真っ正面の席から発せられた鋭い視線が両眼を射った。その瞬間委員長は心中の動きを一コマ残さずに読み取られていたような気がした。

「どうしたらいいですかね」

開き直るほかなかった。委員長はゆっくり委員の面々を見回してから、発言した真っ正面の委員に目を据えた。

「今更、移住計画を簡単に変えるわけにはいかないな。デカルトを地球に再派遣したのは単に地球人の絶滅の可能性をチェックするためだけではない。地球人との共存の可能性を探る目的もあるが、なによりも重要なことは、デカルトがM星人を代表して地球環境の汚染を身をもって体験し、デカルトが自分の身体で自らその毒性をチュックすることだ。そしてこれに対処する方法を考え出すことも任務のひとつだ。そのために彼を地球上で環境汚染の最高級に激しい東京に送り込んだのだ。かの地の環境汚染に彼が十分耐えられることが分かれば、M星人にとっても地球移住が可能ということになる。デカルトを常時監視して、十分耐えられることを確認すれば、そのときはどんな手段を講じても移住計画を実行に移すのだ」

「人口が爆発的に増えている地球人の居住地にM星人が割り込むことができるだろうか。果たして彼らと共存ができるでしょうか」

「とりあえず、日本を一次中継地として移住し、そこを拠点として、地球

人が住んでいないところを探せばいい」

最後の手段として委員長にはひとつの計画があった。だからデカルトを第二次大戦時に核の洗礼を受けたことのある小さな島国である日本に送り込んでいたのだった。もっともこの計画を実行しないで済めば一番いいのだが……。だがいまこれをメンバーたちに明らかにするわけにいかなかった。

「どんなところが残されているのですかね。いいところには地球人が住んでいて、残されいるところは最悪の条件のところじゃないのかな。そんなところにいまさら移住したいと思うかな」

「そのときはそのときだ。いまさら、ああだこうだと言っている時間がないのだよ。選択の余地なしなのだ。さあ、諸君、地球への移住準備を始めましょう」

「準備はもう殆どできているはずですよ」

「それじゃ、デカルトからの第一報が届き次第、第一陣を出発させることにして、その準備を始めることにするかね」

互いに顔を見合わせる委員たちをしり目に委員長は席を立った。

3

突然脳裏に現れたクリスティナを追って、デカルトは外に出た。

ホテルのエントランス正面には車寄せのスペースがあったが、その向こうにはアスファルトで舗装された六車線の広い幹線道路が走り、排気筒から黒い排気ガスを吐き出す車が溢れている。数珠繋ぎの車の群れは信号が変わるたびに止まり、ふたたび動き出すたびに排気筒から勢いよく大気中に大量の二酸化窒素やベンゾピレンなどの発がん物質を吐き出す。

車が吐き出す排気ガスは地表一面に広がり、大気を繰り返し汚染する。高濃度に汚染された大気は歩道を行く人びとに吸い込まれ、肺の隅々まで行きわたる。

デカルトは激しい臭いを感じて鼻を顰めた。強い刺激が鼻腔を抜け、脳髄を激しく一撃する。突然眩暈が襲い、頭がくらくらとした。目の前が真っ暗になった。意識が薄れていくなかで、彼は重心を失い、両手で宙を掻いた。

「どうしましたか……」

遠いところから男の声が聞こえてくる。デカルトは薄目を開けた。辛うじて残っている微かな意識を頼りに声のするほうに目を向ける。濃紺の地味なスーツを着た背の低いくたびれた表情の中年男が手を伸ばして倒れかけた彼の背を支えていた。汗の臭いが鼻を突いた。

「どうも……」

デカルトは意識を取り戻し、自分で立つと、ふたたび歩みはじめる。

「大丈夫ですか……、どちらまで……」

男は彼の横に寄りそい、並んで歩きながら声をかける。デカルトはどう応えればいいのか分からず、戸惑い、黙ったまま歩を進める。横をトラックが通り過ぎる。

「この臭いは？　堪らないですね」

「ああ、車の排気ガスですか。この辺はとくに酷い。大気は非常に汚れて

いますよ。ここでは深く息を吸ちゃいけません」
「……」
デカルトはこの男がなぜ自分のそばから離れようとしないのか不思議に思った。もしかしたらM星の秘密工作員だろうか。彼はもう一度男に目を走らせる。背の低い男にはそれらしい雰囲気は感じられなかった。だがよく見ると紺色と思えた服が黒いようにも見える。
「大丈夫ですか、顔色がとても悪いですよ。そこのコーヒー店で少し休まれたらどうですか」
小さなビルの一角にそれらしい看板があった。デカルトは黙って男の後を追って狭い入口から店内に入った。コーヒーの香りがプーンと鼻を突く。午後の遅い時間だというのに、サラリーマン風の若い男や同じ制服を着た若い女性で混雑している。彼は奥の壁際に空いている席を見付けて腰を掛ける。一斉に客たちの視線を浴びた。
彼はしばらくの間、なぜ客たちが自分を振り返ったのか分からずにいた。それよりも彼に目を向けた人々が皆一様に血の気のない疲れた顔をしているのが気になった。もしかして地球人たちは環境悪化によって生命を失いかけているのではないかと思った。
男がベージュの長方形の小さなトレーにコーヒーカップを二つ載せて近づいてきた。
「普通のブレンドコーヒーにしましたよ。いいでしょう」
人々の目が一端中年の男に移る。だが二人の組み合わせが妙に映るのか、それともデカルトの風貌が異様に映るのか、ふたたび人々はちらちらと目を動かしてデカルトの横顔を盗み見る。
デカルトにはむしろまわりの人々が皆一様に同じような服を着ているのが珍しかった。ことに若い女性が皆似たような格好をしているのが不思議だった。そのせいか顔付きまでが似通って見える。一瞬クローン種かと思った。彼は風貌の似た黒い服の男たちを思い出し、寒けがした。彼らは秘密工作員や自衛軍を構成するクローン種だった。M星では黒い服の男たちを消耗品として扱っていた。彼は震えながらじっと男を見た。
「どうかしましたか」
男が心配そうな目で覗き込む。
「なんでもないですよ。ところで、ここはトウキョウでしたよね」
「……」
男は口を突き出して目を見張る。
「地球上はみなあんな具合なのですか、大気が……」
デカルトは路上で体験した酷い排気ガスを思い浮かべる。
「まあ、自動車交通量の多いところはあんな感じでしょうね。日本に限らず、世界中の都市はみな同じじゃないですか」
一九七〇年代半ばを境に、日本では大気汚染の主要汚染源が従来の工場から自動車に変わり、主要な汚染物質も工場排煙中の二酸化硫黄から自動車排気ガスの二酸化窒素やベンツピレンなどへと交替した。二酸化窒素は水に溶けにくいため、肺の奥まで侵入し、気管支や肺胞を傷つけ、気管支ぜん息を起したり、それを悪化させたりする。二酸化窒素の年平均濃度が〇・〇三ppmを超えはじめるとこのような健康被害が出始める。それに発ガン性のあるベンツピレンなどの粒子状浮遊物質が加わり、アレルギー患者を急増せている。

男はコーヒーを一口飲むと、窓の方に目を向けたまま、「東京都の交通量の多いところは軽く〇・〇三ppmを超えているんじゃないかなあ。酷いところでは冬場には〇・〇九九ppmにも達する」と言う。

デカルトは委員長が日本のことをぶつぶつ言っていたことを思い出した。この男は一体何者だろうか。彼は男に興味を感じた。

「詳しいんですね。いま走っている自動車の燃料は……」

デカルトは男の顔を窺い、慎重に言葉を選ぶ。変なことを聞いては不審に思われ、警戒されるかもしれない。

「まだガソリンが多いんですよ。排気ガス対策を徹底しなければあの臭いは取れませんね」

「なにが含まれているのですか、排ガスには……」

一瞬、男は目を光らせ、デカルトをじっと見た。

「まあ、ご存知のように、原油にはもともとさまざまな微量物質が含まれていますが、精製したからといってこれらの微量物質が完全に除去されずに若干残りますし、それに市販されているガソリンにはさまざまな成分の添加剤が新たに加えられている……」

「それらも排気ガスの一部となっているということですか。それらは一体どんな物質なんですか」

「毒性の強い四塩化鉛などが使われていたこともあったが、メーカーは企業秘密を楯に成分情報を開示しようとしないので……」

「なぜですか。添加された化学物質も大気を汚染しているんでしょ。メーカーにはこれらの化学物質が人体や生物に影響を及ぼしていないことを明らかにする社会的責任があるのでは……」

「それはそうだが……」

「成分についての情報開示がなくとも、ガソリンや排気ガスから添加剤の成分程度は明らかにできるんじゃないのですか」

「そう簡単でない。極超微量物質だからね。正確な分析は難しい」

「そんなもんですか、地球では……」と言い掛けて、デカルトは余計なことを言ったことに気付き、急いで話題を変える。

「排気ガス汚染の他はどうですか。日本列島の環境汚染が一番酷いそうですね。とくに化学合成物質の汚染が激しいとか。これらについても自動車の排気ガスと同じように判然としていないところが多いのですか」

デカルトは情報が欲しかった。彼は男の顔色を窺いながら、矢継ぎ早に質問を重ねる。

男は口を閉ざしたまま、用心深そうな目をしてしばらくデカルトをじっと見つめていた。それから男は胸の内ポケットに手を差し込むと、彼のまえに小さな紙片を差し出した。

「わたしはこういう者です。あなたは日本人じゃなかったのですか。失礼ですが、どこからお出でなされたのですか」

デカルトは紙片を手に取って、これが名刺というものであることに気付いた。確か冬眠装置のなかで受けた日本語講座の中に日本人のビジネスマンとの名刺交換の場面があったことを思い出した。

「地之木好夫さんですか。環境問題研究所というと、地之木さんは大気汚染などの専門家ということですか」

「ええ、まあ、そうです。で、失礼ですが、あなたは……」

「ルネ・デカルト」

デカルトは一寸躊躇したが、パリから来たと嘘を言った。ところがこの嘘が思わぬ効果を生んだ。

「パリですか。一度は行ってみたいと思っているところですよ。それにしても日本語がお上手ですね」

目から不審そうな色はたちまち消え、男は愛想笑いを浮かべた。デカルトには男の態度がなぜ急変したのか理解できなかった。

「あの……、化学合成物質の汚染は……」

「日本における化学合成物質汚染ですか。それは確かに世界有数なものですよ。史上最も猛毒といわれる化学物質であるダイオキシン汚染はひどいものでした。日本では何年にもわたってゴミの焼却処理をつづけてきましたが、酷いときには焼却炉の煙突から年間十五キロから二十キロものダイオキシンを環境中に放出してきたでしょうね。この数字は他の国に比べて桁違いに大きいものですよ。アメリカやドイツなどでは数百グラムといったオーダーですから。もっとも法規制を厳格にし、焼却炉が改善されてからはかなり減ってきていますがね」

ダイオキシンとはポリ塩化ダイベンゾダイオキシンの略称である。このダイオキシンにダイベンゾフラン、コプラナーＰＣＢを含め、これらを総称して「ダイオキシン類」というが、略して単に「ダイオキシン」というときもある。

ダイオキシン類のなかでもっとも急性毒性が強いのが２・３・７・８－四塩化ダイオキシンで、毒性がサリンの二倍、青酸カリの一〇〇倍から一〇〇〇〇倍ある。一〇〇万人を殺傷するのに八五グラムほどで足りる。ただ毒性は遅発性で、通常、暴露してから死亡するまで数週間かかる。

ダイオキシンには発ガン性、催奇形性、生殖毒性、免疫毒性、ホルモン代謝障害などさまざまな毒性があって、食物などから体内に摂取されると母乳や脂肪組織に蓄積する。また母体の脂肪組織などに蓄積したダイオキシンは胎盤を通して胎児に移り、胎児を死亡させたり（死産）、小児ガンや胎児の発育障害などを引き起こす。神経系への影響も取りだたされている。

ダイオキシンは発明等による意図的な人為的化学合成によって生産されたものではない。ゴミなどの焼却過程においてこれらに含まれている塩化物から生成されたり、化学物質の合成過程で不純物として含まれるもので、いわば非意図的につりだされたものなのだ。そのうえ、環境ではなかなか分解されず、残留性が高い。

ダイオキシンの最大の発生源はゴミ焼却炉だ。日本では都市ゴミの殆どを焼却処理しているので、日本には世界全体の七割に近い二〇〇〇基ほどの都市ゴミ用焼却炉がある。現在地球上に排出されるダイオキシン類の約半量をこれらの焼却炉から排出している。

「そんなに……ですか、日本は地球のダイオキシン汚染地帯だったのか……」

デカルトは思わず絶句した。突然、皮肉な笑みを浮かべた委員長の大きな顔が迫った来た。

「まあ、そんなとこですか。日本列島で排出されたダイオキシン類はまず日本の河川や土壌を汚染し、さらに海に流れ込んで近海や沿岸海域をダイオキシン類で高濃度に汚染しているのです。それから海洋へ……」

ダイオキシンにかぎらず残留性の高い化学合成物質は環境へ広く拡散し

ていくが、生物生態系のなかで食物連鎖を通して何千万倍何億倍にも濃縮する。動植物性プランクトンを小魚が食べ、その小魚を大きな魚が餌とするといった海洋生物生態系における捕食の連鎖関係のなかで、環境中のダイオキシンなどの化学合成物質は順次その濃度を高めながら、生物の体内脂肪組織に高濃度に蓄積していくのだ。

このようにして日本近海や沿岸で獲れる魚介類はダイオキシン類で高濃度に汚染されてしまっている。とくに東京湾や大阪湾のような閉鎖性内湾で獲れるスズキ、ボラ、コノシロ（コハダ）などは著しく汚染されているし、瀬戸内海のような半閉鎖性海域で獲れるタチウオ、ボラ、クロダイなどの汚染濃度も高い。またダイオキシン類は底泥に溜まりやすいので、アナゴやウナギ、アサリのような底棲性の魚介類も高濃度に汚染されている。日本国内産の魚類は遠洋ものに比べて三倍近くダイオキシン類濃度が高く、貝類では五倍を超える。世界保健機構（ＷＨＯ）はダイオキシン類のＴＤＩ（耐容一日摂取量）の上限値を四ピコグラムと決めているが、これらの高濃度汚染魚介類を一〇〇グラムも食べると軽く超過してしまう。

われわれ人間がダイオキシンなどを極超低レベルまで薄めて環境に広く拡散させているのに、逆に、食物連鎖によって一番高濃度に濃縮汚染しているマグロなどの大型魚を食するはめになっているのだ。

「まあ、われわれ日本人が食べる魚介類はこんなふうにしてダイオキシン漬けになってしまっているということですな。皮肉なことに、食物連鎖の頂点にいる人間が一番汚染されることになる。これは化学合成物質を使い放題使いながら最後の最後までキレイに後始末をしないわれわれ人間に対する自然の竹篦返しといったものですかね」

ダイオキシンに汚染された大気を呼吸したり水を飲用すれば、ダイオキシンが体内に摂り込まれる。だが人体になによりも圧倒的に多くのダイオキシンが摂り込まれるのは食物連鎖を通して濃厚に濃縮汚染された魚介類などの食物を摂取したときだ。平均的日本人では一日八〇〇ピコグラム強の2・3・7・8―四塩化ダイオキシン相当量を食物から摂取しているが、その摂取量の六〇パーセント弱が魚介類からである。肉・卵類が二〇パーセント弱、牛乳・乳製品が一〇パーセント弱となっている。

「日本人の皮下脂肪組織にはすでにかなりのダイオキシンが取り込まれているということですか」

「そのとおり。各国の母乳中のダイオキシン含有量については世界保健機構（ＷＨＯ）が調査したことがあるのです（一九八九）。これによると、先進諸国が軒並み多いという結果がでているのですが、それらに比べても日本の大阪で採取した母乳中のダイオキシン含有量がずば抜けて多かった。ダイオキシンにかぎりませんがね」

「そんな母乳を飲んで赤ちゃんは大丈夫なのですか」

「さあ、どうですかね。赤ちゃんには胎児時代にすでにダイオキシンなどの化学合成物質が母体の胎盤を通して移行している。そのうえ、汚染母乳が加わることになる」

「……」

デカルトは内心とんでもないところに派遣されたものだと思った。委員長の平たい大きな顔が浮かんだ。一体どんな意図をもってこんなところに送り込んだのか。

「といってもダイオキシン類は日本の周囲にいつまでもとどまっているわ

けじゃない。気流や海流に流されて地球の隅々まで広がっていますよ。それが食物連鎖を通して濃縮されて、いまでは北極圏のアザラシやオットセイ、南極圏のペンギンの皮下脂肪組織からも高濃度のダイオキシン類が見つかっているんです。もう絶望的ですよ」

デカルトは自分の置かれている状況を忘れ、計画通り地球人が確実に絶滅への道を歩みはじめていることを確信した。一瞬、思わず笑みがこぼれそうになった。彼は顔が綻びそうになるのを必死で我慢しながら、自分が企てた仕掛けをこの男が感じ取っているかどうかを知りたいと思った。

「どうしてこんなふうになったのですか」

デカルトは相変らず無知を装い、質問を続ける。

「塩化ビニールなど塩素を含んだゴミを大量に燃やしたからですよ」

「なぜ塩化ビニールを燃やすのですか。ダイオキシンが出るのが分かっていながら、なぜゴミを焼却するのですか」

地之木は一瞬戸惑ったような顔付きをした。デカルトは食い下がる。彼にはある意図があった。

「大量のゴミが出るから、焼却してしまわないと捨てる場所がない」

「では、なぜダイオキシンが出るようなものがゴミに混じっているのですか」

「塩化ビニールは安くて、加工しやすいから、玩具、容器類、包装用などいろいろなものに用いられる。ビニール袋は軽くて便利だし……」

「かといって、燃やせばダイオキシンが出ることが分かってからも塩化ビニールをつくり続けているのはなぜですか。そんなものは止めてしまえばいいでしょう」

「徐々に変えていっているが、全部が全部というわけにはいかない。完全に代わるものが見当たらないからな」

「探せば、いくらでも見つかるじゃないですか」

「たとえ見つかったとしても、まだ使える塩化ビニール生産設備をむざむざ廃棄するわけにはいかない。投資を無駄にするわけにはいかない。それに特許が有効であれば、誰もあえて新たな冒険を試みようとしないのだ。たとえこれに代わる新しい発明がなされても、企業はそのままにしておくことだろうな」

「でも生き物に害をおぼよすダイオキシンを野放しにしていいのですか」

「別に野放しているわけではない。規制もはじまっている」

「でもどうしてダイオキシンの発生をもとから断とうとしないのですか。ダイオキシンは非意図的に生成するものでしょう。なら、なおのことそうすべきじゃないんですか。なぜこんな分かり切ったことができないんですか、あなたがたは」

男の目に一瞬不審の色が浮かんだ。デカルトはしまったと思った。

男はしばらくデカルトをじっと見つめていたが、「まあ、この国では行政が生活者や消費者よりも業者や生産者寄りだからな。ダイオキシンの被害対策よりも金儲けが第一とちがうか」と軽く言い放つ。

デカルトには分からなかった。地球人のなかで日本人だけが半ば諦めたような覚めた考え方をするのだろうか。それともこの男だけの特殊な考え方なのか。デカルトは地球人がもっと利口な人種だと思っていた。そこで、彼は念を入れて多様な仕掛けを考え、文明の吐き出す『毒唾』による環境悪化を中心に、これから派生する問題を組み合わせて相互に補完的関係を

持たせておいたのだった。だが、この男が言うように、もしこのような現状肯定的な単純な考え方が地球人一般のものであれば、簡単に目的を達成できそうな気がした。いまとなっては逆に単純過ぎる地球人相手にそれらの複数の問題が相互にどのように機能するか、デカルトには全然見当がつかなくなっていた。

「とにかく、ダイオキシンが発生しなくなると、ダイオキシンで金儲けしていたやつもあがったりになってしまうから、そこそこにダイオキシンを発生させておこうとするのじゃないかな、この国の政治家や行政に携わる目先の利いた連中はね」

男は冗談交じりに呟く。

一九九五年当時は日本一国で世界の四〇パーセントのダイオキシンを排出していたが、規制の結果、二〇〇三年三月末までに国内排出量を一九九七年比で九割削減の目標が達成できそうだという。だがゴミ焼却炉から出る排ガスの測定が正確に行なわれているか疑問があり、データの信憑性が低い。そのうえ、規制強化によって廃止される焼却炉の解体ゴミの処分管理が不十分だと大半がいずれ環境に漏れでる恐れがあるのだ。

男は立ち上がると、いま調査しているところはもっと凄まじいだが、一緒に来るかと言う。デカルトは一寸考えてから男に従い、後ろを追った。

二人は何度か電車を乗り換え、さらにタクシーを乗り継いで、二時間後、漸く「現場」に辿り着く。

公園の一角にグロテスクな四角柱の塔が突っ立っていた。

「あれが『中継所』の排気塔です。この地下に作業場があって、周辺の家庭から集めたプラスチックなどの不燃ゴミをここで小さく圧縮しているのですよ」

男は排気塔のまえに立ち止まり、デカルトを振り返った。

地下作業場では収集してきた車約八台分の不燃ゴミを一台の大型コンテナに収容できるほどの容量までに圧縮して詰め替え、東京湾岸にある処理センターへと運ぶ。これはかさばるプラスチックゴミが著しく増加したため、運搬による交通渋滞と輸送コストを低減する目的ではじめられたが、プラスチックゴミ圧縮の本格稼働がはじまると排気塔周辺の住民から「息苦しい」「目の異常」などの訴えが出た。

「圧縮工程や詰め替え作業の際になにか有害物質が出るのですかね」

「その通りです。われわれの分析結果では……」

男は中継所から四〇〇種類もの化学合成物質が排出されていること、そのなかにはイソシアネート類、シアン化合物、アルデヒド類、各種のフタール酸エステル類、ダイオキシン類、水銀蒸気など、毒性の強いものがかなり含まれていると言う。

「どうしてそんなものが出るのですか」

デカルトは相変らずとぼけて尋ねる。

「簡単に言えば、プラスチックのような高分子材料はモノマーが結合して高分子を形作り、これらが絡まって穴だらけの固体となっているのですね。実際に使うときにはその隙間にいろいろな詰め物をするのですよ。これを強く圧縮すると、詰めた物が隙間から飛び出してくるというわけです。飛び出した化学合成物質のなかには環境ホルモンも多く含まれているらしい」

「環境ホルモン?」

「正確には『内分泌系撹乱化学合成物質』と言うんですが、生物に対して

エストロゲンのような女性ホルモン類似の作用をおよぼす化学合成物質のことですよ。最近世界中で成年男子の精子数が減ってきているという話も聞きますが、この種の化学合成物質がこれに関係しているらしい」

「大体、そんなプラスチックをどうして生産するのか。この国の政治や行政はなにをやっているのですかね」

日本のプラスチック（樹脂）生産量は一九七五年度は五一七万トンだったが、二〇〇〇年度には約三倍に増加している。生産量は米国についで世界第二位であるが、廃プラスチック排出量も世界第二位だ。この中継所は一九九六年から本格稼働しているが、ここで収集される量は年々増えつづけ、二〇〇二年には毎日二四〇台の収集車で運び込むまでになっている。プラスチックゴミは地下作業場で圧縮し、大型コンテナー三三台に押し込んで東京湾の処理センターに運んでいるという。

プラスチックに限らず、あらゆるモノを大量に生産し、あの手この手で無理やり大量に消費させる。これがこのごろ流行っている経済成長の方程式だ。このような方程式が先進国を中心とする世界経済システムに組み込まれ、生産が野放図に拡大し、飽くなき大量消費が繰り返される。その結果、当然大量のゴミが出る。というより、経済を拡大するためにゴミとして、大量の廃棄物をつくり出すのだ。まさにゴミをつくり出すために生産を拡大しているというわけだ。

ゴミとなるものはなにも最終的な廃棄段階の廃棄物だけに限らない。最終的な消費段階のほかに、さまざまな生産段階からでもさまざまなゴミが出る。鉱石採掘や土木工事などから岩石や土砂に低品位の鉱石などから出るズリ、生産工程からの製品クズやカス、糞尿、廃液、その他さまざまの塵芥など。これらに家庭からのゴミ、使用済み製品や寿命を了えた自動車や家屋・建築物の廃材などもろもろの廃棄物が加わる。

生産段階ではさまざまな化学合成物質が生産される一方で、さまざまな化学合成物質が大量に使用される。これらの無数の化学合成物質が生産、消費、そして廃棄にいたる全プロセスで大気や河川などに放出され、放置されるのだ。その結果、大気、水域、土壌が汚染されて、急激にあるいは緩慢に地球環境へと広がっていく。

近年、自然界でワニなどの動物にオスがメス化する現象が現れた。犯人探しの結果、環境のなかに数多くの環境ホルモンと呼ばれる内分泌系撹乱化学合成物質が含まれていることが見つかり、これらが極超低レベル濃度で動物の内分泌系を撹乱させていることが突き止められた。このような化学合成物質による生物への影響は性ホルモンの混乱による生殖障害のほかに、免疫や神経など別の機能への影響も見つかっている。だが問題は環境を汚染している無数の化学合成物質による複合汚染影響が殆ど未解明だということだ。

デカルトは「環境ホルモンか」と口の中で呟く。

「日本はゴミに埋まりつつある。ごちゃまぜになった大量のさまざまなゴミをいかに処理処分するか。これが難問なんですよ」

男はため息をついた。

固形ゴミは家庭から出るゴミを中心とする一般廃棄物と、事業活動から生じる産業廃棄物とに分けられる。このうち、産業廃棄物が年間四億トン前後で、全体の九〇パーセントを超す。ゴミの処理処分は焼却と埋め立てが大半で、リサイクルの割合はまだ少ない。

一般廃棄物ではペットボトルやトレイなどプラスチックの一部がリサイクルされているが、全体の四分の三を焼却し、焼却灰と不燃ゴミを埋め立て処分している。焼却といってもこれはゴミを大気中に姿を変えてばらまくようなものだし、有害化学物質を濃縮させている焼却灰や不燃ゴミの埋め立ては水域や土壌の汚染原因となりかねない。いまでは埋め立て処分の七割ほどが山間部でなされているが、水源地を汚染しないか問題だ。

「地球人はきれいな水をわざわざ汚して飲んでいるのか」

デカルトには不思議なことであった。

「家庭ゴミにもいろいろな化学合成物質が混じっていますが、産業廃棄物のほうについて全くお手上げですよ。量が圧倒的に多いうえに、質も悪い。どんな化学合成物質が含まれているが分からないものが多いからね」

「こんなことが何年もつづいているのですか」

「最近では企業にリサイクルを義務づけるようになってきていますが、半分以上は野放し状態でしょう。それに過去に捨てられたものはまるで地雷のような存在だ。いつ爆発するかわからない」

産業廃棄物は今後法的規制でリサイクルが増えることだろう。だが日本ではまだまだ焼却と埋め立てが主流だ。大規模の焼却炉や埋め立ては規制の対象になっているが、小規模の施設は野放しに近い。これも問題だが、過去数十年間にわたっていずこへとも分からず運び出された産業廃棄物が放置されたままだ。これらの廃棄物にはなにが含まれているか全然分からないし、都市に近い山間部や河川敷などに穴を掘って埋められたり、空き地に野積みされたまま放置されているのだ。そのなかには廃棄処分された有機塩素系などの農薬やＰＣＢなど、残留性の高い有害化学合成物質も含まれている。

デカルトは無言まま、口の中でぶつぶつ言う男を不思議そうに見つめていた。そんなデカルトを見て、男の目が光った。

「こんなゴミよりもっと酷いことがありますよ」

「え？　まだあるのですか。それはなんですか。ゴミのことでも日本人の生活や健康に大問題なのに……、そのうえ、一体、なにがあるというんですか」

デカルトは目を丸くし、大声をあげた。

「ゴミのなかの化学合成物質は時間とともに気流や海流によって拡散していき、あるいは生物生態系を通して濃縮されるとしても、はじまりはまだ特定地点にかかわるいわば点的な小規模な問題です。もっとも点的なものでも集まれば面的に広がりますが、これに対して最初から面的広がりを意識して化学合成物質を散布するのが殺虫剤、殺菌剤、除草剤、殺鼠剤などの農薬類の使用ですね」

日本では農耕地、非農耕地を問わず、いたるところで農薬と称する化学合成物質がじゃぶじゃぶ撒かれているのだ。水田の防虫害対策や山林の松枯れ対策には空中から散布し、公園や街路樹、学校や保育園、ゴルフ場、河川敷、鉄道・道路や空港、団地や一般住宅でも除草剤や殺虫剤が散布されている。

「化学合成物質をわざわざ散布するのですか」

「そうですよ。とにかくこれら農薬は環境の化学合成物質汚染のかなりの部分を占めているはずで、散布された農薬は土壌の農作物ばかりではなく、大気や水域を汚染し、海に流れ込んで魚介類を汚染するのです。魚介類は

食物連鎖を通して農薬を濃縮していくので、魚介類を好んで食する日本人の脂肪組織にはかなりの量の農薬が蓄積していることでしょう」

男はデカルトの驚きに力を得たようにとうとうと話しだす。

農作物や農産物に害をおよぼす生物を防除するための化学合成物質である農薬（除草剤、殺虫剤、殺菌剤）は化学構造からカーバメート系、ジチオカーバメート系、ジフェニルエーテル系、トリクロルピリジル系、トリアジン系、フェノキン系、有機塩素系、有機水銀系、有機スズ系、有機リン系、抗生物質、天然物系など、実に多様であるが、日本の水田ではこれらの農薬を近隣のコメ生産国に比べて何倍何十倍も多く使用しているのだ。

農薬はヒトや作物に作用せずに害虫や雑草にのみ作用するものとしてつくられているが、なかなかそうはいかない。たとえば有機リン系やカーバメート系は害虫（昆虫）の神経系に作用するが、ヒトの神経系にも同様の作用をおよぼしている。農薬にはさまざまな急性慢性の毒性のほか、免疫毒性、突然変異性、発ガン性、生殖毒性、遺伝毒性、催奇形性、染色体異常、胎仔毒性などがみられる。また残留性のものは一端体内に摂取されると脂肪組織に蓄積され、母体から胎児へと受け継がれていく。

「こんなにさまざまな毒性があるのに、どうして使用され続けているのですかね。これでは日本人は滅んでしまう」

「このままでは遠からずそうなることでしょう」

地之木という男は他人事のように言う。

「……」

「なんて日本人はバカなんだろう。それにしてもいつからこんなことになってしまったのか。まえはもっと始末してモノを使っていたが、いまはモノをどんどん消費しないと景気は悪くなるという。どこかおかしい世の中になちゃって……」

「それでほっといていいんですか」

「良いも悪いもない。一〇〇年もまえになるが、日本は当時の西洋に憧れ、ヨーロッパ文明を模倣して以来おかしくなった。第二次大戦後アメリカナイズされて大量生産大量消費大量廃棄が際限なく進み、この国の人間はゴミのなかに埋まった生活を余儀なくされてしまっている。先進諸国は似たり寄ったりの状況で、大都市を中心に全世界がこんな調子になりつつある」

デカルトには返す言葉がなかった。男の投げやりな態度も、元はと言えばこうなるように自分が仕組んだ仕掛けが災いしているのかと思い、一瞬こころが痛んだ。

「ほかの国々だって大して違っていません。日本と五十歩百歩ですよ。ヨーロッパ各国でも大規模なゴミ処分場や焼却場周辺で染色体異常や先天異常、それに白血病などが増加しているという報告がありましたよ。そうそう、フランスのリヨンも調査対象に入ってましたよね」

「リヨンでですか?」

「そうです。大体、ダイオキシンのようななかなか分解しない残留性の高い化学合成物質は一度環境に放り出されると、時間が経てば地球全域に拡散していくことになるのですから、早いか遅いかの違いだけですよ。人間なんて偉そうなことを言っても所詮目先の利益（プラス）に目が眩んだバカの脳タリンに過ぎない。地球が有限であるにもかかわらず、自然征服なんて煽てられて見境もなく止めどなく化学合成物質を作り出しておきながら、後始末さえできないんだからね」

あっさり言ってのけると、男は右手を軽く上げた。デカルトは一瞬ヒヤリとして身構えたが、男は別れを告げ、くるりと背を見せた。彼は口を開けたまま、去っていく男の後ろ姿を見送った。

4

デカルトは男と別れてホテルに戻ると、ベッドに倒れ込んだ。くたくたになって立っていられなかった。一眠りしたかったが、頭が妙に冴ていた。

男の顔が浮かんだ。男の虚無的な目が彼に向けられた。もう男のことは忘れたかった。彼は男の目から逃れようと輾転として寝返りを打つが、男の目が執拗に彼を追いかけなかなか逃れることができなかった。もがけばもがくほどべったりと纏わりついて離れようとしない。彼は眠るのを諦め、目を大きく開き、ベッドに仰向けになった。

男の話を聞きながら、デカルトは計画が確実に予定のコースを辿っていると確信した。だが男を絶望の深淵へと追い込んだ元凶が自分であることを思うと、チクチクと胸が痛んだ。と同時に、彼自身地球上で男と同じ運命に置かれていることを感じないわけにいかなかった。

デカルトはあれこれ思い悩んだ。考えれば考えるほど迷路に嵌り込んでいく。これも自業自得というものだ。とうとう彼は考えるのを諦め、どうにでもなれと思った。彼は自嘲の笑みを浮かべ、ベッドから立ち上がった。

窓の外では夕暮れの空にネオンが瞬きはじめていた。彼はしばらく窓辺に佇み、暮れ行く空に聳えるビル群に目を向けていた。

ふと三百数十年前にも訪れた都市で何ヵ所もアジトを構えていたことを思い出した。とにかく身を隠そう。委員長に監視されていては身動きが取れない。

デカルトは早速行動を開始した。

ホテルに滞在しつづけるように装いながら、彼は手始めに、高層ビルの最上階にある一室と、いつ取り壊しあってもおかしくない古びた低層のこじんまりとしたボロビルの最上階を借り切った。彼は誰にも悟られないように、各種の必要な部品をいくつにも分けて方々から取り寄せ、ボロビルの一室に極超スピードの処理能力をもつ高性能で大容量のコンピュータを組み立てた。組み立てが終わると、彼は一緒に届けられた大きな鞄からM星で愛用していた小型の端末を取り出し、架空の組織名をいくつか用いてインターネットの端子に接続する。

不意に、デカルトに秘密工作員としての自覚が戻ってきた。深く息を吐いて、なにごとも用心深くやらなくちゃと思った。彼は急いで端子を抜いて落度がないかもう一度念入りに点検し直す。点検しながら、不用意に事を行なって敵に正体を見破られるようなヘマをやってはならないぞ、と自分に言い聞かせる。

もし地球人にM星人であることが知れたら、協力はおろか命の保障さえ失うことになろう。

デカルトには小柄な男に案内されて目の前に突き付けられた地球環境の現実の姿をいまだに信じることができなかった。日本のいたるところにゴミの山があって、環境がダイオキシンなどのさまざまな有害化学合成物質で汚染されつくされているとは思いもよらなかった。彼はほかの地域の状

況を知りたくて、地球各地から情報を集めて検討することにしたのだった。
地球各地から集まってきたデータを見て、デカルトは愕然とした。自分が想定したシナリオを遥かに超えて、地球環境が絶望的なスピードで急速に悪化しているのだ。彼は全身に戦慄が走るのを感じた。
地球温暖化が現実化し、地球の気候システムは変調をきたしていた。各地で大雨、干ばつ、酷暑など異常気象が頻発し、年を追うごとに発生頻度を増し、影響範囲を拡大していく。温暖化はこの一〇〇年間にエネルギー消費量を十六倍に増やした地球人たちが消費した石油などの化石燃料の燃焼で大気中に吐き出される二酸化炭素によって招来したものだった。それにも拘わらず、地球人たちは相変わらず経済成長を追い求め、世界経済が拡大するなかでエネルギーの浪費を倍加させていた。
また大気中に放出されるフロンガスが一時期よりも減ってきているようであったが、いまだにオゾン層破壊がつづき、地球の広範囲にわたり降り注ぐ有害紫外線量が増える傾向にあった。とりわけ南極大陸上空にできた巨大なオゾンホールからは強烈な有害紫外線が降り注ぎ、海面表層のプランクトンや大陸に棲息するペンギンなどの生物が危害を受け、近辺の海洋生態系に重大な影響を及ぼしていた。
毎年何十万種もつくり出される化学合成物質による汚染が地球全域に広がり、発がん、奇形、生殖障害を引き起こすなど、地球人や他の生物の生体メカニズムにさまざまな影響を及ぼし、動植物のかなりの種を絶滅へと追いやった。
人口が爆発的に増加し、地球人はすでに六〇億人を超え七〇億人に迫る一方、気候変動による干害や大雨などの異常気象の頻発に加え、オゾン層破壊や土壌等の汚染などの環境悪化が重なり、農業生産を脅かしていた。そのうえ、地下水などの灌漑水に頼っていた大規模な穀倉地帯では塩害による土地劣化が酷く、農地を放棄するものが相次ぎ、世界の食糧生産も頭打ちの状態だった。
また人口爆発の過程で、低所得国では農地の放棄や過放牧によって広大な範囲に砂漠化が進行し、多くのひとが飢え、貧困に喘でいた。
地球上では現在、全人口の三分の一にあたる二〇数億人が飢えや水の不足の悩まされ、食糧不足が常態化しているのだ。その一方で、マラリアを媒介する蚊が温暖化によって北上し出す一方、結核など耐性病原菌が増えはじめ、エイズやＳＡＲＳなど新顔のウイルスが暴れだし、地球人に襲いかかるのだ。
このような地球の現況はデカルト本人が以前描いたシナリオ通りの展開と見ることができるが、なぜか環境悪化だけが抜き出ていた。地球全域において予想を超える猛烈な超スピードで環境悪化が進んでおり、これは彼が予想した以上に激しいものであった。いつのまにか、環境悪化が地球人絶滅の自爆装置の中心的役割を果たし、これを中心にして他の自爆装置が相乗的に機能しだしていたのだ。
地球温暖化や森林破壊などによる地球気候システムの変調、オゾン層破壊による有害紫外線の増加、有害化学合成物質による汚染といった環境悪化現象を個々的に見ると、彼の予想する範囲からそれほど離れているようにも見えなかった。だが問題はこれらの個々の現象が地球上で同時的に生起し、相互に相乗的に作用し合い、ひとつの複合事象となり、それがトータルとして作用し地球全域にわたり環境悪化のスピードを幾何級数的に増

幅させているのだ。

それは大気や水域から土壌の汚染といった自然的生存条件の直接的な悪化は言うに及ばず、陸上や水域の生物生態系の破壊、生産された農作物そのものの汚染や被害、それらに起因する食糧不足の問題、さらに地球人の健康障害にいたるまで、広範囲にわたる影響が同時的に生起しているということだった。それは表面的には緩慢な動きであるが、確実に地球人を絶滅へと追いやってしまう巨大な流れになっていたのだ。

だが不思議なことに、事態が逼迫していることに気付いている地球人はごく一部にすぎなかった。デカルトが仕組んだ要素還元的機械論的な方法論や個別的専門的分析手法が依然として幅を利かせ、地球人には環境悪化に見られるような複合的かつ相乗的作用を理解することも、これらを総合的全体的に把握し評価することもできずにいるらしい。

問題化してはじめて事態の重大さに気づいても、問題化している個別事象だけしか目に入らず、問題となっている現象だけを対象として取り出し、個別的に後追い的な規制やバラバラな対策を試みるだけで、これを取り巻く背景全体を視野に入れることは全くないのだ。もはや足下さえ覚束ない状況なのに、地球人の多くはいまもって現代科学技術文明（現代地球文明）を信奉してやまない有様だった。

このことがデカルトを迷わせ、悩ませた。

このまま進めば、百年を待たずに、現代地球文明は自爆し、地球人は確実に絶滅する。これを見て、M星のお偉方はデカルトの仕掛けた効果を評価し、その功績を称えることだろう。だがその場に居合わせる当のデカルトはどうなる。いくら三百五十余年前の工作をいくら誉めそやされても、当のデカルトは「地球人の絶滅」の巻き添えを食らい、地球人のお供をして死出の旅路につくほかないではないか。

いや、委員長はわが輩にパック旅行の添乗員よろしく「地球人絶滅」の小旗を持たせ、地球人の団体客を死出の旅へと引率させようというのか。

デカルトは脳裏にのさばる委員長の平たい大きな顔を思い切りけっ飛ばした。委員長に一泡吹かせる手はないか。彼は必死に考える。

かといって超スピードで進む環境悪化を食い止めることは容易なこととは思えないし、これほど悪化してしまった環境をもとに戻すことも簡単なこととは思えない。

彼の見るところ、地球温暖化による気候変動はもはや地球人の手による制御を超えた域に達しているようだった。頻発する異常気象は地球気候システムの破滅的撹乱と気温急上昇の前触れにちがいない。それにまた有害紫外線の増加と現代の錬金術者である科学者たちによって毎年何十万と合成される得体の知れない人工の化学合成物質は、生物の生体メカニズムを狂わせるだけでなく、種の保存に致命的なダメージを与え、現存生命体全体で形成している生物生態系の全面崩壊をもたらす「蟻の穴」となっていた。

ことに日本で環境ホルモンと呼ばれている内分泌撹乱物質である化学合成物質による環境汚染は、生物に対してすでに生殖障害など計り知れない影響を及ぼしはじめている。そのうえ多剤耐性バクテリアの出現やエイズウイルスなどのレトロウイルスの凶暴化に見られるように、環境悪化がバクテリアやウイルスに突然変異を促す。そしてある日地球人に襲いかかり、彼らが営々と築き上げた現代科学技術体系の無力を決定的に証明すること

になるはずだ。
　これに加え、現代科学技術体系に関連して、デカルトにとって予想を超えていたものがもうひとつあった。それは科学技術の見境ない限りなき跛行的展開だった。
　デカルトは自分が仕組んだ仕掛けが地球上に現代科学技術文明（以下単に現代文明という）という名の得体の知れない怪物を育て、こうも功を奏していようとは思ってもみなかった。M星で喚問を受けているときには、このような超スピードで地球環境が悪化していることには全然気付かなかった。このことをM星にいるうちにはっきり認識できていたら、どんな手段を講じても地球への再派遣を拒否していたことだろう。
　喚問での不用意な一言が命取りになった。デカルトは歯切りして、地球の現状に対する自分の認識が甘かったことを嘆いた。だがいまとなっては、すべてが手遅れだった。
　二進も三進も行かなかった。超スピードの地球環境悪化のなかで、能天気に振る舞う地球人たちを、デカルトはただただ呆れ、なんとも言えない奇妙な悲哀に満ちた気持ちで眺めているほかなかった。地球人がひとり、またひとり、命を落とし減っていくなかで、彼は死を待っている自分の姿を想像した。そしてふと、地球人らはもう手遅れであることを本能的に悟って自暴自棄にも疲れ、諦めのなかで能天気に振る舞っているのかもしれないと思った。その途端、自分の意思とは別に、いつの間に身体が小刻みに震えだし、次第に大きくなっていくのを感じた。
　このままでは、地球人は自ら吐き出す「毒唾」がもたらす環境悪化によって確実に絶滅する。地球人絶滅後の地球がM星人にとって移住可能なものとなるかどうかを見極めるまえに、悪化した環境のなかで地球人ともども自分も確実に息絶え死んでしまうほかないだろう。
　デカルトはわざわざ地球に死にやってきたように思えて、どうにもやりきれなかった。なんとかこの窮地から抜け出る方法がないか、彼は一心に頭を回転する。
　漸く到達したデカルトの結論はこうだった。
　自分が助かる道は二つしかない。一つは地球からの脱出、もう一つは地球に踏みとどまって、なんとかしてこれ以上の環境悪化を食い止めることだ。
　地球から脱出するといっても、デカルトが自力でここから脱出することは不可能であった。彼を運んできた宇宙船はすでにM星へ向い、航行の半ばにある。航路を変更して地球へ迎えに戻ってもらうためには査問委員会に願い出るほかない。いま地球から脱出したいといえば、委員長は一体どんな顔をするだろうか。
　不意に、脳裏に自分をあざ笑う平たい大きな顔が浮かんだ。
　あの男にまんまと言葉尻を掴まれ、地球に再派遣されたことも身から出た錆と諦めていたが、デカルトはふと、まだ百年近くも残されているというのに、なぜあの喚問が行われたのか不思議な気がした。一体あの喚問はなにを意図してなされたのだろうか。
　これまで何度も喚問をボイコットしていたのに、なぜあの日に限って応じる気になったのか、これも不思議だった。あの日はそれまでと違い、なぜかどうでもいいような気分に陥っていたのか。それにしてもあの顔の大きい男はなにを考えていたのだろうか。もしかしたら、喚問を始める前か

ら、自分を地球へ送還しようと考えていたのではあるまいか。というより、何度も喚問に応じようとしなかった罰として、地球への流刑に処したかったのかもしれない。でなかったら、有為な人材を生体実験に供し死の危険を侵してまで、地球人の絶滅に立ち会わせようとするだろうか。

デカルトは胸の奥のほうで、怒りが沸々と煮えたぎりだしているのを感じた。初めは単純に、地球人絶滅後の地球のチェック役として送り込まれたと思っていた。だがあらためて考えると、あの喚問は自分を亡き者とする査問委員会の陰謀だったのではないかと思えて仕方がなかった。

実際、地球の安全性のチェックは地球人の絶滅後にすればいいことだ。たとえどんなに急いでいようとも、M星人の一員であるデカルト本人に対して、死の危険を侵してまで急ぐことでは決してない。自分の仕掛けによって地球人が絶滅してしまうほど環境が悪化したとしても、地球のもつ自浄力によって悪化した環境はいずれ復旧するはずだ、といささか口から出任せ気味に言ったからといって、なにも言葉尻を捉えてわざわざ道連れの危険がある地球人の絶滅に立ち会わせることもないだろう。

もしかしたら、地球の最新情報から移住先の環境悪化を懸念し出した査問委員会が、喚問をはじめるまえから、地球人の絶滅を計るよりも、地球人との共棲を考えたほうが得策と考えていたのかもしれない。その結果、機会を見て、地球人絶滅の仕掛け人であるデカルトの口を封じ、「地球人絶滅」プロジェクトそのものを葬り去ろうとしたのではないか。あの喚問は査問委員会がそのために考え出した陰謀だったにちがいない。そして彼がまんまとその仕掛けにひかかったということなのだ。

彼はこのように考えることが自分の単なる思い過ごしではないか、と何度もチェックした。しかし完全に否定することができなかった。それでも彼は長い間迷い、逡巡を重ねた。だが、最後にはとうとう委員長に迎えの宇宙船の派遣を要請することを諦め、地球からの再脱出という考えを放棄した。

しかし、もう一つの残された選択肢はデカルトにとってできれば避けたいものであった。地球上で現在進行している環境悪化を食い止めることは、三百五十余年前に苦心して仕組んだ自分の仕掛けを全面的に否定することになる。これは彼にとって自分の人格を自ら否定するようなものだ。たとえ間違ったことでも、完全主義の彼には自分の過去を否定し訂正することは死ぬより辛いことだった。またこうすることは、結果的に査問委員会の言いなりになることであった。それはまさに、デカルト本人が自分の生命を守るために地球人絶滅の道連れとなる危険を回避しようと必死になって地球環境の悪化を食い止めようとするにちがいない、と計算した査問委員会の術中にまんまんと嵌まることでもあった。彼にとってこれは死んでも避けたいことであった。

デカルトにはどうしても連中を許すことができなかった。そのうえ、一度絶滅を策した相手である地球人との共存や共棲の道を探ることも真っ平ご免被りたいことだった。

とにかく、査問委員会は死の危険のある地球に自分を再派遣した張本人なのだ。誰がこんな査問委員会のために命を捨てて働くもんか。金輪際、査問委員会とは縁切りだ、とデカルトは強くこころに決めた。

デカルトは自分が仕組んだ仕掛けに自らまんまと嵌り込んだ自分を笑いたかった。よもや地球に再派遣されることはあるまいと高を括っていたが、

陰謀に敗れ、結果的に自ら志願した格好で地球に再派遣されてしまうことになったとは笑いたくとも笑えるものではなかった。

彼はふとわが身の危険を忘れ、地球人の絶滅を見届けてやろうではないかと思った。別に開き直った訳ではなかったが、彼は突然自分を見失い、不意に襲ってきた自虐的な虚無にひたすら身を任せたまま、地球人絶滅後、地球上に果てしなく広がる生命を拒否する荒涼とした原野を想像した。

一方で自分が仕組んだ仕掛けが予想を超えて機能していることに陶酔しているような気分もあった。このまま自分の仕掛けに自ら殉じて地球人と一緒に死んでいってもいいような気もする。

そのとき、ふとドームのなかで息を詰めほそぼそと生きているM星人のことが脳裏に浮かんだ。

彼が発信したミス情報に惑わされて、移住するために地球にやってきたM星人たちは生命が存在できない地球に着いた途端、上陸危険の信号を受けて恐れおののき、ふたたびあたふたとM星に引っ返していくだろうか。それともM星人を乗せた宇宙船は帰るところもなく宇宙を彷徨いつづけることになるのだろうか。

最後の希望を地球移住に託したM星人たちのことを想うと、彼はふたたび迷った。彼の頭のなかでは同じ考えが、まるで方向感覚を喪失した鳥のように、同心円を描いてぐるぐると回り続けた。

なんの前触れもなく、彼の面前に、クリスティナの艶めかしい白い裸身が現れた。ほんのりと上気した顔に艶めかしい小さな笑みを浮かべると、彼女はくるりと背を見せた。彼の想いとは逆に、彼女は一度も振り返ることなく去って行く。彼は遠のいていくクリスティナの妖しく光る白い後ろ姿を見失うまいと急いで立ち上がった。

第二章

5

「クリスティナ」

デカルトは夢遊病者のような焦点の定まらない目をして、ふらふらと彷徨った。ふとわれに返ったとき、彼は顔に入江からの涼しい風を受け、海岸の堤防に腰を下ろしていた。

目の前に石造りの大小の建物が密集している島が浮かんでいる。島の一角にまるで島を占有しているような広大な宮殿風の建物があった。

彼は長い間その建物を眺めていた。というより、自然と目が引き付けられ、目を離すことができなかったのだ。まえに見たことがあるような気がするが、全然違っているようにも見える。彼は何時間も飽かずに目を建物に向けたまま、まるで吸い付いたように動かなかった。

「スターデン・メラン・ブロールナ島……」

デカルトは記憶の奥底から響く声を聞いたような気がした。

五十歳を過ぎたデカルトが深く澄んだ碧い目をしたクリスティナとはじめて会ったとき、彼女はまだ二十代半ばであった。数学の大家で冷徹無比な彼が一目で魅せられてしまった。清純なまるで夢見るような緑がかった碧い目を見た瞬間、彼はこころを吸い取られ、彼女が一国の女王であることも忘れ、恋に落ちてしまったのだった。

クリスティナは六歳のとき、父王の後を継いで、スウェーデン女王となった。十八歳になると親政をしき、学問好きの彼女は学術を奨励し、アカデミーを創設する。自らも多くの学者と書簡の交換を行なうが、デカルトをストックホルムに招いたとき、彼女は二十三歳の若さだった。

十六世紀の初め、貴族の一人であった祖父グスタフ・ヴァサがスウェーデンの独立に成功して、王位に推され、ヴァサ朝を開く。二代目グスタフ・アドルフ（グスタフ二世）は当時の西ヨーロッパ諸国にならい、国の制度改革を断行し、内閣制度の確立や教育制度の刷新を進める一方、軍需産業や造船海運業など産業振興を計り、近代国家としての枠組みを整えたが、一六三二年、三〇年戦争の折、ドイツで戦死する。

「あの島がスターデン・メラン・ブロールナ島よ。あの大きな建物が王宮ね。もちろん、現在も使用されているわ。十八世紀に大幅に改修されてこのように大きな王宮になったそうよ……」

デカルトのそばで、観光客らしい中年の女がガイドブックを片手に連れの男に説明し出した。男は女のそばに幾分身を寄せ、耳を傾ける。

「旧市街にいってみる?」

デカルトは女の声に誘われて旧市街のほうに目を向ける。クリスティナと散歩した王宮の庭園を思い浮かべた。彼は二人連れのあとを追った。

橋を渡り、旧市街に入っていく。

西に傾いた午後の太陽といっても、夏は陽射しがかなり強い。デカルトは直射日光を避けながら、公園のベンチに腰を下ろした。

身体の芯に満ち足りた疲れがあった。デカルトは目を閉じ、木陰で微睡み始める。ふとクリスティナが近寄ってくるような気配を感じて、薄目を開けて辺りを見回した。人影のない木陰には真夏の午後の淀んだ空気が満

ちていた。彼はふたたび目を閉じる。
　クリスティナは大胆だった。半開きの薄いネグリジェの下で豊満な乳房が大きく揺れる。デカルトはクリスティナを追い、両腕で抱きかかえ、ベッドに横たえる。ネグリジェの前が割れてむき出しになった白い裸身が現れた。
　デカルトは唇を寄せ、ゆっくり身体を引き寄せた。背に腕を回して力を加え、長くのびた細い首筋に沿って唇を移し、肩を愛撫した。豊満な乳房が震え、乳首が彼の胸を擽る。
　二人は時を忘れて、宇宙を彷徨い続けた。永遠の瞬間が過ぎると、二人はふたたび、身体を寄せ合い、唇を合わせ、胸を合せる。そして二人は飽くことなく永遠の瞬間を求めて深淵を彷徨い、真空の果てしない空間に入り込んでいく。
　デカルトは上気してピンクに染まったクリスティナの裸身を思い浮かべた。身体が熱くなった。もう一度会いたいと思った。

「もしもし、これはあなたの帽子ではありませんか」
　薄目を開けると、一人の若い男が手に古びた登山帽を持って立っている。
「いや、わたしのではありませんよ」
　デカルトはベンチに凭れたまま、不機嫌な声で言う。大体、ひとが気持ち良さそうに眠っているのに、起こすやつがあるか。最近の若者は不躾で困る。
「すみません。眠っているところを起こしてしまって……」
「……」
　デカルトは目を細目に開けた。彼はしばらく声の主に怪訝そうな目を向けていたが、ふたたび目を閉じかける。
「お願いがあるのですが……」
　薄汚れたＴシャツに毛むくじゃらの長い脛を丸出しにした短パンの痩せたひげ面の男がひょろひょろと伸びた背を屈め、赤く日焼けした顔を突き出すようにしてにこっと笑いかける。その途端、汗臭い体臭がぷーんと鼻を突いた。彼は顔を顰めた。
「すみません。実はシャワーを使わせていただけませんか」
「何だって……」
　デカルトはまじまじと若い男の顔を見た。彼は夏の休暇に野宿をして世界中を無銭旅行して歩く若者たちのことを知らなかった。彼らは時折ホテルに泊まっている話しの分かる観光客に頼み込んで、シャワーを使わせてもらうことがあった。
「ムリにはお願いできませんが……、あなたが泊まっているホテルの部屋のシャワーをちょっとの間使わせて頂ければ助かるのですが……」
「ホテル？　一体、どこのホテルのことだね……」
　押し付けがましい言い方が気に入らなかった。デカルトはベンチの背に身体をもたげたまま、いつでも眠りに入れるような格好で、そっけなく応える。
「大体、わたしはまだホテルを決めていないし、部屋も取っていないのだ」
「え？　あなたはウソを付いている」
　若い男は悲しそうな顔をした。
「ウソ？　どうしてそんなことがきみに分かるのかね」

「わたしはあなたがTホテルから出てくるのを見ています。わたしたちはホテルからあなたのあとを付けてきたのです」

デカルトは身を起こして、じっと若い男を見た。眼差しに真摯な光があった。彼はふと自分で気付かないうちにホテルを決めていたのかもしれないと思い、右手でシャツの胸ポケットを上から撫でた。カードらしい感触を感じて、それを取りだす。

「それはドアのカードじゃありませんか」

ドアの電子式錠前用のカードだった。クリスティナにこころを奪われ、忘我の境地のなかでチェックインしていたのだろうか。

「……で、なぜわたしのあとを付けてきたのだね」

デカルトはふと不安を覚えた。もしかしたら、わたしの正体を知っている連中かもしれない。彼は一瞬緊張して若者の顔をじっと見た。

「とくに理由はありません。Tホテルのまえで、わたしの願いを聞いてくれそうな宿泊客を探していたのです。そのとき、たまたまあなたがホテルから出てきただけです」

Tホテルにはフロントのまえを通らずに内部に入ることができる出入口があること、またホテルの支配人は比較的理解があってシャワーを使っているところを見つかっても大目に見てくれるから、と若い男は付け加える。

こんな情報まで無銭旅行中の若者の間に行き渡っているのか。デカルトは若い男の行動に幾分呆れながらも、なにかしら愉快な気分になった。

「それじゃ、このカードをきみに貸して上げよう。わたしはもうしばらくここにいるからシャワーが終わったらカードを届けてくれたまえ」

「実は連れがいるのですが、一緒に使わせてもらっていいですか」

カードを受け取りながら、若い男は言いにくそうに言う。

「いいよ。何人でも連れて行きなさい。ただし、マネージャーに見つかったら、きみたちが支払うことになるのだよ」

「そんなヘマはしませんよ」と言いながら、若い男は顔一杯に笑みを浮かべ、大きな声で「クリスティナ、オーケーだ」と叫んだ。

デカルトはベンチから腰を浮かして、声を掛けたほうに目をやった。

金髪を後ろに束ね、くりくりした目をした女の子が木陰から立ち上がった。右肩にリュックを掛け、左手にもう一個のリュックをぶら下げて近づいてくる。

「クリスティナ?」

デカルトは思わず声を掛けた。

「はい、クリスティナです。クリスティナ・ライネンです」

目を丸くして、彼女を見た。どちらかというと、彼のクリスティナよりも幾分大柄で体つきもがっちりしている。だが遠くで見たよりはるかに整って可愛らしい印象を与える顔にはかすかに彼のクリスティナの面影があった。

デカルトは不思議な気分に襲われた。突然、胸のなかでなにかが音を立てて崩れ落ちた。

「ぼくはジョージ・アンダーソンです」

その声を聞いて、彼はようやくクリスティナから目を離し、若い男に目を移す。

ジョージは右手でクリスティナからリュックを受け取りながら「ルームナンバーは三一五号でしたね」と言って、左手で彼女の背を押し、会釈し

て去っていく。
　デカルトは二人の後ろ姿が見えなくなるまでじっと見送った。真っ正面から見ていたので気付かなかったが、男も彼女と同じように、長い髪を後ろで束ねている。そのとき彼も自分の長い髪を後ろで結わえていたことを思い出した。なぜあの男が自分に話しかけてきたかを理解した。若い男は自分と同じように長い髪を後ろで束ねている彼を自分と同類と感じたにちがいない。
　そのときまで、デカルトは突然話しかけてきた若い男を疑っていた。彼らと一緒にホテルに帰らなかったのもそのせいだった。もしあの二人が彼の正体を知っていれば、部屋に入った途端、二人は彼を捕えてしまうにちがいない。そして、水を張ったバスタブのなかに彼の頭を押し込むかもしれない。彼が地球の環境悪化を放置する決心をしたことを知れば、査問委員会は彼をタダでおくはずがないのだ。顔の大きい委員長はM星のために必要なら、刺客を差し向けることぐらい平気でやりかねない男だった。
　デカルトはベンチから立ち上がった。ホテルに帰る前に、彼はもう一度、あの二人に対する自分の考えが間違っていないことを確かめたかった。だが確かめる手段がなかった。彼はしばらく躊躇っていたが、ベンチの端に置かれた登山帽を拾い、まぶかく被ると、漸く決心して歩き出した。

6

　三一五号室に近づくと、黒い服の男たちは足を止めた。そのなかの二人がドアから離れて廊下の端に立ち、監視役を務める。残りの男たちがドアに耳を当て、室内の様子を窺った。
「シャワーを使っている。いまのうちだ」
　一人の男の声にもう一人が頷く。一人が小型電子機器を取り出し、解錠を試みる。デッドボルトが外れる音がした。
　浴室からシャワーの迸る音に混じって男女の上ずった声が微かに漏れる。
　一人の男が浴室のドアを押さえ、舌打ちをする。もう一人の男が一通の封書を机の上に置いた。それから男たちは絨毯の上を出鱈目に足早に歩き、無数の足跡を残してから出ていった。
　Tホテルの前で、デカルトは偶然、急ぎ足で立ち去る背丈が低く互いに影のように寄り添って歩く黒い服を着た男たちの一団と出会った。デカルトは素早く帽子のつばを下げ、顔を隠した。彼らはデカルトに気付かず足早に去っていった。彼は妙な胸騒ぎを覚え、急いでホテルに入った。
　ドアに耳を寄せると、話し声がした。彼はゆっくり間隔を置いてノックを三つした。話し声がぴたりと止んだが、しばらく待っても返事がない。
　彼はドアノブに手をかけた。同時に、ドアが小さく開いた。
　すき間からジョージの目が覗いた。
「あっ、遅くなりまして……、いま開けます」
　ドアが静かに半分開いた。ジョージは開いたままのドアの陰に身を隠してデカルトが部屋の奥に入っていくのを待っている。ドアの陰から白い裸身が浴室に消えた。代わりに胸にバスタオルを巻き付けたクリスティナが出てきた。ジョージが浴室のドアから腕を出し、タオルを催促した。彼女

はくるりと振り向き、頭髪を拭いていたもう一枚のバスタオルをジョージに投げた。

デカルトは黙って目の前で演じられる二人のパントマイムを眺めていたが、分厚い絨毯に無数の靴痕があるのに気付いた。

デカルトはしばらく靴跡を眺め、考え込んだ。故意に付けたらしい靴跡はなにを意味するのか。彼らは部屋のなかでなにを探し回ったのか。彼らはデカルトを拉致しようとしていたのか。それともやはり二人は黒い服の一味なのか。部屋の中には二人だけで、デカルトが不在であることを知って連絡をとるためにやってきたのか。

「シャワーを浴びているときに誰かが闖入してきたらしいのです。机のうえにこれが置いてありました」

いつのまにか黒いブリーフをはいたジョージが白い封書を差し出した。

デカルトはジョージの目をじっと見た。それからおもむろに右手を出し、封書を受け取る。

封書が濡れている。黒い服の男たちが入ってきたことにも気付かず、濡れたままで二人はなにをやっていたのか。デカルトはかすかに怒りが込み上げてくるのを感じながら、封書を開いた。

デカルト殿

任務を可能なかぎり早く遂行すること。

今回、貴殿の派遣先を東京にしたのは、日本が地球上で一番化学合成物質に汚染されている地域に該当しているからである。日本で環境悪化をストップし、環境を元通りに回復することができれば、地球上の他のすべての地域においてもそれが可能になるであろう。

日本列島を地球移住の中継拠点とするつもりであるので、即刻、東京に戻り、任務を遂行されたし。

追伸　諜報部員を若干数派遣してあるので、手助けが必要なときには連絡のこと。

最高会議査問委員会委員長　署名

デカルトは何度も委員長のサインを見た。彼には委員長のサインに見覚えがあった。確かに委員長の署名らしい。でも腑に落ちないところがあった。ストックホルムに来てから丸一日も経っていなかった。それなのに委員長署名入りの命令が届くとは合点が行かなかった。一瞬、彼は委員長自ら地球に来ているのかもしれないと思った。だがすぐそれを否定する。そんなことはあるはずがない。といっても確証はなかった。もしかしたら、地球に近いところに建設しているといっていた移住用中継基地が竣工し、そこに来ているのかもしれない。

デカルトはホテル前ですれ違った黒い服の男たちを思い浮かべ、委員長の署名を詮索することをやめた。それよりもさきに考えなければならないことがあった。とにかく、危機が迫っている。いずれ、委員長の命令に背いていることが見破られることだろう。そのときのために、身構えておかなければならない。居場所を彼らに掴まれていてはなんとしてもまずい。これでは彼らの掌中にあるようなものだ。

だがどうして彼らはこのホテルにいることを知ったのか。東京から付けてきたのか。やはり二人が怪しいのか。それにしても故意に残したとしか

思えない無数の靴跡はなにを物語るのか。もし委員長の命令に従わずここに留まるなら、無理やりでも東京に連れていくというメッセージなのか。それとも浴室から出てきた二人に気付いて靴跡を消す余裕もなく慌てて立ち去ったとでもいうのか。

いますぐここを引き揚げるべきか、それとも明朝にするか、デカルトは迷った。レースのカーテン越しにガラス窓から外に目を向けたまま、彼はしばらく窓辺に佇んでいた。

背後に人の気配を感じて振り向くと、ジョージとクリスティナがリュックを手に立っている。

「お陰でさっぱりしました。ありがとうございました」

二人は笑みを浮かべ、手を差し伸べた。水滴が滴り落ちるほど濡れていた長髪はいつのまにかすっかり乾き、二人とも後ろに束ねていた。

「今夜の宿はあるのかね」

「宿は空の下、至る所に有り、です。今夜は先程お会いしたあの公園で白夜を楽しみながら野宿しようかと思っていますよ」

二人は屈託なく笑う。

「それじゃ、その代わりにこの絨毯の上はどうかね」

デカルトはここを去るのを明日に延ばし、今夜はこの二人を護衛役にしてストックホルムの夜を楽しもうと思った。それに黒い服の連中のまえに二人を連れ出し、二人の反応をチェックしておきたかったのだ。

「オーケーなら、リュックを置いて、出掛けよう。当地特産のボイルした小エビはどうかね」

言い終わるや、デカルトは二人の返事を聞かずに部屋を出た。

七時を過ぎているのに、外は明るかった。

デカルトは二人の幾分前を歩きながら、街角で男たちが三人を見張っているにちがいないと思った。かといって、三人が一緒であれば、彼らが手を出すようなことはまずあるまい。彼は二人に守られてのんびりと夜の街を散策しようとこころに決めた。

だが不安もあった。もし二人が男たちとグルであれば、彼らはいとも容易くデカルトを拉致することができるだろう。そう考えるとデカルトは落ち着かなかった。

デカルトは二人を引き連れて、窓越しに王宮が見えるレストランに入った。Tシャツに短く切ったデニムのパンツ姿の連れを見て、ウエーターは顔を顰めたが、彼はかまわず奥に入って、窓際に席を取った。制止しようと追いかけてきたウエーターに素早くチップを握らせると、急に愛想笑いを浮かべ、革張りのメニューとワインリストを持ってきた。

「ここは魚介類がうまい。ボイルした小エビがいい。それに北海の舌平目のムニエルなんかどうかね。ムール貝はあるかな」

デカルトはメニューを見ながら、クリスティナに招かれた初めての晩餐会を思い浮かべた。目の前に運ばれてきた銀の大皿にはとてつもなく大きなロブスターや大小の魚、それに小エビが山盛してあった。

「ロブスターもいい」

デカルトはメニューに目を据えたまま、呟く。そんな彼の様子を見て、二人は互いに顔を見合わせている。

「あのぉー」

クリスティナ・ライネンがおそるおそるデカルトに話しかける。

「……」

彼はメニューから顔を上げ、彼女にライトブルーの目を向けた。

「バルト海から北海にかけての海域が世界で一番汚染されているところだといわれているそうです……」

「汚染？」

「さまざまな重金属や有機塩素系化学合成物質による汚染です」

「ここで獲れる魚介類はすべて汚染されていて、人体に有害だということ……なの？」

「まあ、健康への影響を予防するために、食べないほうがベターということかな。ことに若い人にとっては……。汚染物質は体内に蓄積するし、化学合成物質のなかにはごく微量でも人体のホルモンの働きを撹乱するものもある」

ジョージが口を挟む。

デカルトは若い二人の顔を交互に見た。

「きみたち地球人は環境悪化による絶滅を恐れているのかね」

「『地球人』ですって？」

二人が同時に口を開いた。しまった、とデカルトは思ったが、もう遅かった。

「われわれのことですよ。いまわれわれは化学合成物質汚染などの環境悪化で絶滅に瀕しているんじゃないの」

「あなたは一体何者です。環境悪化で人類が絶滅すると考えておられるのですか」

ジョージが一段と声を張り上げた。そばを通りがかったウエーターが不審そうな目を彼らに向ける。デカルトは二人に応えずに、ウエーターの目を反らすために、取りあえず、白ワインと茹でた小エビを注文した。そしてワインと小エビが届けられるのを静かに待った。

二人は黙って目を見合わせている。

デカルトは目の前の二人を見ながら、いっそのこと、三百五十数年前の仕掛けを話そうかと思った。二人はどんな反応を示すだろうか。もし二人が黒い服の仲間ならどうか。

彼は二人の目を覗き込んだ。だがなにも感じ取ることができなかった。彼はじっと考え込んだ。

ボトルのワインと大きな皿に大盛りした茹で小エビが運ばれてきた。ウエーターがコルクを抜き、ナプキンでボトルの口を拭いて、ワイングラスに少量のワインを注ぐ。

デカルトはおもむろにグラスを口元に寄せ、ゆっくり香りを嗅いだ。

そのとき、彼はグラス越しに同じ顔をした黒い服の男が二人、十数メートル離れた壁際の席からこちらを窺っているのに気付いた。何気ない振りをして、彼はワインを口に含み、静かに飲み込む。そしてウエーターに大きく頷いた。

デカルトは三人のグラスにワインが順番に注がれていくのをじっと見つめた。クリスティナ・ライネンもジョージ・アンダーソンも彼に見習うようにボトルからグラスに注がれるワインを見つめている。しかし彼の頭はグラス越しに見た男たちで一杯だった。彼らは音声拡大装置の付いたイヤホーンを耳にして、こちらの話を逐一聞き取っているにちがいない。

「クリスティナ、あなたの生まれはどこ？　かなりまえのことだが、わた

しもクリスティナという女性を知っている。そのひとにもう一度会いたくてここにやってきたが、用事を思い出したので、明日東京に戻る」
　デカルトは最後の「明日東京に戻る」というところで、意識して幾分声を張り上げた。
「そのクリスティナさんはストックホルムに住んでおられたのですか」
　クリスティナ・ライネンは目をきらきら光らせて、デカルトをじっと見た。
「直ぐ近くに住んでおられたのですよ、そのひとは。でももうここにはいないだろうな」
「いつころですか、ここに住んでおられたのは」
「あなたはスエーデン人?」
「ええ、そうです。いまはカナダの大学にいるけど」
「じゃ、いまから三百数十年前は……」
「十七世紀の初めの頃かしら。それならヴァサ朝のころだわ。そう、三代目のクリスティナ女王が治世していたころよ」
「ああ、そのころ……か」
「もしかしてあなたが知っているクリスティナは……、クリスティナ女王のことではないわね?」
　クリスティナ・ライネンはくりくりした大きな目を真ん丸くした。
「そうだとしたら……」
「ウソでしょう。三百五十年以上もまえのことですもの」
「そうね。ところで、クリスティナ女王の治世はずーと続いたのかね」
「彼女は一六五四年に退位したあと、パリからローマへと移り住み、カソリックに改宗して、八九年に六十三歳で死んだことになっているわ」
「四年後、クリスティナが退位した……」
「四年後?」
「いや、間違えた。退位してから、そのあとスエーデンの王朝は……」
「ヴァサ朝が絶えて、王位はツヴァブリュッケン朝へと移っていったのです」
「クリスティナは退位してから三十五年間も生きていたのか」
　デカルトは深いため息をついた。彼はクリスティナを捨て、召還に応じて即座にM星に帰ったことを後悔した。
「クリスティナ女王が一六五四年に退位したのは陰謀に敗れた結果だといわれていますが、実は在位中に産んだ子供に会いたくて退位したという噂もあります。真偽のほどは分かりませんが、在位中に産んだ女の子が無事生き長らえていれば、現在世界中に何百人か何千人のクリスティナの後裔がいるかも」
「クリスティナ・ライネン、きみもその後裔の一人かもね」
　デカルトは冗談半分に言う。
「……かもしれません」
　クリスティナ・ライネンはいたって生真面目に応える。
「……」
　デカルトはじっと彼女の目を覗き込む。ジョージは唖然として、口に入れようとした小エビを取り落とした。
「わたしの家系には、なぜか、代々、女の子にクリスティナと名付ける決まりがあったらしいのよ。ところで、あなたは……」

今度は彼女がデカルトの目を覗き込む。彼は動揺を感じ取られまいと目を閉じた。彼女の視線が顔中に痛く感じる。彼はじっと我慢するほかなかった。

クリスティナが女児を生んだと聞いた瞬間、デカルトは不意に胸が波立つのを覚えた。別れたときの彼女には妊娠の兆候なかったが、もしかしたらその子は自分の子ではないのか。だが異星人なのにそんなことがありうるのだろうか。彼はいうにいわれない奇妙な不安に襲われた

「あなたもあの一族じゃないの」

クリスティナ・ライネンはデカルトの耳元で低い声で言った。彼はどう応えていいのか分からなかった。薄目を開いて彼女を窺う。

「冗談よ、デカルトさん」

デカルトははっとして目を大きく開く。クリスティナ・ライネンが笑顔でジョージとウインクを交わしている。彼もつられたふうを装い、笑いに動揺をごまかし、辺りを見回した。壁際のテーブルに黒い服の男たちの姿がなかった。

彼女はどうしてデカルトという名前を知っているのか。二人は留守中に届けられた白い封書を盗み見したのだろうか。

一度泡立った動揺はなかなか収まらなかった。ワインを飲もうと、グラスを持ち上げたが、空だった。それでも彼は空のグラスを口にもっていき、底に残った数滴のワインを啜うように口の中にたらし込む。

茹で小エビもあらかた平らげ、殻の山ができていた。ワインのボトルも空だった。

彼は気を取り直して、ゆっくりグラスをテーブルに置く。

外はまだ明るい。北欧の夏は日が長い。新しい料理を注文しても、ホテルには明るいうちに戻れるだろう。彼は目でウエーターを探す。

「そろそろ引き揚げましょうよ」

ジョージがデカルトの動きを目ざとく捉え、腰を浮かす。

「僕にはデカルトさんにゆっくり訊ねたいことがあるんだ」

「そうよね。わたしもあるわ」

クリスティナ・ライネンは悪戯ぽっく笑う。

「どんなことかね。もう少しワインを飲みたいね。それと化学合成物質に汚染された北海の舌平目をね。どうかね」

デカルトはすっかり落ち着いた口調で言った。

7

デカルトは二人を連れて街の中心部をわざとゆっくり歩き、遠回りをしてホテルに戻った。

別に尾行する者たちが彼らの姿を見失うことがないように配慮したつもりはなかったが、黒い服の男たちはまだ黄昏のような夜の街をのんびりと歩く三人連れを尾行してホテルに入るまで確実に後を付けてきた。

デカルトは道すがら奇妙な感慨に囚われていた。この地球上にクリスティナが産んだ自分の子が延々と繋がり、何千人にも増えて世界中に広がり生きていると思うとなんとも不思議な気分に襲われる。街角でクリスティナと似た背格好の金髪の女の子とすりちがえば、そのなかのひとりではある

まいか、と思ってしまうのだった。
　無性にクリスティナに会いたかった。何度もクリスティナを想い浮かべた。だがなぜか足早に立ち去っていく彼女の後ろ姿しか浮かんでこなかった。なぜローマに向かう気になったのだろうか。
　それにしても、彼が去って間もなく、クリスティナはなぜ王位を未練もなく捨ててしまう気になったのだろうか。一度捨てたわが子が気になったからだろうか。それとも、彼がしきりに話していたパリやローマを思い出し、突然去った彼の面影を求めてかの地を訪ねて見る気になったのだろうか。それにしてもなぜ彼女はカソリックに改宗する気になったのだろうか。彼女にはカソリックが擁護する天動説よりもコペルニクスの地動説が妥当であることを口を酸っぱく説いたはずなのに、なぜ、あえてカソリックに改宗したのか。それは彼女を捨てた自分に対する当てつけだったのか。それともローマを安住の地と定めた彼女の生きるための方便だったのだろうか。
　デカルトは胸に痛みを感じた。そのときふと、自ら仕組んだ仕掛けのことが脳裏をかすめた。まさかそんなことはあるまい。クリスティナにかぎってあの仕掛けに嵌まるようなことはないはずだと思いながら、あの仕掛けのことを話したときの彼女の驚いた表情を彼は何度も思い返した。
　ホテルに戻ってからも、デカルトはソファでしばらく呆然としていた。さまざまな感情が胸の中で渦巻く。いつの間にか目の前にいる若いクリスティナ・ライネンをいままで感じたことのない思いで見ている自分があった。なかなかこころの整理がつかなかった。
　ふと、デカルトの頭のなかをひとつの衝撃が走った。
「なんちゅうこった」
　思はず、彼の口を突いて出た。ジョージとクリスティナ・ライネンの二人は互いに顔を見合わせ、一呼吸を置いて、笑いだす。
「……やはり、クリスティナ女王はもう生きていないんだね」
　そのとき、デカルトはなぜクリスティナが時の絶対支配勢力のカソリックに改宗したのか、はっきり悟った。彼女は死後、手放していたわが子の運命を思って、わが身を捨てて改宗する気になったにちがいない。
「もちろんよ。一六八九年に亡くなったわ。もう三百年以上も前のことだわ」
　クリスティナ・ライネンは呆れ顔でデカルトを見る。ジョージが目を光らせた。
「デカルトさん。あなたはあのデカルトと関係があるんですか」
「……」
「ルネ・デカルトですよ。近代哲学の父といわれているあのデカルトですよ」
　ジョージの好奇心の満ちた目と幾分苛立たし気な顔色を見て、彼は迷った。一瞬、率直に「オー、イエス」と言ってしまおうかと思ったが、そのまま口を噤んでしまう。
「われわれはあのデカルトを処刑することにしたんです」
　黙っているデカルトを見て、一層苛立ったのか、ジョージは穏やかでないことを口走った。
「なんだって？　なぜ、彼を処刑しなければならないのかね。クリスティナ女王と関係したからかね」

「え？　なんですって。そんなことじゃありません。冗談じゃない。彼こそ、われわれを苦しめている地球環境問題の元凶だからですよ。あのとき彼が余計なことを吹聴したばかりに、地球環境がすっかりダメになってしまった。われわれはいまや、清浄な空気を呼吸することも、化学合成物質で汚染されていない食物を口にすることもできない」

彼はふと不安を覚えた。この若い男はあの仕掛けを見破っているのだろうか。一瞬全身が激しく震え出し、脳裡に地球上で過した日々の出来事がなんの脈絡もなく彷彿し出す。

三百五十余年の空白が醸し出すのか、デカルトは得体の知れない不安に囚われ、現実とも夢とも分からない世界に入り込み彷徨いだす。

十六世紀から十七世紀にかけて、それまでヨーロッパを支配していた武人政治に変化が現れ、新たに知識人が台頭しつつあった。デカルトは軍籍を離れると、時流に乗って、彼一流の明解な言説を駆使して颯爽とカソリック教会が支配していた知の世界に切り込んでいく。暗黒の世界のなかで権威的価値の呪縛に縛られていた知識人に彼の没価値的な客観的思考は新鮮な衝撃を与えた。幼芽期にあった近代科学の世界に極端に割り切った要素還元主義に立つ機械論的考え方が新しい活力源となった。

デカルトが去ったあと、彼の方法論が魔力を振るい、ヨーロッパにおいて近代科学が大輪の花を咲かせる。それはまさに「革命」的な展開であった。この科学革命を基盤に機械文明が急展開し、十八世紀になってヨーロッパ各地で産業革命が巻き起こった。機械文明が隆盛期を迎え、近代ヨーロッパ文明が世界を席巻し出す。

なにもかもデカルトのシナリオ通りの完璧な展開だった。それでも彼の頭のどこかに、このような展開に対する懐疑があった。

実は、地球を去る間際に、禁を犯し、彼はしてはならないことをした。こともあろうに地球人に対して恋をしたのだ。そのときもうひとつ重大な過ちを犯していたのだった。

「地球環境問題は地球人が自ら招いたこと……じゃないのかな」

デカルトは苦し紛れに呟く。

「『地球人』？　まあ、いいや。確かに、地球環境問題は人類自ら招いたことにちがいない。だがそれをけしかけたやつがいるんだ。その元凶がデカルトなんだ」

「デカルトがどんな仕掛けをしたというのですかね」

デカルトはしまったと思い、口を抑えた。だが遅かった。

「『仕掛け』だと……」

ジョージは目を光らせる。

「いや、デカルトが元凶だというが……、そんなことは誰も思っていないし、たとえそうだとしてもいまでは誰もそんなことを気にしていないようだが……」

デカルトは慌てて、つづける。

「むしろ、地球人たちは……じゃなくて、現代人たちは豊かな社会の到来をエンジョイしているように見えるがね。大量生産大量消費大量廃棄文明をますます推進し、これを世界中に広げようと躍起となっているように見えるじゃないですか。そのデカルトを処刑だなんて……、彼が一体なにをしたというんですか」

「本質が隠されているからだ。われわれはすっかり物質的な豊かさに毒さ

れて、なんでも手に入ると思っているが、現に破滅の淵に立たされていることに気付かないだけなんだ。実は毒の入った食べ物を食べさせられて、人類はひたすらに絶滅への道を邁進中なのに」

「このような状況に気付いているなら、きみたちはどうしてこれを止めようとしないのかね。デカルトを処刑するよりもその仕掛けを解除するほうが重要だと思うがね、それとも……」

顔を上げると、じっとデカルトを見ているジョージの目と合った。デカルトは「すでに手遅れと思っているのか」と言おうとして口を噤んだ。この若い男は何者なのか。やはり黒い服の仲間か。それにしては出来がよすぎる。それともそのことをカモフラージュするために演技しているのだろうか。

「デカルトさん、あなたはレストランで『地球人の絶滅』と言った。あれはどういうことですか。さっきも『地球人』と言われた。それにデカルトが仕組んだ『仕掛け』とはなんですか」

「……」

なにか言わなければならないと思いながらも、口がただ開閉するだけでなぜか声が出ない。デカルトはもがいた。だがもがけばもがくほど声が出ないのだ。こんな若い男にいいように牛耳られてしまうとは近代哲学の祖も知れたものだ。彼は自嘲の笑みをもらす。

それにしてもこの男にあの仕掛けが本当に割れてしまっているのだろうか。もしこの男に仕掛けの仕組みが割れているとしたら、一体どうすればいいのか、デカルトは思い迷いながら呟く。

「もしデカルトがその元凶だというのなら、彼を取っ捉まえて彼に地球を原状回復させれば……。でもね、きみはデカルトを買いかぶっているんじゃないの。彼はキリスト教の教えに忠実に従い、ひたすら『地に満ちて地を従わせよ』を実践するために効率的な自然征服の方法論を提供したにすぎないのじゃないかね」

デカルトは幾分やけっぱちに言う。

「そこが問題なんだ。デカルトは地球が球体で有限であることを知っていた。それなのにそのことを敢えて無視して、彼は限度なき自然征服を煽り立てた。そのデカルトは三百五十年前に死んだのに、いまだに彼の亡霊が彷徨い悪さをしているのだ。亡霊に取り憑かれ、これをいまだに信奉する現代人のほうが悪いに決まっているが……。大体、なにも気付かずに、いまもって亡霊を取りつかせたままでいるとは、われわれも愚かしいかぎりだ。人類の進歩なんて、嘘パッチだ。人間の歴史は欲望の歴史で、文明は人間の欲望を限りなく刺激して人々を踊らせただけなんだ。そうさせた元凶がデカルトなんだ。彼こそ、われわれを踊らせ、人類を破滅に追い込むテロリストなのだ」

デカルトは三百五十年前に仕組んだ文明暴走の仕掛けを思い出し、それによって醸し出されてきた地球上の混乱を思い浮かべた。東京で体験した息が詰まりそうな酷い汚染大気が蘇ってきた。

要素還元主義から専門分化してゆき、全体像を見失った科学がバランスを失い、個別的跛行的な展開へと陥っていった。偏った科学をエンジンにした現代文明は偏った大量のアウトプットを生み出し、自分たちの生活の場所である地上を埋め尽くす。その結果、自分の首を絞めるように地球人は生存条件を劣悪化させ、自らの生存を自ら脅かしていったのだ。

闘争心が旺盛で戦争好きな地球人たちは、互いに難癖を付けあって、互いに飽くことなく勢力を張り合い、ぶつかり合う。このため互いに兵力の拡充に努め、強大な破壊力を秘めた兵器開発に血道をあげ、一九〇〇年代の前半には二度の世界的規模の大戦争をやってのけた。何百万何千万の犠牲者を出しても懲りずに、いまでも地球上のいくつかの大国は地球の全人口を何回も殺戮できる大量の核兵器を保有しているのだ。

さらに大量生産大量消費大量廃棄方式を地球規模に広げ、物資を浪費しエネルギーを大量消費して、地球資源の枯渇を招きつつある一方で、地球人は自らの生存条件を自動的に劣悪化しつづけ、内部から地球人の生存を脅かしているのに平気でいるのだ。

「地球人は本当に踊らされているのだろうかね。自ら好んでそうしているのじゃないかね」

デカルトは漸く開発した強力な大量殺戮兵器を抱え、試し打ちをしたくてうずうずして難癖を付ける相手を見付けだそうとしている狡猾な地球人の阿呆面を思い浮かべた。

ジョージは悲しそうな表情をした。

「いまはそう見えてもはじめからそんなわけじゃない。とにかくデカルトが仕組んだ科学技術のちぐはぐな展開のせいで、トンでもないことがいま日常的に生起しているのですよ。具体的証拠をあげると、現在、地球ではオゾン層破壊が進んでいますが、これがその一例です。大気層が地球を取り巻いていますが、その成層圏にオゾン層がありますね。これが太陽からふりそそぐ有害な紫外線を吸収して地球上に生物の生存に適した環境をつくりだしているのです。ところがこともあろうに、われわれが自らつくりだしたＣＦＣ（クロロフルオロカーボン）というガスでこれを破壊しだしているのですよ」

日本での商品名であるフロンはフルオロカーボン（炭素とフッ素の化合物）を略したもので、一九二八年、アメリカの化学者ミッジリーが冷蔵庫などの冷媒用に初めて合成した無色、無臭、無害の化学物質である。フルオロカーボンの種類は多いが、オゾン層を破壊するものはクロロフルオロカーボン（ＣＦＣ）である。これは炭素にフッ素と塩素が結びついた化合物で、大気中で分解されにくく、熱にも化学的にも強い。

このガスが冷蔵庫の冷却ガスとして世界中で用いられるようになったが、フロンのこのような性質によって、さらに、スプレーの噴射剤、ポリウレタンフォームの発泡剤、電子部品の洗浄剤など、用途が広がっていった。こうしてフロンの生産量が急増するにつれ、使用済みのフロンの量も増え、これが人体に無害だというので、そのまま大気中に放出廃棄された。その結果、大量のフロンが大気中で分解されることなく、成層圏まで昇っていく。

成層圏に達したフロンは強い太陽紫外線によって分解し、塩素原子を出す。この塩素原子がオゾン層のオゾンと反応し、オゾンを破壊しつづける。こうしてオゾン層が破壊され、有害紫外線がカットされずに地球上に降り注ぐことになるのだ。

ＣＦＣというガスは必要に応じて発明し開発ものだが、このガスが発明されたとき、これがオゾン層を破壊する原因物質になるとは誰も気付かなかった。

「これが証拠？」

「対象が細分化され、全体像を見えなくされた結果、われわれはこういう間違いを犯すとことになったのです」
「そうですか」
デカルトは短く応える。
「デカルトが仕掛けたのは、科学のバランスを欠く個別的跛行的かつエンドレスな『展開』だったのです。科学技術の際限ない展開によって生産力が拡大し、さらに巨大化大量化高度化を目指していくことにより、生産力に応じて消費量もさらに増大していく。そうすると、バランスを欠く個別的跛行的な展開によって原材料である資源の浪費が進み、これとともに地球環境も悪化し、地球資源が枯渇するといった問題が現実化してくるわけです」
「地球が有限だといっても、地球はかなり大きい。地球環境が悪化したり、地球資源を使い尽くすのはかなり先のことではありませんか」
デカルトはあえて逆のことを言う。
「いや、欲望に駆られた人にはこれで十分という感覚が欠けている。十分足りていても、欲深い彼らにはさらにその上を求めようとする。ですから、生産力が大きくなれば、それに応じて消費意欲を駆り立たせることはやさしいことなのです。そのうえ、経済学者の仮面を被った扇動者たちは消費を拡大することが経済を成長させる原動力だとけしかけています」
「……」
「近代ヨーロッパ文明から発展していまや世界を覆い尽くしている現代文明に見られる大量生産大量消費傾向はどうですか。そのうえ、意図的に大量廃棄を組み込んでさらに大量の消費を促しているではありませんか。その結果、地球上は大気や水域が汚染され、ゴミに埋め尽くされてしまっている」
「……」
「それなのに、全体像を見失った地球人には自分たちが現在なにを仕出かしているが全然見当がつかないのです。無限に広い空間と思われた地球環境が悪化してしまっていることを考えれば、無尽蔵にあると思われている地球のさまざまな資源もすぐ食い尽くしてしまうことでしょう」
「……」
「それに、これらの個々的現象は相互に関連し合って現象を相互に強め合っているのですよ。ですから今後幾何級数的に加速していくにちがいありません」
「でも、科学技術の展開如何によっては環境問題を食い止め、資源の有効利用が進むということもあるのではありませんか。また人口増加も抑えられ、それに伴う食糧不足という問題も解消することも、また医学の新展開によってワクチンなどの開発が進み、さまざまな感染症の蔓延を食い止めることもできるでしょう」
「そうするには科学技術に対して外部からなんらかの関与が必要です。たとえば、科学技術の展開に方向性を与えるとか、あるいは展開のスピードを弱めるとか、まあ、いわば科学技術のコントロールが必要です。でもそのようなコントロールは科学技術の全体像が見えてこそ可能なのです。全体像を見失った科学技術の展開は偏ったものとなりがちなものです。バランスを欠いた科学技術が際限なく展開をつづければ、さまざまな相互に関係のない雑多なアウトプットで溢れ、いずれ地球の有限の壁に突き当たり

ます。現状のままではこれを避けることは決してできません。そしていまや最終段階を迎えつつあるのです」

「最終段階？　ホントかね」

ジョージは睨むような目をしてデカルトをじっと見た。

国家による軍事力の強化、科学者による興味本位の恣意的な研究や利益追求を目指した企業による技術開発は必然的に偏り、バランスを欠く跛行的な展開をもたらすのだ。専門分化が進む科学技術分野のなかで金の卵を産む分野だけが極端に進歩しているのに、そうでない他の分野は取り残されたままさらに巨大化高度化大量化が進み、ますます跛行的度合いを高め、いまや科学技術は人類のコントロールを脱し、暴走しつづけているのだ。

このようなコントロールなき展開をつづける科学技術を用いて、国家や企業は利益追求のおもむくまま、軍事力や生産力の巨大化高度化大量化を追及しつづけている。これにともない、生産や消費の拡大による石油や石炭などの化石燃料の大量消費によって二酸化炭素を大量に大気中に放出して地球温暖化を引き起こし、また企業の利益追及や科学者の興味本位によって見境なく合成されたさまざまな化学物質によって大気や水域や土壌を地球的規模で汚染している。すでに地球上の生物生態系は多大な影響をうけ、多くの生物種が絶滅に追い込まれている。

ワクチンや医薬の開発にしても、これによって乳児死亡率や疫病による死亡者数が激減したものの、一方、貧困諸国を中心に、人口の爆発的増加を呼び起こしているのだ。人口爆発にともなう食糧不足を補うために、森林が伐採され、熱帯雨林が切り開かれ、殺虫剤や化学肥料など大量の農薬が散布され、大量の地下水が汲み上げられた。その結果、農薬散布による環境汚染が広がる一方、地下水枯渇の危機を招くとともに、地下水によって土壌塩分濃度を上昇させ、土地が痩せ、生産量が低下していく。さらに家畜の過度な放牧によって草木を根絶させてしまい、風雨で表土が奪われ、地上に砂漠化が広がっている。

また合成された殺虫剤の乱用によって耐性をもった害虫が増える一方で、抗生物質の乱用が耐性菌を生みだす。これに加え、熱帯雨林の乱開発で呼び覚まされた未知のウイルスや病害虫が地球上に張り巡らされたジェットなどの高速交通網に乗って瞬時に世界に広く蔓延し、人類に新たな脅威となっているのだ。

ヨーロッパという一地域から発祥した文明が世界化し、全世界をひとつの文明が覆い、経済分野を中心にグローバル化の大波が世界を呑み込んでいる。まるで巨大なブルドーザーで地均しするようにして世界均一化が進められているが、これはまさしく、地球の有限性の制約のもとで、利益追求のどん欲な目をした多国籍企業が生き残りを賭けて、なりふり構わずなんとか新しいフロンティアを探し出そうとしたあがきにほかならない。だがこれも結局、デカルトによって無限性を前提とする行動原理を信奉させられた人間らが試みる空しい努力に過ぎない。いくら足掻いてフロンティア探しをつづけようとしても、永遠に続けられるものはない。どんなことをしても有限なものを無限なものに変わることは不可能であるからだ。

グローバル化によって世界の単一均一システム化が進めば、世界システムを構成するさまざまなサブシステムが持つ多様な格差や規制が取り除かれ、一層効率良く富を掻き集め、富の集中が図れることだろう。だがそれと同時に、単一均一化した世界システムは一層脆弱化し、地球人は絶滅の

道を一気呵成に上り詰めることになるのだ。
「グローバル化の障壁として目の敵とされている各国間のダブルスタンダードや多様な規制格差こそが、実は、無限性を前提とする行動原理と地球の有限性との正面衝突を防ぐ緩衝帯となっているのです。というのは、さまざまな規制や格差それ自体が多様な新しいフロンティアをつくり出す可能性を秘めているはずです。ところがこれらを取り除いてグローバル化を押し進め、世界システムを単一の均一システムとしてしまうのですから、これによって人類の絶滅がより効率的に進むことになるでしょう。いま地球上を席捲しているグローバル化こそ、人類絶滅への紛うかたなき最終段階の一現象と言っていいのです」
ジョージは苦々しげに言う。
「地球人は自ら自分たちの絶滅に協力しているというわけですな」
デカルトは自分でもなぜか分からず、気分が高揚してくるのを感じた。彼は必死に堪えたものの、思わず笑みがこぼれた。
「デカルトは三百数十年前に、無限性を暗黙の前提において、地球（自然）の無制限な征服・支配をけしかけた。これがすべての元凶なのだ」
ジョージはデカルトの笑みに気付き、咎めるように言う。
「それにしては、なぜ、これらの現象のほとんどすべてが最近になって目に見えるような形で現れてきたのでしょうかね。三百五十余年前の仕掛けなら、もっと前から顕現化していてもよさそうではありませんか。このような現象と『仕掛け』との間には直接関係がないんじゃないのかね」
「急に顕現化したのは、これらの現象が指数関数的に増殖するものだからですよ」
「ね、ジョージ君、環境悪化が指数関数的に加速して進んでいるというけど、現に人類世界は現代文明を謳歌し、相変わらず大量生産大量消費大量廃棄を続け、多くの人々は嬉々として浪費の限りを尽している。このような世界で、きみが言うデカルト犯人説がポピュラーとは思えないけど……どうかね」
デカルトは幾分気をとがめながら、自信なげに低い声で反論する。
「なんですって？『人類世界』？　あなたはいつもちょっとわれわれと違った言葉遣いをするんじゃないですか。なぜです？」
ジョージが訝しげな目をして、デカルトを見た。
「その……それは……」
「まあ、いいや。とにかく、あなたの言うとおり、地球人には一度知った浪費の味は忘れ難いものらしい。デカルトさん、確かに、あなたが言われたように、この世界ではわれわれの考えは少数派です。いくら声を大きくしても、誰も耳を貸さないし、耳を塞いで聞こうとしない。でも本質は変わらない」
「なるほど、だがそれだけでもないんじゃないのかな」
「え？　なんですって……」
「浪費をけしかけている奴がいるんじゃないんですかね。利益を受けているものは一度手に入れた権利を決して離そうとしない。そしてさらに利益を増そうとなりふり構わず行動する。彼らはたとえば……、金や鉱石を掘り出そうと地中深く穴を掘っても、一緒に掘り出した不用なものを辺りに散らかしたままで、これらをふたたび地中に埋め戻そうとはしないし、また新しい化学合成物質をつくり出してもつくりっぱなしで、これを分解し

てもとに戻そうとしない。そのまま大気や河川・湖沼に垂れ流し、土壌を汚染し、最終的に海洋を汚染する。その結果、新鮮な美味しい舌平目を食べたくても重金属や有機塩素化合物などで汚染されたものしか食べることが出来なくなってしまっている」

「……」

「問題は誰がこうしているのか、ということじゃないの。こうしている連中を徹底的に懲らしめてこんなことを二度とやらないようにすればすむことじゃないの。だがそんなことをすれば経済がおかしくなってしまうと思っているのか、ただお茶を濁す程度だけで、決して徹底的にやろうとしないからじゃないのかね」

「……」

「それは……」

デカルトは「地球人自ら滅びを願い、そうしている」と言いそうになって、急いで口を噤んだ。

「人類が自らそうしていると言いたいのでしょう。でもこうなるにはどこかでボタンの掛け違いがあったからではないでしょうか」

「あくまでその張本人がデカルトというわけですか」

ジョージはこれに応えず、ただ澄んだ青い透明の目でじっとデカルトを見つめた。デカルトはこころに突き刺さるようなジョージの視線に査問委員会での委員長との激しいやり取りが蘇ってきた。

デカルトは不意に、委員長の命に従うよりも、この若い男が自分を処刑するというのなら甘んじて処刑されてもいい、と思った。どうせ一度は死の危険を冒して地球人の絶滅を見届けようとしたではないか。クリスティナのいない世界にはさらさら未練はない。いまさら老躯に鞭打って任務遂行の労をとることもあるまい。それに地球人に処刑されたとなれば、黒い服の男たちに追い回されることもなければ、あの顔のでっかい委員長から任務違背という不名誉な烙印も押されずに済むというものだ。それに死の危険のある任務を命じた委員長への面当てにもなる。

慌てふためく委員長の大きな顔を思い浮かべながら、デカルトは意を決してジョージと目を合わせる。

「デカルトはクリスティナの愛人だったのですか」

突然、クリスティナ・ライネンが口を挟む。彼女にはデカルトがつい口を滑らした一言が気になっていたらしい。

「そうだ、としたら……」

デカルトは彼女の目に複雑な色が浮かんでいるのに気付いて、言葉を呑んだ。

「もしそうなら……、わたしたちは……」

彼女がなにを言おうとしているのか、デカルトには容易に推測できた。彼女がクリスティナの子孫なら、デカルトの子孫でもあるかもしれないというのだ……。

「彼がクリスティナとはじめて会ったのは一六四九年だった。そしてその冬、ふたりは一緒に過した」

デカルトは静かに低い声で言う。クリスティナ・ライネンはまるで彼の声に揺すぶられたように身震いした。

「クリスティナ女王が翌年女の子を産んだ。するとその子は……、デカルトの子だったんだわ」

デカルトは全身に強い衝撃を感じた。頭のなかでクリスティナ・ライネンの声が木霊し、共鳴し、張り裂けるように力強く響いた。
クリスティナのピンク色に上気した艶めかしい顔が浮かんだ。デカルトは深い悔恨のなかで、彼女と過した日々を思い返す。

8

「ルネ、顔色が……、お具合が悪いのですか」
クリスティナが顔を寄せ、デカルトの顔を覗き込む。彼は顔を上げ、クリスティナを見た。
暖炉の炎に照りだされた顔にきらきら光る目がひときわ目立つ。彼は彼女を引き寄せ、目を凝らてじっと彼女を見つめた。
急に想いが込み上げて、胸が一杯になった。
「クリスティナ……、明朝、わたしはここを去らなければならない」
口の隙間から漏れ出たような低い擦れた声だった。
デカルトは黙って去るつもりだった。突然の召還命令とはいえ、秘密工作員という立場では不服を言うことは許されない。だが最後の別れにクリスティナを一目見ようと、デカルトは未練がましくクリスティナの私室へ通じる秘密の通路を通り抜け、扉の隙間からなかを覗いた。
クリスティナは暖炉のまえの長椅子に身を横たえ、本を読んでいた。微かに匂う彼女の甘酸っぱい香りが鼻を突いた。デカルトは匂いに誘われて思わず扉を押し、彼女のまえに跪き、両脚を抱えて頭を埋めてしまったのだった。
十年ほどまえに「方法叙説と三試論」を出版し、さらに五年まえには「哲学の諸原理」を上梓して、デカルトはヨーロッパの学会ではすでに重鎮として確固たる地歩を占めていた。スウェーデン女王自らの招聘とはいえ、寒くて長い暗い冬を思うとヨーロッパの北端まで出掛けて行く気になれなかった。
クリスティナは父王の戦死によって八歳で即位、十八歳から親政を行なっているものの、まだ二十代の半ばであった。父グスタフ・アドルフは軍事の天才であったが、文化をも奨励して新しい国造りを進めていた。若き女王は親政下父王の志を継いで、学術を奨励し、アカデミーを創設する。
このことを知って、デカルトは学問や芸術をこよなく愛する若い女王にいささか興味が掻き立てられたものの、最後の最後まで迷った。
出発の日、天気が良かったこととちょっとした彼の気まぐれから長い旅がはじまったのだった。
ピンクがかった透き通る乳白色の肌に愛くるしい目をしたクリスティナを一目見て、デカルトは一瞬のうちに招聘を受けたときに感じた迷いをすっかり忘れてしまった。いつのまにかクリスティナの私室に通じる秘密の通路を通り抜け、毎晩のように彼女を訪ねていた。世の中のことはなんでも知りたいと思う好奇心に満ちた目をした才気溢れるクリスティナはデカルトの話し相手として魅力に満ちて申し分なかった。それに情熱的な彼女の奔放な振る舞いが彼を虜にした。彼はいつの間にかM星の秘密工作員であることを忘れてしまっていた。
クリスティナの大きな目に涙が溢れた。デカルトは後悔した。やはり黙っ

て立ち去るべきであった。
「どうして急に……」
デカルトは迷った。M星から迎えが来るとは言えなかった。かといって嘘をつく気にもなれなかった。
デカルトはクリスティナの目を覗き込んだ。彼の話を一言も聞き漏らすまいと一心に耳を傾けているいつもと変わらぬ真摯な輝きが彼のこころに変化を呼び起こした。彼は素直にすべてを明らかにすべきでないかと思った。
「実は……」
まだ迷いがあった。
「迎えが来るのです。わたしにはどうすることもできない……」
デカルトはクリスティナを見ずに言った。彼女は必死に嗚咽を堪えていた。
「去る前に是非言っておかなければならないことがあるのです……。それはわたしのこれまでの著作や論文には間違いがあるということです。はっきり申しますと、『方法叙説と三試論』や『哲学の諸原理』でわたしが提唱した『対象を細かく分け、単純化して理解する』方法や『未知なものを既知であるように扱う』ことなどは特別の意図をもってでっちあげたものなのです……」
クリスティナは身を起こし、涙を溜めた大きな目でデカルトをじっと見つめている。デカルトはどう話していいのか見当がつかなかった。否が応でも立ち去らねばならないことになっている以上、クリスティナを悲しませるようなことはしたくなかったし、自分は異星人であることを告白してびっくりさせることもしたくなかった。かといって愛するひとに全くなにも話さないでほほかぶりをしたまま去ることはできなかった。彼のこころが許さなかった。
彼はクリスティナを苦しめないために半ば冗談めかして話すほうがいいのでないかと思った。
「わたしはあるところから『秘密工作指令』を受けておりました」
「『秘密工作指令』って？　どんな？」
クリスティナの目が輝いた。
「秘密の指令ですからお話できません。たとえ女王陛下にでもお話できないのです」
「まあ、絶対秘密を守ってもダメなの」
「それは無理です。秘密を明かしたことが知れれば、わたしの命はないのです。別に命が惜しいわけではありませんが……」
「わたしがあなたを守ってあげます。心配しないで『秘密工作指令』を話してごらんなさい」
「本当ですか」
「本当です。さあ……」
デカルトはじっと息を殺し、考えるふうを装う。
クリスティナは息を詰め、次第に顔を紅潮させていく。爆発しそうになったとき、デカルトは口を開いた。
「それは『五百年計画で地球人を絶滅に導く』ことでした」
「まあ、わたしたちを滅ぼそうというのですか。誰ですか、そんなことを考えているのは」

クリスティナは気色ばった声を出した。
「……」
デカルトは黙って、恨めしそうな目をしてクリスティナを見た。彼に無理やり話させておきながら、そのことをすっかり忘れているクリスティナが可愛らしかった。だがそんなことはおくびにも出さず、彼は不貞腐れた態度で口を閉ざした。
クリスティナは漸く自分の理不尽な態度に気付いたらしく、声を細めて言った。
「その指令を受けてどうしたのですか」
「そこで、わたしはそのために必要なデータを収集すべく故郷を離れて軍隊に入ったというわけです。そこで得たデータをもとに計画遂行のための仕掛けを考えようというわけです」
デカルトがおもむろに顔を上げ、クリスティナを上目遣いで見た。クリスティナの目に好奇に満ちた光が戻っていた。
「それでどんな仕掛けを考え出したのですか」
「はあ」
「『地球人絶滅』の仕掛けですよ。もう仕掛けてしまったのですか。でも一寸変ね。『五百年計画』というのは長すぎないかしら」
クリスティナは秘密指令がデカルトのいつもの作り話と思ったらしく、急に余裕をもった話し方に変わった。デカルトは彼女の変化に頓着せずに相変らず抑揚を抑えた平板な話し方をつづける。
「とにかく、完璧を期すために、地球の状況と地球人の特性について調べたのです」
クリスティナはすっかり作り話と思い込んだらしく、デカルトの話に「そうでしょう、そうでしょう」と頷く。
「これはいうまでもなく、仕掛けを効果あるものにするためには対象となる地球の状態や状況と地球人の性向や本性をよく把握しなければならないからです」
デカルトはもっともらしくするために同じことを繰り返す。
「それで……」
デカルトは段々乗ってきたクリスティナに視線をちらっと走らせてから、ゆっくりつづける。
「まず、地球人の性向や本性といったものを探って、この性向や本性をうまく利用して自ら絶滅することを仕掛けるためです」
「それで地球人についてどんなことが分かったのですか」
クリスティナもデカルトの言い方をまねる。
「地球人の性向や本性を利用するといっても、そのときどきの時代の流れに逆らうようだとうまくいかない。過去から現在そして未来へと流れる時代の流れを掴むことも重要なことです。時代に逆らうような仕掛けはどんなに優れたものでも社会に受け入れ難いものだからです」
デカルトの頭のどこかにまだM星の秘密工作員としての自負があった。彼はそれと闘いながら出来るだけ曖昧な話し方をした。
「ヨーロッパは地球上でどんな位置づけにあるのかしら」
「実体面の説明はあとでゆっくり申し上げます。いまはどんな考えに基づいて仕掛けを考えたかということだけを説明させていただきたいのですが、それはまあ、いわば……」

「先生お得意な方法論ということですね」
　クリスティナは完全に作り話にしてしまったらしい。デカルトにとってこのほうがかえって好都合であった。
「地球と地球人とについて得られたデータを基礎に、つぎは、どのような計画を作り上げるか、そしてこれらをどのような方法と手段で実行するか、ということになりますが、そのまえに、地球においてつくり出しうる地球人の絶滅条件について考えておかなければなりません」
「絶滅条件？」
「そうです。地球上の生物種である地球人が絶滅しうる条件ということです。言い換えると、地球人はどんな条件になると死に絶えるかということです」
「……」
「実は、地球上において、生命が誕生して以来、多くのさまざまな生物種が絶滅しているのです。こんど計画した地球人の絶滅にしても、地球生命史上のひとつの出来事に過ぎないと思われるものだということです」
「それで……、たとえば……」
「種の絶滅原因として考えられるものは、寒冷化とか乾燥化といった地球気候の急激な変化、海面水準の上昇や下降、捕食（飢餓）上の問題、疫病、他種との競争などのようですね」
「それで、仕掛けとして考えたことはどんなものですか」
「結論から言いますと、五百年計画で地球人を絶滅することはかなり難しいということです。すでに地球全域にわたり、広い範囲に分布している生物種を絶滅するには、巨大な隕石の落下とか、通常では経験したことのないような強烈なストレスを地球全域に与える必要があるからです。かといって、いつくるか分からない巨大隕石の落下を期待するわけにもいかない。ですから、すべて地球上において調達できるもので、地球人に強烈なストレスを与え、絶滅に追いやることができるものがあれば一番ということになるでしょう。そのような条件のもとで、わたしが考え出したのが『地球人による地球人の絶滅』という方法です」
「なんですって、『地球人による地球人の絶滅』？」
「そうです。地球人の日常的営為のなかに、地球人絶滅の仕掛けを組み込むのです。戦争によって地球人同士を相争わせ、殺戮を繰り返させて直接的に地球人を絶滅に導くことができればいいのですが、このような直接的な方法には限りがあるので、毎日繰り返す日常活動を通して地球人の生存条件を劣悪化させて、間接的に地球人の絶滅を計ろうと考えたのですよ」
「日常的営為？　もっと具体的に……、で、どうしてそんなことができるのかしら」
「まあ、地球人の日々の活動によって地球環境の機能や状態を悪化させればいいのです。これによっていろいろなことが派生するはずです」
「それはどんなふうに仕掛けるのですか」
　デカルトが考え出した『地球人による地球人の絶滅』戦略は、地球人と地球の特質を生かし、地球人の日々の営為を通して自ら絶滅に至らせるというものだった。
　そのために、一番目にデカルトが行なったことは地球人の性質や性向についての洞察であった。彼にとって軍隊での経験はこの洞察を深めるために有益であった。とくに彼は戦場という極限状態で示される地球人の闘争

心（競争心）に目を瞠らされた。それに欲が絡むと、大の大人でさえ、見境いがなくなるのだ。欲には権力欲、支配欲、金銭欲などさまざまだが、これこそが地球人相互間における殺戮の原動力だった。支配関係や利害関係あるいは差別などから醸し出される優劣や不平等意識あるいは嫉妬心が火付け役となって、精神の奥に隠された闘争心（競争心）を爆発させるのを何度も体験した。そして地球人に対してこの種の闘争心（競争心）を煽り、自分が一番だという意識を一人ひとりに持たせ、全体の絶滅を加速させるのだ。

二番目に、デカルトが注目したことは、地球についての客観的事実と一般の認識の間にズレがあることである。そしてこの認識のズレを利用して、地球人に誤解の上に誤解を築かせようというものだった。彼は地球が有限な球体であることを事実として認識していた。だが、ヨーロッパを支配するカソリック教会は天動説を唱え、地動説を異端の考えとして排斥している。彼はここに目を付けたのだ。

地球上においてはすでに二千年も前に地動説と思しき考え方が見られた（ギリシャ古典）が、当時教会は地球中心の天動説をかたくなに唱え、一般大衆に信じ込ませるようたたき込んでいた。これに対して、十六世紀になってコペルニクスが地動説を唱え、十七世紀に入ってガリレイが実証したものの、教会によって両者とも異端者として排斥された。これを見たデカルトは地動説についての自分の論文発表をあえて遅らせ、天動説が支配するまま、天空の中心にある無限の地平を持つ地球をイメージさせ、このことを最大限利用することを思いついたのだった。

三番目に、デカルトは隆盛期を迎えつつある近代ヨーロッパ文明に狙いを付け、これが地球人の日常的営為のなかで大展開するように、その中核を担う推進力に彼自身が提唱する近代科学を位置づけたのだ。

当時地球上では各地でさまざまな文明が開花していたが、そのなかで特異な趣をもっていたのが近代ヨーロッパ文明だった。彼はさまざまなデータから、西洋に発したこの文明が好奇心と競争心の強いヨーロッパの人たちによって近代科学を武器に今後数百年にわたって発展し続け、やがて世界を制覇し、世界を覆い尽くすことになると睨んだ。そしてこれに絶滅工作を仕掛け、文明爛熟の頂点で地球人ともども自壊する仕組みを組み込むことを考えたのだった。

「オリエントにも優れた文明があるのに、なぜヨーロッパ文明でなければならなかったのですか」

「それはキリスト教（聖書）を信奉する『己の欲するものを施す』人たちの文明だからですよ。このようにヨーロッパ文明は人間理性を中心にした唯我独尊型自己中心の欲の塊である『プラス』最大化文明といえるものですから、地球人の類いまれな闘争心にマッチして地球征服を押し進め、これが地球全体に伝播して地球文明化したとき、地球人の絶滅が地球規模で始まることになると考えたのですよ」

「どうして……」

「地球は有限だからですよ。地球がいかに広大なものでも有限である以上、われさきに『プラス』の追及をつづければ、やがて有限の壁に激突することになるからです。これとともに地球人の活動から派生して地球上に吐き出される『マイナス』も増え、これもいつかは満杯になって、地球環境全体を汚染することになるでしょう。また『プラス』と思われていたもので

も有限の壁に激突することよって『マイナス』へと転化することになるのです」

「オリエント文明はそうでないとおしゃるのですか」

「こっちは儒教の教える『己の欲せざるものは施すなかれ』の文明です。このほうは『マイナス』最小化に通じる文明だと思いますよ」

一見「己の欲するものを施す」ということと「己の欲せざるものは施すなかれ」ということとは、前者が積極的で後者は消極的の違いがあるものの、同じことを言っているように思えるが、全く別である。前者には相手の価値観を無視して自分の価値観を押しつけるところがあるのに対して、後者にはそれがないばかりか相手の意思を思いやるところがあるのだ。

「それで、仕掛けはどんなふうにして……」

「簡単にいいますと、地球人が文明の展開によって生み出す『マイナス』を自動的に増幅増殖させて、これによって地球人を自ら自滅へ追いやるように仕向けるというものです」

「もっと詳しく……」

「まず、文明そのものを暴走させることにしたのですよ。まあ、文明から制御・コントロールの仕組み（装置）を取り除いてしまったというわけです」

「そんなことができるの」

「まあ、無限の自然征服（支配）を煽ってやったわけですよ。地球人には世界の全体像が見えないようにしてエンドレスに自然征服をつづけるように仕向けたのです。そうすれば文明は暴走し、全体的なバランスを欠いたまま巨大化高度化大量化を辿り、それによってもたらされる偏ったプラスやマイナスのアウトプットが地球上に充満していくことになるでしょう」

「文明が暴走して……」

「そう、地球が暴走した文明に支配され、そのアウトプットによって埋め尽くされるようになると、やがて地球人全員も埋め尽くされてそれらとともに奈落の底へ落ちていくことになるというものです」

「もっと詳しく説明してください。第一に、どうすれば、地球人に全体像が見えないようになるのですか。第二に、どのようにして科学にバランスを欠く展開をエンドレスにつづけさせるのですか。そんなことがどうして可能なのですか。第三に、地球が征服され支配され、そのアウトプットによって埋め尽くされた瞬間に地球人全員が奈落の底へ落ちていくというのはどんなふうなものですか」

デカルトは仕組みを詳細に説明すべきか迷った。詳しく説明しだすと真実味が増し、いままでの作り話ふうな雰囲気で話してきた作為が崩れそうな気がするからだ。かといって好奇心に満ちたクリスティナに対して途中で説明を打ち切ることはできない相談であった。

「第一の点ですが、簡単に言いますと、自然を把握するのに、客観的に見ることを強調したのです。ですから、客観的にとらえることのできないものや目に見えないものはすべて捨て去ってしまうことになりました。これに加えて、こう吹聴したのです。大体、物事の本質は複雑なものではない。複雑なものを複雑なまま捉えようとしては、複雑さに災いされて、かえって本質を捉えることができないことになると……」

「自然を把握する方法ということですね」

「いかに自然を把握するか、それには方法論が重要なのです。方法が曖昧

だと捉えた対象も曖昧なものとなってしまう。こう説得して、合理的かつ客観的に対象を把握するためには方法がしっかりしていなければならないと強調したのです。自然を合理的かつ客観的に把握するには、対象とする事柄を可能なかぎり細かく分析して単純化してみることです。こうして目に見えないものや超自然的な現象を捨て去り、明晰な形で対象を把握することをすすめたのです。このような方法の有効性を徹底的に主張し、分析によって本質が捉えられるという考えを広めたのです。これとともに、事象の全体像を直接把握することの無謀さとともに、その必要性がないことを強調したというわけです」

「そういうことでしたか」

当時は知識人や科学者と称する人種の集まるサロンが折々に開かれ、そこでさまざまな問題やテーマについて学問的な議論が盛んになされていた。近代ヨーロッパの学問水準はそう高くなかった。ギリシャ、ローマの学問やイスラムの学問、それにキリスト教会の教義など、さまざまの知識や価値観が混在していた。

「そこでわたしは、自然をどのように把握すべきかといった基本についての考え方や方法を提示したのです。そして自然を客体として把握し、これを無制限に征服・支配することが可能であると強調したのです。自然をとことん分析していけば本質を捉えることが出来ると……」

「機械論的自然観ね」

「第二の点に関連するのですが、客体と主体、対象としての自然とそれを支配する人間というように、観察される対象（客体）と観察する自分（主体）を明確に区別することを説いたのです。こうして自然を科学技術によってとことん征服・支配できる対象であるとしたわけです。征服・支配される対象（自然）は客体であって、これは主体としての人間から離れて存在するものであるということにしたので、自然の征服・支配の手段である科学技術を誰にも気兼ねすることなくエンドレスに展開することが可能になったということですね」

「人間による自然の征服・支配……」

「これに与って力があったのが、カソリック教会が支持する天動説でした。地球が太陽の周りを回る小さな球体をイメージする地動説に比べ、地球を中心とする天動説には無限に広がる地平のイメージがあって、このことがわたしのアイデアを推し進める助けとなったのです。これによって地球には無限の広がりがあるということを暗黙の前提として科学技術にエンドレスな展開を促し、それが可能であることを錯覚させ、人間による自然の限りなき征服・支配を成就させることになるのです」

「科学の限りなき展開が地球人に跳ね返ってきて、地球人の絶滅をもたらすということは……」

「地球（自然）の限りなき征服・支配は、有限な地球においては、結局、地球人による地球人自身の征服・支配を意味するものです」

「地球人による地球人自身の征服・支配とは……」

「観念としての無限性に踊らされて、地球人は自分も地球を構成する一員であることを忘れて自然の征服・支配に励み、際限ないアウトプットを産出して地球を征服・支配した瞬間、地球のもつ有限性の竹篦返しが始まるというのが、第三のメカニズムです。まあ、地球人が自らの生存条件を劣悪化させる自動増幅増殖装置を稼働させ、これによって地球環境悪化が臨

界に達すると……」
「まあ、怖いわ」
「……」
「地球人を全体像が見えない盲目にして、科学技術にバランスを欠く個別的跛行的な展開を促し、これによって文明の暴走を企て、アウトプットを自動的に増幅増殖させ、地球の有限性との衝突を計り、その『マイナス』を地球に充満させることによって地球人の絶滅を計る……のね」
「まあ、そうなるかどうか」
デカルトは敢えて曖昧に応えた。彼はこれ以上クリスティナにこの問題についての議論をさせたくなかった。
彼はクリスティナを強引に引き寄せた。花園に頭を埋め、花芯に唇を寄せ、甘酸っぱい匂いを胸一杯吸った。

9

「デカルトが地球環境を悪化した張本人であるとして、それで彼を処刑してどうしようというのかね。三百五十年もまえに死んでしまったらしい男を処刑することの意味ですよ。それに、亡霊の彼をどのようにして処刑しようというのかね」
デカルトはとぼけて聞いたわけではなかった。クリスティナのことを想うと胸が痛かった。ジョージが黒い服の仲間であろうとどうでもよかった。彼はただこの若い男がなにを考えているのか、本心を確かめたかった。それにクリスティナ・ライネンが言っていたことも妙に胸にひかかって、彼の決心が揺らぎ出していた。もはや自暴自棄は許されないし、いたずらに処刑を受け入れることもできないような気がした。
「処刑……ですか」
ジョージはデカルトの質問の意図をつかめずにいるらしい。
「歴史から彼を抹殺しようとでもいうのですかね。大体、死者を相手に処刑しようとは、きみはなにを考えているんですか」
デカルトは突然笑いだした。処刑にこだわっている自分が可笑しかった。三百五十年もまえに死んでしまったことになっている男がなにを慌てふためいているのか。たとえ生きていようとも、地球では死んだことになっていれば死んだことにしておけばいいではないか。それとも処刑されるようなことになれば、近代哲学の祖と崇め奉られている名誉に傷がつくとでも思っているのか。もう遠く過ぎ去ったことはどうでもいいではないか。彼は自分の感情に封印しようと決心した。
ジョージは突然笑いだしたデカルトに唖然として、表情の動きが止まったまるで静止画面のような顔を向けた。その顔を見たとき、ふと彼にはこの男が黒い服の男のように見えた。
もしこの男が当のデカルトがまだ生きていることを知ったらどうするだろうか。彼は慄然とした。彼はようやく事態が極めて容易でない状況に置かれてるいることに気付いた。
デカルトは東京で予測を遥かに超えた超スピードで悪化している地球環境の実態を実感して、これをストップするどころか、減速することさえ容易でないことを知った。そしていまの自分に残された唯一の道は地球人と

ともに死ぬことだけだった。彼は残された時間をクリスティナとの想い出に耽りながらひとり静かに過したかった。

ところが若い男が出現して、デカルトを処刑するという。デカルトの子孫らしい若い女が現れ、地球上に子孫が何千人もいるという。それにデカルトを執拗に尾行する黒い服の男たちが待ち構えている。

黒い服の男たちがデカルトが任務を放棄してしまい、ひたすらクリスティナの想い出に耽っていることを知れば、彼を処刑すると言い出した若い男よりも早く、彼をゴミのように処分してしまいかねない。たとえデカルトが運良く地球環境の悪化を食い止めることができても、いずれ彼らはそうするだろう。任務不履行か命令違背か、理由はなんでもいいのだ。M星人が移住するまえに、地球上から『地球人絶滅』プロジェクトの関係者を一掃して、一つの痕跡も残らず処理してしまわなければ、M星人たちは地球上で安心して地球人たちと共棲できないからだ。

どんなにもがいてみても、遅かれ早かれ、殺されてしまうのだ。あの査問委員会での喚問で地球人との共存の道がひとつの選択肢として検討されたときから、デカルトは自分に対して死刑の宣告がなされていたことを察した。こんなことになぜいままで気付かなかったのか、彼は自分の愚かさを嘆いた。

彼はじっと若い男の顔を見た。それから若い女の顔を見た。二人の顔を見ながら、黒い服の男たちと平たい大きな顔の委員長を思い浮かべた。ところが大きく揺らぐ。

「『前門の虎、後門の狼』か」

デカルトは苦笑いを浮かべ、ソファから立ち上がった。つられたように、二人は顔を上げて彼を見上げた。彼は二人に構わず、ジャケットをベッドに投げ捨てると、バスルームに消えた。

デカルトはバスルームのドアを閉めると、乱暴にシャワーの栓を全開した。迸るシャワーを見ながら、彼は二進も三進も行かない現状を打開する道がないかとしきりに考えた。

ジョージはデカルトのあとを追ってバスルームに近づき、ドアに耳を当てた。シャワーの音が漏れてくるのを確かめると、クリスティナ・ライネンに合図した。彼女はベッドに放り出されたままになっているジャケットの内ポケットから素早く封書を抜き取り、封筒のなかから一枚の白い紙片を取り出して目を通す。ジョージが読み終わるのを待って、ふたたび封書をポケットに戻した。それから二人は前と同じ椅子に同じような格好で座ってデカルトが戻るのを待つ。

「一体、彼は何者かなぁ。まさか、あのデカルトじゃあるまいし……、かといって彼の亡霊でもあるまいし……」

ジョージが誰ともなく呟く。はじめて封書を見たとき、デカルトという名前しか目に入らなかったが、文面を読んで一層彼に対する疑問と興味が湧いた。もしかしたら、地球環境問題に対して共通の関心を持てる仲間かもしれない。

「あの人はクリスティナ女王の子孫かしら」

クリスティナ・ライネンの関心は別のところにあるらしい。

「最高会議査問委員会って、知っている?」

ジョージが彼女に目を向けた。

そのとき、バスルームのドアが開いて、デカルトの姿が現れた。
一瞬、二人が顔を見合わせた。デカルトはバスルームに入ったときと寸分変わらない格好をしているのだ。ソファに近づいて、二人のまえに腰を下ろした。目の前の彼からなぜかシャワーを浴びた痕跡は何一つ感じ取ることができなかった。
「シャワーを浴びたんじゃなかったんですか」
ジョージは不思議そうな目をして、デカルトをじろじろ見回す。
「浴びましたよ、ほんの軽くね。もう休みましょうか。疲れたでしょう。明日は東京の帰らなければなりませんからね」
デカルトは執拗に纏わりつくジョージの視線を払い除けるように勢いよく立ち上がった。ジョージも腰を上げる。
「まだお話があります。もう一寸いいでしょう」
ジョージはデカルトの両肩を手で押さえつけるようにしてソファに座らせた。不思議なことに、肩を押した手は全然抵抗なくまるで空気を切るようにさっと下りた。かといってデカルトがソファに勢いよく沈んだわけでもない。ジョージは目を大きくしてデカルトの顔を見て様子を窺う。
「どんなことですか、お話とは」
まだ呆気にとられて立っているジョージを見上げて、デカルトはなんでもなかったように言う。
「はあ」といいながら、ジョージは慌てて腰を下ろした。
クリスティナ・ライネンは二人の様子を怪訝そうに見守っている。
「……あなたは……いったい……何者ですか、……大変不躾ですが……、まさか……」
ジョージはデカルトに目を据えてしばらく口をもぐもぐ動かしていたが、喉の奥から無理やり押し出したような声で言った。
「わたしですか。デカルトですよ。あなたたちが近代哲学の祖といっているルネ・デカルトですよ」
ジョージは口を大きく開け、クリスティナ・ライネンは前屈みのまま、二人は静止してしまった。二人はそのままの格好でしばらく動かなかった。
「ご冗談でしょ。まさかそんなことはありえるはずがない」
「そうですか」
「大体、デカルトが生きていたのは三百五十年以上もまえのことです。彼はとっくの昔に死んでしまっているのです」
「きみは彼が死んだのを見ているのですか」
「……」
「見ていないでしょう。それなのにどうして彼が死んだというのですか。さっき、きみはデカルトを処刑すると言っていたじゃありませんか。彼がまだ生きているから処刑すると言ったんじゃなかったのですか」
「化け物じゃあるまいし、三百五十年以上も生きつづけているわけがないでしょう」
「デカルトが亡くなったから、クリスティナも王位を捨てて、彼の面影を追い求めてフランスやイタリアへ旅したんだわ」
クリスティナ・ライネンが口を挟む。
「とにかく、冗談はよしてください。ところで、デカルトさん。あなたは地球における環境悪化の状況をどう考えておられるのですか。それになぜ、明日、急に東京に行かれるのですか」

「地球の状況かね……、それはとても酷い……」
「地球人は絶滅するのですか、環境悪化によって……」
「地球人ですか」
「あなたはそう思っているのでしょう。でなければ、どうしてあんな……」
ジョージは口を滑らせ、危うく「任務」と言いそうになった。そのとき一瞬、デカルトの目が光った。ベッドの上に放り出したままになっているジャケットを一瞥すると、彼はふたたびジョージに視線を戻した。
そのとき、廊下に微かな足音がした。ドアの前で足音が止まった。何人かがドアに身を寄せ、なかの様子を窺う気配がする。三人は互いに顔を見合わせ、息を呑んだ。
しばらくして、ドアと絨毯のすき間から一通の白い封書がゆっくり差し込まれた。それからほどなくして、廊下の絨毯を踏む微かな足音が遠のいていった。
ジョージが素早くドアに近づき、ドアを開いて廊下に出た。すぐドアを閉めると、床に落ちている封書を拾った。
「誰もいなかった」と言いながら、彼はデカルトに封書を渡す。
デカルトは受け取った封書を手にもったまま、開こうとしない。
「誰だったのですか。その封書を持ってきたのは……」
デカルトは黙ったまま、まるで余計な心配はするなというふうな目つきで、ジョージを見る。それから封書を開く。さっと目を通すと、小さく折ってシャツの胸ポケットに押し込む。
ジョージはメッセージを読んだデカルトの顔が幾分蒼くなったような気がした。大きな飛び出た目に迷いが浮かんでいるように見える。
デカルトは頭のなかでメッセージを何度も反芻した。
――例のプロジェクトのことは一切地球人に洩らしてはならない。そのことが地球人に知られれば、M星人は地球人と共存することが不可能となるからだ。洩れるおそれがあると判断したときは、容赦なく即座に適当な処置をとる。目標が一日も早く達成されることを祈る――
これはデカルトに発せられた委員長から警告だった。彼には委員長が口を封じるためにどんな処置を取りたがっているかはっきり分かっていた。黒い服の男たちはそのために派遣されたにちがいない。
ジョージやクリスティナ・ライネンと行動をともにすることは危険なことであった。同じ日に二度もホテルの彼の部屋までわざわざメッセージが届けられるようなことは異例なことだ。最初のメッセージを無視して二人と一緒にレストランに行ったこと自体、委員長の命令に従わない行為だった。地球人と親しく会話を交わすことでさえ、秘密漏洩の危険があると判断される恐れがあった。
それにもしかしたら、若い二人の素性が委員長にばれているのかもしれない。喚問のとき、委員長に届けられた紙片にデカルトの若き日の地球での行状がメモられていたのではなかったか。だとすればそのなかにはクリスティナとの関係はもちろん、いま地球上に生存している子孫のリストまでふくまれていたにちがいない。
そのなかにはもしかしたらクリスティナ・ライネンもリストアップされていたかもしれない。そのクリスティナ・ライネンと一つの部屋にいるのだ。これではどんな嫌疑がかけられても弁明しようがない。二度目のメッセージは処刑の予告ということか。

ジョージとクリスティナ・ライネンが胸の内を探るような目をして彼の目の中を覗き込んでいる。そんな二人を交互に眺めながら、彼はもう一度根本から戦略を練り直す必要があると感じた。

デカルトは二人に盗聴盗視装置が設置されている可能性があることを知らせ、部屋中をくまなく調べさせた。痕跡が見つかったものの、それらしいものを見つけることができなかった。かといって、部屋に盗聴盗視装置が設置されていないということにはならない。見落としたところがあるかもしれない。彼は用心に用心を重ねて、テレビの音量を上げ、二人の耳元で囁くように言う。

「わたしを掴まえようとしてつけ回しているものがいる。彼らに捕えられる前に、わたしの知っていることを是非話しておきたい。多分、現在進行中の環境悪化を食い止めるために大いに役立つと思う。だがここで詳しく話すことができない。明日、一緒に東京に行ってくれないか」

二人は互いに顔を見合わせている。

「明朝に返事してくれればいい」

デカルトは二人を残してベッドに入った。二人はしばらく低い声で話し合っていたが、やがてスリーピングバッグを取りだして潜り込んだ。

デカルトはベッドのなかで、これからやろうとすることをもう一度確認する。

彼は黒い服の男たちが集団で彼をつけ回していることから、委員長がまだ地球へのM星人移住計画を諦めることなく、これを強行しようとしていると判断した。もし地球移住計画を放棄してもいいと考えているならば、彼にやりたいことをやらせておくにちがいない。『地球人絶滅』プロジェクトが地球人に洩れようが、彼が環境悪化に巻き込まれて死のうがどうでもいいことだからだ。

相変らず黒い服の男たちが彼をつけ回しつづけているのは、彼にやってもらいたくないことがあるか、それともどうしてもやらせたいことがあるかのどちらかだ。前者であれば彼は処刑され、後者であれば監視のもとに彼は強制労働を強いられることになる。

顔の大きい委員長は、デカルトにどうしても地球環境の悪化を食い止める仕事をさせたいのだ。これができなければ、M星人の移住計画さえ覚束なくなるからだ。だがこの仕事の条件はプロジェクトの秘密を洩らさずに遂行することだ。秘密が漏れれば、M星人は地球人と共棲できなくなって、移住計画自体が頓挫してしまう。

デカルトには地球環境の悪化を食い止めて欲しいが、彼が生きていると「地球人絶滅」プロジェクトの秘密が漏れるおそれがある。地球環境悪化を食い止めなければM星人を移住することができない。プロジェクトの秘密が漏れれば地球人はM星人を目の敵とするだろう。どちらにしてもM星人は地球人との共棲が不可能となってしまうということだ。

デカルトにとって、もし仕事がうまくいかなければ、悪化した環境のもとで、彼も地球人ともども息絶えることなるだろう。かといって、うまくいったらいったで問題があった。もし仕事がうまくいってM星人が移住できたら、彼らの安全を第一に考え、委員長はプロジェクトの秘密漏洩防止にこれに関与したものたちを処刑するか、やがて死の星となるM星に閉じ込めてしまうことだろう。

黒い服の男たちに捕まれば、どっち道、地球上で生き永らえることはで

きないのだ。遅かれ早かれ抹殺されてしまうことに変わりなかった。
殺されるまで委員長に忠誠を尽くすか、それとも、こんな仕打ちをする委員長に対して仕返しをするか。いずれを選択すべきか、これが彼の今後の行動にとって一つのポイントであった。
いくら顔が人一倍でっかいからといって、それだけで委員長を毛嫌いし、仕返しを考えるほど、彼は偏狭ではなかった。だがM星人全体のために個々人を犠牲にしても許されるとする独善的な考え方が彼にはどうにも気に入らなかった。
かといって、猛スピードで進行している地球環境の悪化を彼ひとりでどうやって食い止めることができるか。彼が環境悪化の仕掛け人だったとしても、すでに修復不可能なほど悪化している地球環境をただ一人でどうやって元通りにできるというのか。それは風車に立ち向かうドンキホーテのように思えて仕方がなかった。
こうなったら「皮を切らして、骨を切る」ほかない。そこで彼は最後の手段として、わが身を捨てることにしたのだった。
彼は現に地球上に生きているであろう数千の自分の子孫のことを思った。できれば彼らに先祖の悪しき行状を知らせたくなかった。彼らが「地球人絶滅」計画の仕掛け人の子孫であることを知ったらどんなに肩身の狭い思いをすることだろう。彼らは日陰の一生を過すことになるのか。できれば仕掛け人だったことを永遠に伏せておきたい。これが可能なら、委員長の言いなりになってもかまわないとさえ思う。
だがジョージが「デカルトを処刑せよ」と言い出している以上、たとえ彼自身が口を封じていても意味がない。すでに「近代哲学の祖」の名声は地に落ちてしまった。そしていまや「地球環境悪化の父」に成り下がってしまったのではないのか。いっそのこと、地球人に対して「地球人絶滅」プロジェクトを実行したM星の秘密工作人だったことを告白して、その仕掛け解除に一役を買い、名誉回復を計ったほうがいいのではないか。
このような思考を経て、デカルトはジョージ・アンダーソンとクリスティナ・ライネンとを東京への同行を誘ったのだった。

クリスティナ・ライネンはスリーピングバッグに潜り込んだものの、いつものベンチとは違い、ソファが柔らかすぎるのか、なかなか寝つかれなかった。夜空の下と違い、ホテルはエアコンが利いているとはいえ、息苦しく、息が詰まりそうになる。彼女はスリーピングバッグから抜け出し、思いきり身体を伸ばした。
わが先祖は、ジョージが処刑に値するという、あのデカルトなのだろうか。とすれば、クリスティナはなぜそんなデカルトの子を産む気になったのだろうか。もしデカルトが近代哲学の祖であるならば、彼一流の深い洞察力をもって、当然今日の地球環境の状況を予測していたはずだわ。にもかかわらず、なぜ地球環境問題の元凶と名指しされるようなことをあえてしたのだろうか。
いくら考えても堂々めぐりするだけで、思考が先に進まなかった。暗闇のなかからジョージの寝息が伝わってくる。彼女はヒントを求めるように、ベッドのデカルトを窺う。だがカーテンの隙間から洩れる微かな光に浮かび上がるベッドの小さな塊は、眠り込んでいるのか、石のように動かなかった。

「話しておきたいといっていたけど、一体どんなことなのかしら」

はじめて会ったばかりなのに、なぜか彼女はデカルトをずっとまえから知っているような気がしてならなかった。どうしてそんなふうに感じるのか、不思議だった。やはり、彼は同じ一族ということなのかしら、そしてわたしたちはクリスティナとデカルトの子孫ということになるのかしら。

ふと廊下の絨毯を踏む微かな足音が聞こえたような気がした。ベッドの黒い塊が動き出し、ベッドを下りてドアに近づいていく。様子を窺うように、黒い影がドア際に佇む。それからドアの覗き穴に目を当てる。

クリスティナ・ライネンは廊下の足音が遠のいていくのを感じた。ほどなく、ドアから黒い塊が戻ると、何事もなかったようにベッドに潜り込んだ。

第三章

10

「じゃ、きみたちはわたしに協力してくれるというんだね」

デカルトはテーブルの正面の席に並んで座っているジョージとクリスティナ・ライネンに目を向けた。二人の意思をもう一度確認しておきたかった。

デカルトは二人を伴って東京に戻ると、最初のアジトをそのままにして、予備に用意していたもののなかから当面のアジトとして古いアパートの一室を選んだ。まえのアジトは留守中に荒らされ、いいように細工されている可能性があったからだ。あとでゆっくり盗聴盗視装置のあぶり出しをするとして、彼はひとまず三人の新しい活動拠点をあまり目立たないボロのアパートに確保することにした。

新しいアジトは繁華街の中心から若干はずれた古びた三階建のビルの最上階にあった。この一角はバブル時に地上げに会い、現在その後遺症から裁判沙汰になって長い間再開発がストップされている。ビルにはエレベーターがないので階段を上り下りしなければならないのが難点だったが、階段がむき出しになっているので、尾行者や外からの侵入者を容易にチェックできた。

アパートは家具付きの二ＬＤＫの大きさで、中央に大きなテーブルが置いてあるリビングルームが彼らのワーキングスペースになった。

デカルトは差し当たり二人を東京までの護衛役と考えていた。二人と一緒であれば、黒い服の連中でも簡単に手を出すまいと思ったからだった。ところが東京に着いて、別れるときになって、急にクリスティナ・ライネンが行動を共にしたいと言い出した。飛行機のなかで話したことをどう理解したのか、ジョージも同じことを言う。

「わたしは監視されている。これからわたしがやろうとすることを知れば、彼らは本気になってわたしの命を狙うだろう。わたしと一緒に行動すれば、きみたちも巻き添えを食うことになりかねない」

デカルトは命令に忠実に従って東京に戻り、任務を遂行するように見せかけたものの、全然別のことを考えていたのだ。二人とも空港で別れるつもりだった。

委員長にとってはデカルトが東京にじっとして居てくれさえすればよかった。それだけで地球の環境汚染に関するＭ星人デカルトの生体実験データが手に入るのだ。余計なことは一切する必要がなかった。

デカルトには委員長の思惑も東京に戻ることの危険性も分かっていた。生体実験のデータが欲しい委員長は彼が東京で無為に毎日遊んで暮らしていようとも大目に見るだろう。ある期間健康で問題なく過せることが分かれば、そのときはお役ご免となって消されてしまうにちがいない。

時間が無かった。正面の二人を前にして、迷っている時間は残されていないのだ。

デカルトはあくまで任務を全うするふりをして、まず東京を拠点に環境悪化を食い止める行動を起こす。同時に、これを地球全体へと広め、地球環境問題の解決を試みるつもりだった。クリスティナがわが子の安全のために王位を捨て、信仰を捨てたのなら、自分もわが身を捨ててふたりの子

孫の安全を図らなければならない。
とにかく急がなければならない。M星人移住の期限が迫っている。余裕がない。
「……」
二人は何も言わず、じっとデカルトを見ている。
「とにかく、わたしがこれからやろうとしていることには死の危険を伴うものだ。それでもあえて協力するというのかね」
デカルトは念を押すように二人の目を交互にじっと見る。
「死の危険があるといっても、このままでもいずれは地球人が絶滅するんじゃないんですか」
ジョージは口をとがらす。
「それでも何十年かは生き永らえられる」
「もし絶滅を回避することができれば、人類はさらに生き続けられることになる。とにかく環境悪化をストップすることだ」
「もし成功すれば、そうなるかもしれない」
「成功するわ、きっと」
クリスティナ・ライネンが力を込めて言う。
「環境悪化をストップすることは、そんなに簡単なことではない。非常に難しいことだし、地球人の半数を敵にまわすことになるかもしれない」
「それでもいいわ、環境悪化でじわじわと息の根を止められるよりは」
「こんな議論をしている暇があるのですか。一刻も早く行動を起こすことでしょう。さあ、はじめましょう」
「きみたちの決心のほどが分かった。もうひとつ、言っておきたいことがある。これを聞いても決心が変わらなければ、早速、一緒に行動することにしよう」
デカルトは一呼吸おいてから、自分がデカルト本人で、M星の秘密工作員として「地球人絶滅」の仕掛けをしたことを告白した。
二人は口を開けたまま、半ば呆気に取られ半ば怖気に囚われた目をして、デカルトをまじまじと見つめた。
「信じてもらえないかもしれないが、このことを伏せたまま、きみたちに協力してもらうわけにもいかないからね」
デカルトはダメを押しながら、まだ唖然としている二人の目をじっと覗き込んだ。彼にとってこの告白はまた、二人が黒い服の仲間かどうかをチェックするための最後の賭けでもあった。だが二人の目にはM星の秘密工作員だと聞いて驚いているだけで、疑わし気な動きが見られなかった。彼は二人があの仲間ではないと思った。
「……」
二人はまだ口を開けたまま、互いに顔を見合わせる。
「どうかね。決心が変わったかね」
「でもそんなことを急に言われても……」
ジョージが擦れた声を出した。
「じゃ、止めにすんだね」
「とんでもない」
同時に、二人が叫ぶ。
「それじゃ、時間がないから、われわれはまず、デカルトを処刑することからはじめよう。取りあえず『デカルト処刑』をインターネットで世界に

向けて発信するのだ。彼の罪状を暴き、環境悪化をストップするための警告を流すのだよ」

「ちょっと待って下さい。時間がないのは分かりますが、あなたは地球の環境悪化をストップするためにどんなことを考えているのか教えていただけませんか。われわれも地球環境問題を解決するためにこれまでいろいろなことを実践してきていますし……、それになぜ薮から棒に『デカルト処刑』をあなた自身が発信しようとするのか、その意図はなんですか。それにはどんな意味が込められているのですか」

「そうね。わたしもそう思うわ」

デカルトは二人を協力者として扱っていなかったことに気付いた。護衛役が助手になった程度の扱いに二人は不満なのだ。それにデカルト本人がなぜ自分自身を処刑しようとするのか、普通に考えたら不思議に思うのも当然なことだった。

だが彼にはまだ迷いがあった。自ら自分の人格を否定するようなことをはじめるのだ。まだ自分の考えていることをすべて打ち明けるまでこころが整理されていなかったし、デカルト自身すら自分の考えたように行動できるか必ずしも自信がもてなかった。地球人の生存条件が予定通り劣悪化しているが、そのなかで自分が想定した以上の猛スピードで環境悪化が進んでいるため、どんなことをすればこれを無事ストップすることができるか、まだ暗中模索のところがあった。

「正直に言おう。最終的戦略目標は現代文明を破棄して新しい文明に変えることだが、そのワンステップとして、まず現在地球上で猛烈な勢いで進行中の環境悪化を食い止めることが必要なのだ。進行する環境悪化をこのまま放置すれば取り返しの付かない事態に陥るかもしれないからだ。かといって、単に環境悪化を食い止めればいいというものではない。より正確に言えば、現在の環境悪化を食い止めることが新しい文明への道程の一段階として行なわなければならないのだ。環境悪化の元凶である現代文明をそのままにしておいては、一時的に環境悪化を抑えられても永続的に環境悪化を抑えることにはならないからだ。とにかく闇雲に環境悪化をストップすればいいというものではないということだ。分かるかな、わたしのいうことが……」

「……」

二人は無言でじっとデカルトを見ている。

「地球人のなかの環境問題に関心をもつ人びとが、現在、この問題を解消すべく循環社会とか、持続的発展とか、いろいろ新しく試みようとしているようであるが、わたしの見るところでは、彼らが実現しようとしている文明の全体ビジョンがはっきりしない。環境問題対策を単なる現代文明の延命策として考えているのか、それとも新しい文明へのワンステップと位置づけているのか、はっきりしないのだ。もし現代文明の延命策と考えているなら、それは無駄なことだし、もし新しい文明へのワンステップと位置づけるなら、新しい文明とはどんなものか全体像を明示しなければならない。だがそういうことを一切曖昧にしたまま、部分的な小手先の対策に始終しているのが多いように思う。それではまるで水を出したまま水槽の水をかき出そうとするようなもので、あまり効果が期待できないだろうな」

「わたしたちは真剣です。真剣に環境悪化を食い止めようと考えているのですが……」

「でもわたしから見ると、きみたち地球人は現在地球を襲っている地球環境問題の本質を本当に理解しているかどうか怪しいといわざるをえない。水槽の水を掻き出したいなら新たに入いってくる水を止めなければならないのだよ」

「……」

「とにかくわたしには現在行われている環境問題解決のための地球人の行動の大半が的外れのものとしか映らない。環境悪化を食い止める行動は現代文明との戦いなんだよ。これは現に環境を悪化するものを徹底的にやっつける戦いなのだ」

デカルトはいささか苛立ち気味でエキセントリックに言う。

「でも環境問題には誰もが加害者であり、また被害者であるという構造があって……」

「本当にそうかね」

「たとえば、自動車の排ガスによる大気汚染では車を乗り回しているときには加害者のひとりですが、そうでないときは被害者のひとりです。このようなケースでは加害者といっても、一加害者の排出する排ガスは極く僅かですから、それだけでは一般に被害を及ぼすほどの大気汚染は生じない。微小の加害行為が大量に集まって、はじめて被害を及ぼすような大気汚染現象が発生するのです。こんな例はまだまだ数多くありますよ」

「現に環境中に拡がっている大気汚染という現象レベルで見ればそう思える。だがその大気汚染を生み出す原因レベルで見るとどうなるかね。排気ガスを出す自動車を乗り回しても、一個人の行為では問題となるような大気汚染が生じないかもしれないが、都会の道路には無数の自動車が集中する可能性を当然予見できる以上、極く僅かでも有害な排ガスを排出するような自動車を数多く製造して売り込む者や、自動車が当然集中するような場所を提供する者の責任を放置してよいものか」

「そこまで厳しく責任が追及できるかどうか……」

「最近では、製造物に対する責任を追及する法制度を完備する国も出てきているそうだが……、この日本にもそんな法律があるというではないかね……」

「それは明らかに危険なものを対象するもので……、被害者側には危険性を実証する必要がある。このため実際には適用するものの対象が非常に限られてしまう」

「モノを製造するものの責任を徹底的にとことんまで追及するのでなければ、いまの環境悪化を食い止めることはできない。一方で当然大勢の人が集まって生活や活動する場としての都市を造りだしている以上、たとえ一個または一個人では環境を悪化するほどのものでないとしても、集合すれば当然環境を悪化するおそれがあるようなものをつくりだしたり野放図に使用したりさせていいものか。都市という装置を使いたいなら、それに応じたものをつくるべきではないか。大量生産大量消費大量廃棄の現代文明のもとでは、このようなことをないがしろにしたまま、いくら環境悪化対策をやろうとしても意味がない」

「……」

「それにこれまで環境中に蓄積してしまっている残留性のある有害化学合成物質などによる環境汚染分を考えれば、笊で水をかき出そうとするような生半可な対策では、地球環境をもとに戻すことは到底できない。とにか

く、地球上の環境悪化を食い止めるためには、それを産み出す原因となるものを元の元まで辿っていって取り除く必要がある。さもなければ、現代文明を新しい文明へ転換する一段階としての環境悪化対策にはならないのだよ。原因段階での徹底した対策が現代文明を変えるために不可欠なのだ」

「といっても、現代文明の恩恵を享受しているものは容易にこれを手放そうとしないでしょう」

「文明の恩恵？　まあいいだろう。文明の恩恵を享受するといっても、これには全く性質が異なる二種類のものがあるね。ひとつは無理やり享受させられているもの、もうひとつは積極的に自らこれを利用しているものだ。積極的に利用しているものには悪用しているものも含まれるが、これらを排除できれば、無理やり利用させられているものも自然に消滅してしまうことだろう。さきにあげた自動車の例では、排気ガスを出すような自動車を生産しなければ、それを使用させられることもなくなるということだ。だから、まず、現代文明を積極的に利用して利益を得ようとしている輩の責任を徹底的に追及することが必要なのだ。こうすることによって新しい文明へのワンステップが踏み出せるのだ」

「でもなぜ環境悪化をストップするだけで足りないのですか。なぜ現代文明そのものをも破棄しなければならないのですか。現代文明の欠点だけを取り除くだけで十分ではありませんか。ぼくには現代文明を新しい文明に置き換えることはどうしても不可能なような気がするのですが……」

「現代文明の基本原理には構造的に地球の現実と相容れないものがある。仕掛けた張本人が言うのだから間違いない」

「かといって、簡単に変えることは……」

デカルトはあくまで言い張るジョージに一瞬ニヒルな笑みを浮かべたが、すぐ苦渋に満ちた表情に変わった。

「現代文明は暗黙のうちに無限性を前提としているが、現実の地球は有限だということだ。それゆえ、地球の有限性を無視して現代文明を享受しつづければ、垂れ流される『毒唾』（害毒あるいはマイナス面）が地球のなかで増殖増幅を重ねることになる。これは構造的な問題なのだ。だからたとえ一度、悪化した環境を改善することができたとしても、現代文明をそのままにしておけば、垂れ流される『毒唾』で有限な地球ではふたたび環境悪化が繰り返されることになる」

「じゃ、環境悪化をストップするよりも、はじめから現代文明そのものを直接変えることにしてはどうですか。そのほうが手っ取り早いように思えますが……」

「いいアイデアだと言いたいところだが、一端、現代文明をご破算にしてそれから新しい文明を構築するとなれば、多大な犠牲は避けられない。それは戦略的にマイナスだ。現代文明を直接変えようとすれば、環境悪化をストップすることよりも何倍ものすごい抵抗に遭うだろうし、その間環境悪化が放置され地球環境がますます悪化することになる。いまの状況ではできるだけ早く環境悪化をストップする必要があるのだ。さもなければ完全に手遅れになってしまう」

「……」

「取りあえず、環境悪化の加速を抑え、つぎに減速し、そしてストップすることだ。このための最良の手段として考えられるのが、環境悪化に直接間接手を貸している連中に自らの行動を改め、これ以上の環境悪化を防い

でもらうことだ」

「そんなことがどうすればできるのですか、さまざまな規制がなされているのにいっこうに改善していないじゃないですか……」

「もっと強くプッシュするんだ。そこで、彼らの目の前で、文明をミスリードして今日の環境悪化を招いた張本人であるデカルトを見せしめに処刑するのだ。これによって反省なく環境悪化に加担している輩に『衝撃と恐怖』を与え、彼らが率先して環境悪化をストップするように仕向けるんだよ」

「……」

「とにかく、環境悪化のストップと同時並行的に、現代文明から新しい文明への転換が必要であることを訴えることだ。これらのことを衝撃的に訴えるために、デカルトを処刑することにするのだ。地球人に自ら環境悪化をストップする機会を与えるためにもね」

デカルトはまるで他人事のようにさらりと言った。彼は内心でこうすることで顔の大きな委員長を欺くことができるかもしれないと密かに思っていた。

11

その日の夜、デカルトたちは『人類生き残り戦略委員会』という架空の名前を使い、ホームページを開設し、全世界に向けて『デカルト処刑』を訴えた。

同時に、同様の趣旨の電子メールが匿名でインターネットを通して世界中の政府組織、公的機関、企業、ＮＧＯおよび各国の目ぼしいオピニオンリーダーに向けて発信された。

タイトル、文面（日付および署名は省略）はつぎのようであった。

「デカルトを処刑せよ（人類生き残り戦略委員会）」

決定

今般、われわれ人類生き残り戦略委員会は、ルネ・デカルト（以下、デカルトという）を地球環境を悪化させ、人類を絶滅の危機に陥れた罪により処刑する。

事由

デカルトは地球が無限の広がりを有するという誤れる前提のもとに、近代科学を操り、自然（地球）に対する限りなき征服・支配を煽り、科学技術のエンドレスな展開を通して、現代文明（近代科学技術文明）を暴走させ、モンスター化を押し進めた。これによって地球環境の悪化を自動的に増殖増幅させ、地球環境における生存条件の劣悪化を招き、人類絶滅の危機をもたらした。

行動宣言

われわれは人類絶滅の危機を解消するために、直ちに地球環境悪化を食い止め、解消を図るための行動を開始する。

付記

環境悪化等人類の生存条件を劣悪化するものおよびこれに加担しているものは、猶予期間内にこれを改め、われわれに対する協力を具体的に示さないかぎり、デカルトと同じ運命が待っていることを銘記されたい。猶予

期間および処刑候補者リストは追って公表する。

以上、念のため、付記する。

連絡事項

われわれの考えを支持し、行動を共にする意思のある方は本ホームページに登録してください。また仲間や知り合いに関心のある方がおりましたら、このメールを転送されたい。

クリスティナ・ライネンはアドレスを確認し、デカルトに代わってメールを発信している間中、彼女はまるで自分が処刑されるような奇妙な気分に襲われた。

一体、デカルトがどんな気持ちでこんなことを言い出したのか、分からなかった。ジョージが言い出したからといって、あれは三百五十年前の死者相手のジョークのはずだったのに、当のデカルトがなぜジョークに同調するのか、その辺のところが理解できないのだ。

それにもし彼女がクリスティナ女王とルネ・デカルトの間から産まれた子の末裔であれば、三百五十年後に「親殺し」を犯すことになってしまうではないか。

クリスティナ・ライネンはじわじわと潮が満つるように襲ってくる自虐的な気分の高まりのなかで、叩き付けるように激しくキーボードを叩く。

それにしてもなんたる表現だ。こんな訳の分からない文章を読まされて、デカルトの処刑事由を理解できるものは世界に何人いるのだろうか。現代文明がどうしたというのだ。支離滅裂ではないか。

簡潔なことはいい。だが簡潔すぎて理解できないとなると問題だ。受取人にとって理解できない警告文は警告にはならない。単なる発信人の自己満足にすぎないのではないか。

彼女は腹立ち紛れに、文面作りに自分も協力したことを忘れて、自己流に解釈しながらキーボードを打ちまくる。

「地球が無限の広がりを有するという誤れる前提のもとに」とは一体なんのことよ……。

デカルトはあのときすでに地球が球体であり、当然有限な大きさしかないものであることを知っていたのに、これを知らない振りをしていたということじゃないの。彼は地球が限りある大きさのドームのような球体にすぎないことを知っていながら、当時の通説である天動説を支持するふうを装い、地上には無限の広がりがあるかのように思い込ませたということだわ。

彼は地球には無限の広がりがあるとを表立って言明することはなかったけれど、地球に無限の広がりがあるように思い込ませたことは天動説支持と同罪じゃないの。確かに、彼は当時の最先端の学説であった「コペルニクスの地動説」を擁護する論文を書いているけど、当時のヨーロッパにおける最大支配勢力であるカソリックの逆鱗に触れまいと慎重に発表を見合わせていたわ。これは時の権力者である教会と面と向かって刃向かうことを避けていただけなの。捕わって身元がばれてはことだからね。地動説擁護の論文を密かに用意しておいたのは、事実に反する天動説を支持したことで自分が後世の笑いものになることをおそれたからよ。

たとえ消極的であったとしても、これでは彼は意識的に「地球の無限性

を前提」にしたといわれても仕方がないわね……。

つぎの「近代科学を操り、自然（地球）に対する限りない征服・支配を煽り」というのは、こういうことかしら……。

デカルトは、自然（地球）を観察するとき、観察するもの（主体）と観察されるもの（客体）との二つに分けて、主体は客体に対するどんな働きかけをしようと許されるとしたのよ。主体による客体支配ね。まあ、主体の側の都合によって、自然（地球）をどうにでも勝手に客体視して対象化することができるとしたのね。こうしておいて、自然（地球）には無限の広がりがあるから、これをどのように征服しようと支配しようとかまわないとしたのよね。まあ、近代科学が自然を餌食にしたということだわ……。

そのつぎの「科学技術のエンドレスな展開を通して」というのは、これはなんでもありということよ、簡単言えば。地球上においては、地球が無限の広がりをもつという前提のもとに、文明システムは無限の展開が約束されるというわけ。いいかえれば、無限の広がりのもとでの文明システムにおける科学技術の展開は際限なく拡散する発散型構造をもつようになるのは当然なことね。このような構造のもとでは、これを形作っているさまざまなものの挙動や動きも発散し、収斂することがないの。そこで現代文明における科学技術も当然勝手気ままな方向へのエンドレスな展開となるというわけなのね……。

「現代文明を暴走させ」ということは、現代文明のエンジンである科学技術が勝手気ままに振る舞い、エンドレスな展開のもとに、際限ない征服・支配を繰り返しているということかしら……。

科学技術のエンドレスな展開とは科学技術の暴走ということと同じことと言ってもいいけれども、ここで採用された行動原理が人間の欲望を最大限に充足しようとする「プラス最大化原理」なのよね。この原理は行動に際して自分勝手に「プラス」と思い込んだものをとことん最大化しようとする欲深いものだわ。でももし地球が無限の広がりのある世界であるならば、どんなに欲深く「プラス」を追及しようと問題が生じないわね。この意味で、この行動原理は無限の世界にのみ合致するものなのよ。

ところが、地球に無限の広がりがあるという前提は、現代文明の幻想であって、地球がいくら大きいからといっても限られた大きさしかないひとつの有限な球体にすぎない。それなのに、現代文明は「プラス最大化」を行動原理として採用し、際限ない征服・支配という暴走行動を繰り返しているのね。そのうえ問題なことは「プラス最大化」ではプラス面のみに関心が向けられ、環境悪化などのマイナス面は無視するということだわ。そのため、現代文明が暴走すればするほど、人間の生存条件はますます劣悪化することになったのね……。

「（現代文明の）モンスター化を押し進めた」とはね、現代文明のエンジンである科学技術のエンドレスな展開によって科学技術が暴走しつづけ、科学技術のアウトプットも巨大化高度化大量化し、限りなく産み出されるさまざまなアウトプットが人類を食いものにするモンスターようになっているということだわ。人類はまさに現代文明のアウトプットと地球の有限の壁に挟まれ、押し潰されていく運命にあるというわけ。これは現代文明が地球の限界と正面衝突を起こしているということなのよね……。

現代文明がモンスターのように途轍もなく巨大化高度化大量化してしまったわけは、本来地球には限られた容量しかないのに、あたかも限りなく無

限の大きさがあるかのように思わせて、現代文明を野放図に振る舞わせたからそうなったのよね。このモンスターはいまや人類を何十回と殺戮できるほどの核兵器を持ち、資源を食いつぶし、「毒唾」を吐き放題といった有様。

まあ、これは現代文明のエンジンである科学技術をコントロールもせずに放置し、勝手気ままに振る舞わせ、跛行的な展開を加速させた当然の結末だわ。有限な地球のなかで巨大化高度化大量化したモンスターは、まるで小さなビンのなかで飼われていたカエルの卵がいつの間にかオタマジャクシとなり、大きなカエルとなって犇めき合っているようなものね。現代文明がわがもの顔に地球上でのさばり、人類を圧倒し、人類を押し潰しはじめているということかしら。人類はビンの壁に押しつけられてもがくカエルというわけ。それでいいの……。

クリスティナ・ライネンはキーボードを激しく叩きつづける。

「地球環境の悪化を自動的に増殖増幅させ」というのは、端的にいって、限られた容量しかない地球で、現代文明が絶え間なく「毒唾」を吐出し垂れ流しをつづけているということよね。地球がいくら大きいからといってもドームのように限りある密封された空間にすぎないわ。そのなかで吐出物の垂れ流しをつづければ、広い空間にもいつかは悪臭が満ち、汚物が溢れるにきまっているじゃないの。人類はまるで窓のない部屋に閉じ込められ、酸素を消費しつくし自分が吐き出した二酸化炭素に窒息して死んでいくような状況に置かれているようなものだわ……。

人類は地球が無限の大きさをもつという幻想を抱きつつ、いまもってモンスター化した現代文明を享受し、自分の首を絞めていることとは知らず、相変わらずところかまわず排出物や廃棄物を吐き出しつづけているんだわ。無限性を前提としている現代文明には本来的に地球（自然）の征服・支配過程で吐き出す排出物や廃棄物をセーブしたりコントロールしようとする機能が内蔵されることはないのよね。この意味で、現代文明には環境悪化等の増幅増殖装置が組み込まれているといえるわ……。現代文明においては、これを展開する場である地球が有限な存在であるという認識を欠いていたことがその野放図な展開を招き、その結果、自らの排出物や廃棄物等によって環境悪化が増幅増殖しつづけているばかりでなく、いずれ文明の恩恵というプラス面さえも地球の有限の壁に阻まれマイナスへと転化する。こうして人類自ら絶滅への道を自ら辿ろうとしているということかしら……。

クリスティナ・ライネンは「処刑事由」をひとまず終えて、大きくため息をついた。そして彼女はつぎのように総括する。

つまり、デカルトは地球（自然）が無限であるという前提に立って理論構成を行い、近代科学を武器に現代文明を暴走させることに成功したということね……。

地球が無限であればそこには無限の広がりや無限の時間があるし、資源も無尽蔵にあるはず。石油などの化石エネルギーや鉱物資源も無尽蔵ということだわ。このような世界では、いかなる行動でも、なんら制約を受けることもないし、どんな行動や挙動でもこれに要するエネルギーや原材料が不足することはない。また行動や挙動の結果として排出されたり吐き捨てられるものも無限の彼方に飛散し、拡散して消失してしまうことになるわ。

無限空間であればそこには無限の量の大気があるから、たとえ自動車がどんなに多くの有害な排ガスを排出しても、それらは直ちに無限に拡散して希釈され、ついには消失してしまう。だから、無限が支配する世界においては、いかなる行動や挙動に対してもなんらのコントロールも対策も必要としないのよね。いいかえると、無限性を前提とする以上、現代文明が暴走しようとなんら構わないわけなのよ。

デカルトは「地球人絶滅」の仕掛けとして、現代文明を思いきり暴走させ、地球の有限の壁に正面衝突させようと工作したのね……。

クリスティナ・ライネンはふたたび瓶の中で犇めく無数のカエルを思い浮かべる。彼女はいま人類が瓶の中のカエルと同じ状態にあると思う。このカエルたちをなんとか救うことができないのか。

一刻も早く、環境悪化等を食い止め、現代文明を新しい文明へと転換させなくちゃ、と思う。だがどうやればそうすることができるのか。「環境悪化等人類の生存条件を劣悪化するものおよびこれに加担しているもの」を死刑に処してしまえさえすれば、やがて自動的に新しい文明へ転換するのだろうか。いやそうではあるまい。それに至るまではまだまだなさなければならないことがたくさんあるにちがいない。

一体なにをどうしようというのか。彼は彼らに対して「猶予期間内にこれを改め、われわれに対する協力を具体的に示さないかぎり、デカルトと同じ運命が待っていることを銘記されたい」という。そして「具体的な猶予期間および処刑候補リストは追って公表する」というのだ。だがデカルトは本当に違反者を処刑しようとしているのだろうか。

クリスティナ・ライネンは両手で顎を支え、ディスプレーに目を据えたまま、あれこれ思いを巡らす。

12

電子メールに対する国際機関、政府組織、公的機関、企業、ＮＧＯおよび各国の目ぼしいオピニオンリーダーの反応は極めて冷淡で鈍かった。だが「デカルトを処刑せよ」と題するホームページへの反響はものすごかった。一部の環境関係のＮＧＯと一般の人々から、是非、行動を共にしたいという申し出が続々寄せられた。登録者数は五万人を超えても止まりそうになかった。処刑候補者リストを送り付けて寄越すものもいた。

「最終的には、地球人は半減することになるだろう」

デカルトはクリスティナ・ライネンを前にしてぽつりと言う。

「処刑で？」

「まさか。とにかく、地球人の人口が多過ぎるのだ」

「といっても……」

「現在ですら、二〇数億人は食糧不足で飢餓の状況に置かれている状態だ。そのうち、半数が餓死線上にあるではないかね」

「かといって、彼らを……」

「処刑候補者は一万から十万。だがこれにつづく混乱や争いによって、人口が減っていくことになるのだよ」

「戦争？」

「起きるかもしれない」
「とんでもないことだわ。そんなことになったらなんのために環境悪化をストップするのか……、そうならないようにしようとして環境悪化をストップするのではありませんか」
「このままでは地球人は一人残らず絶滅するのだ。半数でも残ればいいほうではないのかね……」
ジョージが近づいてきた。
「こんなメールがありました。説明が足りなかったのでしょうか……。本当にもう手遅れでしょうか、環境悪化を食い止めることは」
プリントアウトしたメールをデカルトに手渡す。

「即刻大量生産大量消費大量廃棄システムを取り除こう」というタイトルのメールはおおよそつぎのような内容であった。
――いまや尋常な手段では地球上の化学合成物質汚染を食い止めることはできない。どんな環境対策を講じようと、元を断たない限り、悪化した地球環境を改善する方法はない。水が溢れ出ないようにいくら水槽の嵩上げしようとも、蛇口を閉めずに水を出したままでは水が溢れ出るのを防ぐことはできないと同様に、現代文明の悪しき部分に直接メスを入れ、これを取り除くほか、地球環境を改善する道は残されていない。大量生産大量消費大量廃棄システムの摘出手術を即刻行なうことだ――
地之木好夫
デカルトは打ち掛けのキーボードにふたたび両手を載せ、机のそばに心細げな表情で突っ立っているほっそりとして背が高いジョージを見上げた。そのときふとメールの差出人の名前をまえに聞いたことがあるような気がした。
地之木好夫……。あの背の低い濃紺の背広を着た男ではないか。目の前に、突然半病人のような奇妙に白い血の気が感じられない顔が迫ってきた。
「前にも言ったように、そんなことをしたら、現に現代文明を享受している連中はこぞって反対にまわり、さらに多くの抵抗に遭う。環境悪化を食い止めるだけでもかなりの抵抗があるのに、直接現代文明の暴走を止めようとすればこれを利用しているものたちは猛反発するだろう。環境がさらに悪化するばかりでなく、あげくの果てに地球人たちは互いに殺し合いを始め、地球上はめちゃめちゃになってしまうだろう。なにしろ地球人は欲の塊のような人種だからね」
デカルトは荒涼とした地球の姿を思い浮かべた。すっかり汚染され、草木は枯れ、岩肌をむき出し、荒野と化した生気のない奇っ怪な環境を想像する。
折角の「衝撃と恐怖」の見せしめも効果なく、死臭を放つ腐肉を漁るハゲタカのように、死にかけている現代文明に貪欲な眼差しを向け、私欲の追及に汲々としている者たちの群れ。ひと一倍貪欲なやつらのことだ。彼らの脂たぎる贅肉にはＰＣＢやダイオキシンなど、残留性のある有機化学合成物質や重金属がたんまり蓄積されていることだろう。そのうえ放射能に汚染されているかもしれない。こんな危険な有害物質を体内にたっぷり溜め込んだ汚染された肉体が生命を失い、肉塊と化し、これらが何百万何千万何億……と集まれば、それらが新たな汚染源となって濃厚な環境汚染

を引き起こすことだろう。
　それにしても、地球人は未来のことを考えずに、いま生きている自分さえよければいいと考えているのはなぜか。一時の便宜のために、自分もその一員である生物生態系を破壊してしまうような有害な殺虫剤や残留性のある農薬をばらまいて地球環境を長期間にわたって汚染して平気でいる。また原子力を利用して発電し、取り出したエネルギーを使い果たし、高レベルの放射性廃棄物だけの残滓を子孫に残して平然としている。地球人は一体どんな神経をしているのか。
　これもすべて、現代文明のミスリードによるものか。いたずらに、自然（地球）の征服・支配を煽り、現世主義を強調し過ぎたせいだろうか。
「もし地球人を処刑する羽目になったら、それを開始するまえに、まず、デカルト本人の処刑からはじめなければならないだろうな」
　デカルトはまるで自分の処刑を楽しんでいるかのような口調で言う。
　ジョージは口を大きく開けたまま、一体この男はなにを考えているのだろうかとでもいうふうな呆れた目つきで、デカルトをじっと見ている。
「早速、処刑候補者のリストアップだ」
　デカルトの引き締まった声に、ジョージは開けたままの口をようやく閉じる。
「あの……、あのメールへの返事はどうしますか」
「放っとけ、あとで返事するから」
　デカルトは執拗に纏わりついて離れようとしない半病人のような血の気のない顔を一心に追っ払う。
「協力を申し出てきたひとたちにも参加してもらいますか」
「それがいい。だがそのまえに、ホームページに登録してきた組織や個人の身元をチェックしておこう。いろんなものが混じっている可能性があるからね」
「こんなに多数の登録者をどうやってチェックするのですか」
「各登録者にこのリストを送って、怪しいやつを相互にチェックしてもらえばいい」
「そんな程度でいいのですか。十分チェックすることにはならないと思いますが……」
「まあ、多少変なやつが混じっていても仕方がない。そのほうがかえって宣伝になるかもしれない」
　どっちみち、完璧なチェックを期そうとしても、潜り込もうとするやつはあの手この手を使って潜り込む。こんな手合を必死にあぶり出そうとしても時間のわりに効果が少ないものだ。こんなことに時間を費やすよりも、逆に、こいつらを利用することを考えたほうがいい。デカルトは自分の経験からそう割り切っていた。
「変なやつが混じるとすると、それは情報が欲しいヤツだ。まあ、処刑候補者とその予備軍だろうな、とくに関心があるのは。それに各国政府機関かな。公安などスパイ関係機関も潜り込もうとするだろう。彼らはなにしろヒマだからね」
「そんな連中に秘密が漏れてもいいのですか」
「秘密がねえ……。といっても、何十万もの組織や個人に協力を仰ごうとするなら、秘密を保つことは土台ムリだね。すべてを透明にして、誰もがすべての情報を共有できるようにしておくほうがいい。こうすれば、無駄

な経費もかからない」
　デカルトはふと黒い服の連中をイメージした。M星関係に情報が流れたら、彼らはどんな反応を示すだろうか。処刑されようとしているオレを救い出そうとするだろうか。それとも拱手傍観か。
「ところで処刑候補者の選定基準はどうしますか。各協力者に任せるわけにもいかないでしょう」
「基準を一律にきめることができればいいが、それは難しいだろう。それぞれ事情が異なるだろうからなあ。どんなふうに環境悪化に加担しているのか、詳しい選定理由をつけてもらうことにしてはどうかな。それにどの程度の加担か、加担度評価を加えてもらうか。これだけでもある程度客観的に評価できるだろう」
「そうですかね。かといってそれではかなりいい加減なものになるような気がしますが……。密告や内部告発の類もあるだろうし……。処刑される側から言えば、そんないい加減なことで処刑されてはたまらないと思うんじゃないんですか」
「実際に処刑することはないのだよ。単なる脅しだ。まあ、処刑の順番を決めて候補者リストを公開しておけば、それを見て反省しようと思うかもしれない」
「それらをすべて公開するのですね」
「それがいい」
　デカルトはジョージとクリスティナ・ライネンの手助けのもとに、協力登録者のチェックと処刑候補者リストの作成を開始する。作業は最初からすべてオープンで行なわれた。
　協力登録者のチェックはつぎのようになされた。協力登録者を特定地域別に分類し、同一地域に該当する複数の協力登録者に排除すべき登録者をリストアップしてもらい、二人以上から排除者としてリストアップされた者を協力者リストから自動的に削除する。それ以外の排除すべき登録者としてリストアップされたものは排除登録者リストに載せ、一時保留扱いとする。こうして残った協力登録者から送られた処刑候補者リストのデータが集められ、処刑者リストの第一次草案が作成されていった。
　これらの作業はホームページ上で公開して進められた。これにはすべての協力登録者が自由に参加できた。
「おかしい。誰かが妨害している」
　ジョージが大きな声を出した。
　ディスプレーから一瞬のうちに処刑候補者リストのデータが消えていったのだ。
「協力登録者の仕業かね。それとも外からの仕業かね」
　デカルトは予期していたように、鷹揚に訊ねる。
「ハッカーというより、内部に紛れ込んでいるものの仕業じゃないんですか。やはり、オープンシステムは刺激が強過ぎるんじゃないんですか」
「わたしもそう思うわ」
「あの連中にもわれわれの動きが気になるらしいな」
「あの連中？」
「電子メールの受取人たちだよ」
「……」
「実は、ワナを仕掛けてみたんだよ」

「え？　ワナですって」
「そう。わざわざ電子メールを送ったのに殆ど反応がなかった。彼らの多くは、どちらかといえば体制側で、現代文明の擁護派というか、これを大いに利用している連中だよね。だから彼らの本心をどうしても知りたかったのでね」
　デカルトには処刑予備軍ともいうべき電子メールの受取人たちが申し合わせたように無反応だったことが気になった。環境悪化は彼らにとっても無関心ではいられない問題のはずだ。それなのに、なぜ彼らが一斉に無関心を装っているのか、彼には分からなかった。なにか深いわけが隠されているのだろうか。もしそうなら、彼らに対する戦略を再検討しなければならない。一体、彼らはなにを考えているのか。これを探るために、彼は処刑者リスト作りをオープンで行なうことにしたのだった。
「で、これからどうしますか。リスト作りをつづけますか」
　ジョージはキーボードに両手を載せたまま、振り向く。
「とりあえず、データ消失のことは伏せて、確認のためという理由で、再度データの送付を依頼してみてはどうかね」
　デカルトは処刑候補者リストのデータがどこに消え、誰の手に渡ったのか、気掛りだった。どこかの政府関係者か、それとも公営企業か、それも国際企業か多国籍企業か、あるいはＮＧＯなどの民間組織か。それにしてもどうしてデータを消すような行為に出たのか。人知れずにコピーすることも可能ではないか。さらし者になっていることを一般に知られたくないということか。
　デカルトはふと、データを消すことで自分の強い意志を相手に伝えようとしているのだと感じた。敵は思ったより、手強いかもしれない。彼らがいつ反撃を加えてくるだろうか。そのときに備えて、ジョージとクリスティナ・ライネンの二人には自分が意図していることを明確に伝えておく必要があると思った。
「例のリストが敵の手に渡ったとして、彼らがどのような反撃を試みるか分からないが、最悪の場合に備えて、ここでもう一度戦略戦術を練り直しておきたいのだが……。そのまえに、これはいずれ詳しく話したいと思っていたことだが、わたしが考えている全体計画について説明しておこう。わたしにもしものことがあった場合、残された仕事はきみたちが引き継ぐことになるだろうから」
　デカルトはリストのデータが消失したとき、一瞬得体の知れない危険が迫りつつあることを予感した。自らわが身を処刑するまえに、なにかしら強制的な死が訪れるような気がしたのだ。
　デカルトは目を大きくして見つめる二人に向かって笑顔を向けた。そして若い二人にゆっくりした口調で語りかける。
「これまでも『現代文明から新しい文明への転換』と言ってきたが、新しい文明をどう考えるべきかについては一切触れなかった。これは現代文明をミスリードした自分に新しい文明について語る資格がないと思っていたからだ。だがわたしの考えを明確にすべき時期がきたようだ。新しい文明についてはきみたち自身がどのような内容を盛り込むべきかを考え、その実現を目指して行動すべきことはいうまでもないことだ。だからといって、現代文明の転換を目指す以上、戦略上目標である新しい文明をブラックボックスにしておくわけにもいかない。わたしが描く新しい文明のアウトライ

ンと移行戦略はこうだ……」

新しい文明は地球が有限であることを前提とし、有限な地球に適合するものでなければならない。地球が有限であるということは単に空間的拡がりが限られているということだけでなく、時間や容量、機能や資源など、地球のすべての側面に有限性が支配していることを意味する。

新しい文明はこのような有限性の制約をすべて満足するものでなければならないのだ。具体的内容はあくまできみたちが考えることだが、たとえば資源やエネルギーの浪費を極力避け（循環型システム）、同時に、地球環境を悪化することなく（環境悪化防御型システム）、生物生態系と共棲を図り（共存型システム）、多様な世界をつくりだす（多様性保護型システム）といったことが望まれよう。また経済成長も地球の有限性を意識し適度な程度に抑える（安定型システム）とともに、人間同士の争い解決は戦争によらず、あくまで話し合いで解決する（連帯型システム）ことが必須となるだろう。

また現代文明から新しい文明への転換は、戦略的にいって、現代文明を一挙に新しい文明へ全面的に置き換えるのではなく、徐々に段階的に行うのだ。とにかく新しい文明への置き換えをスムーズに行なうようにすることだ。

「まず環境悪化を食い止めるということも文明転換をスムーズに行なうためのものですか。でもこれが新しい文明とどう関係するのか、よく分からない。現代文明から環境悪化をもたらす部分を取り除けば新しい文明となるわけでもないでしょう」

デカルトはジョージの声が聞こえなかったように、口を閉ざしたまま、しばらく窓の外に目をやった。

「文明転換をスムーズに行なうために、まず旧文明を弱体化する必要がある。分かるね。とにかく猛り狂って暴走しつづける現代文明をなんとかしなければならない。だがこれに真っ正面から取り組むことは容易ではない。それにこんなに巨大化高度化大量化してしまっているものの暴走を一挙に止めようとしても不可能だ。気違いじみた暴走を止めるには、まず加速状態に水を差し、次第に減速させてからブレーキを踏むほかないだろう」

「ということは環境悪化を食い止めようとすることによって暴走に水を差そうということですか」

「そうだ。大方の抵抗なしに暴走に水を差すためにはまず環境悪化を食い止めることなんだ。現代文明を享受している連中も環境悪化によって現代文明そのものが蝕まれだしていることに気付きはじめているからね。彼らも環境悪化を食い止めることには反対しまい。むしろ協力するかもしれない」

「でも環境悪化を食い止めれば、一層現代文明を延命させることにならないのですか」

「現代文明の行動の基本は『自分の欲するもの（プラス）』を最大化することだ。無限性を前提とする現代文明の行動原理は『プラス最大化』なのだ。だから環境悪化のようないわば『マイナス』を頭から無視してきた。そこで『プラス』に対抗して『マイナス』を取り上げ、これを最小化するように仕向ければ現代文明の展開速度は弱まることになる」

「でも止めるまでには……」

「それには『マイナス』の範囲を広げていけばいいのだよ。暴走が止まれ

ば、現代文明から新しい文明への転換だ。そして新しい文明の展開ということになる。これが移行戦略の全体像だ。現在は、現代文明の暴走を止めるための準備段階というところだ」

現代文明の行動原理は「プラス最大化」を基本とする。これは無限性を前提とするならば当然の帰結でもあるが、この行動原理をもとに自分勝手な地球（自然）の征服・支配によって現代文明の暴走がはじまった。それゆえ現代文明の暴走を止めるにはこの行動原理を有限性を前提とする行動原理である「マイナス最小化」に変え、現代文明の「マイナス」を制御し、これを通して暴走のスピードを抑えることが可能だ。順次「マイナス」の範囲を環境悪化から地球の有限性を損ねるものまで広げて「マイナス最小化」を徹底していけば、やがて暴走は収まり、現代文明は変質を余儀なくされることになるだろう。

「あの……、処刑者のリストアップの仕事は全体計画の準備段階にすぎない……」

「そうだよ、クリスティナ。準備段階のひとつの仕事にすぎないんだ。リストデータを公開することによって、われわれがどんなことを意図しているか、ある程度具体性をもって想像できることだろうし、また、処刑候補リスト登載者には直接間接に自ら関わる環境悪化に対する自律的な反省と自主的な改善行動を期待するというわけだよ。これは現代文明の暴走を止める作業をはじめるまえに、とりあえず、現在進行中の環境悪化を食い止める一つの便法として考えたことだが……、とにかく開けっ放しになっている環境悪化の『蛇口』を閉めなければならないからね」

「リストが消失したということは何者かに妨害されて、うまくいかなかったということですか」

「まあ、いまのところはね。ところで、ジョージ、なにかいいアイデアはないかね。どうしたらいいと思う?」

デカルトはなんとかして環境悪化の加害者に自主的な改善行動を促したかった。まだまだ大丈夫と思っているうちに、地球人は自ら事態の重大さに気付いて欲しいのだ。さもなければ、例の「茹で蛙」のように、鍋の中の蛙が火に掛けられて徐々に水温が上がっていくことに気づかず、ついに飛び出す機会を失い、茹だってしまう事態が待っている。鍋の水が冷たいうちに気付いて飛び出して欲しいのだ。

「……」

ジョージは口を固く閉じたまま、じっとデカルトの方を見ている。彼に向けられた複雑に光るジョージの目の奥に、彼は偽善者ぶっている自分を嘲笑しているような光を感じた。大体、お前は地球人が「茹で蛙」となって絶滅していくことを仕組んだ張本人ではないのか。なにをいまさら……、お前にはどうでもいいことではないのか。そうだ、いまさらお前はなにをやろうというのだ、マッチポンプの偽善者め。ジョージの目の光に戦慄き、彼は自分の矛盾した行動にすっかり戸惑っていた。

デカルトは査問委員会の顔の大きい委員長に盾突いて行動したつもりがいつのまにか委員長の指示に従っている自分に気がついた。彼は委員長の手の平のうえで動き回っているにすぎない自分を感じながら、それはそれでいいさ、純粋な動機はおれの子孫を救うことだから、と自分の矛盾した行動に対して、彼は強引に自分を納得させてしまう。

「戦術的には、巨象を倒す蟻の大群をイメージしていたんだが……」

「蟻の大群？」
「ホームページに登録した数多くの協力者たちが力を合わせて、環境悪化に立ち向うことを期待していたんだ……」
　デカルトは環境悪化防止に配慮しない行動をとる企業や業界に対する当面の戦術として、不買運動や抗議行動などの大衆行動が効果的だと考えていた。ターゲットを決め、協力登録者を通して地域的規模あるいは世界的規模でこれを実行するのだ。
「もちろん、企業や業界だけが問題じゃない。環境対策に協力しない政治家や不熱心な行政担当者あるいは悪質な個人に対しても徹底的に抗議すべきだ。とにかく、どんなことをしても、まず、現在進行中の環境悪化を食い止める必要があるのだよ。それが済めば、つぎの段階の作業に入ることになる。その最初のターゲットが、現代文明にシステムとして組み込まれている諸々の暴走装置を取り除くことだよ。これらはすべて現代文明のシステムに深く組み込まれていることを忘れてはならない。現代文明システムを一挙に破壊してしまえば地球人をも道連れになりかねない。だから、システムを一挙に解体しようとせずに、メカニズムを徹底的に解剖して、これらをうまく取り除く必要がある」
「……」
「こうして現代文明のいわば毒抜きをやってから、現代文明から新しい文明へと転換することになる。まあ、現代文明の毒抜きが済めば、新しい文明への移行は比較的スムーズにいくことだろう。そして第三の段階へ進むことになる。まあ、手順はこんなふうになるが……」
「……」
　デカルトは呼吸を整えながら、しばらくの間、神妙な面持ちで聞き入っている二人を興味深げに見た。ジョージの目からいつのまにか複雑な光が消えていた。
　彼には迷いがあった。処刑リストがオープンになっている以上、朧げながらも、彼らの意図がある程度の具体性をもって相手側に伝わっていると考えられるものの、全体計画をどのような形でいつオープンすべきか、考えあぐねていた。全体計画のオープンは両刃の剣だった。ヘタにオープンしては、相手に手の内を知られ、反撃が試みられるおそれがあり、かえって自分を傷つけることになりかねないのだ。
　現代文明の暴走対策に対しても、既得権を巡って利害対立がある。既得権は冷静な判断力を奪い、ひとを盲目にするものだ。現代文明を利用して利益を上げている既得権者は、現代文明の暴走に気づかず、これを止めようとすれば、あの手この手を使って抵抗するだろう。そして、自分の関心や興味本位に自分の立場を擁護し、一層現代文明の暴走に拍車を掛け、さらに一層生産の巨大化高度化大量化を押し進め、大量生産大量消費大量廃棄を促し、利益（プラス）の極大化を図ろうとすることだろう。そんな彼らに現代文明の暴走を止める具体的な手順や方法を事前に示せば、かえって彼らの餌食になってしまうにちがいない。
　また、新しい文明の具体像を描けば、これまた既得権者に抵抗のターゲットにされてしまいかねない。かといって、これを示さなければ、現代文明を転換するにも、その方向すら判然としないことになる。これでは協力者たちは闇夜で舟を漕ぐようなものだ。目を凝らして必死で衝突を防いでも、効率が悪いうえに、どこへ行くかも分からない。これでは新しい文明の実

現さえ覚束なくなるではないか。
「いつ、どの段階で、われわれの具体的な行動計画をオープンすればいいだろうかね。早すぎても潰されてしまうだろうし、遅すぎては協力者から十分な協力が得られない恐れがあるだろう……、きみたち、一体、どう考えるかね」
デカルトは二人に目を向け、大きな溜め息をついた。

13

ドアの隙間から、顔中に深いしわを刻んだ年老いた女性事務局員の小さく萎んだ顔が覗いた。
委員長の姿を認めると、彼女はドアの隙間を潜り抜け、大股で大きな執務机に一直線に足早に近づく。
「これが只今入手したリストです」と言って、分厚い書類を差し出す。
委員長は大きな顔を傾げて書類を受け取ると、椅子が高いのか、足をぶらぶらさせてページをパラパラと捲った。一通り目を通すと、書類を机に放り投げるように置く。
椅子から下りると、委員長は机のまわりを歩き出した。考え事するときの委員長の癖だ。何回か回って、ふたたび椅子にぴょこんと乗った。それから長いブザーを押して、さっきの事務局員を呼んだ。
「臨時の委員会を開きたい。早急に、メンバーを集めて下さい」
「会議はどこで行ないますか」
「隣でやろう」
委員長は執務室とドアで続いている小会議室に入っていくと、中央に置かれている楕円形のテーブルにはメンバーが揃っていた。委員長は書類をテーブルに置くと、メンバーを一人ひとり見回す。
「只今、例のリストが届きました。これがそのリストです……」
メンバーたちの目は委員長の手元の分厚い書類に注がれた。
「……そこで急なことですが、これにいかに対応するかについて皆さんのご意見をお聞きしたくお集まり願った次第です」
委員長がこう言うと、手元の書類を左隣のメンバーに手渡し、回覧に供した。
「さきの『デカルトを処刑せよ』のメールへの対応は、ひとまず模様見ということだったのですが、処刑候補者リストが作成されたとなると、デカルトの処刑が近づいていると判断されます。このような状況を踏まえ、M星最高会議査問委員会としてどのような行動を取るべきか……」
委員長は回覧中の書類の行方を追った。まだ半分も回っていなかった。委員長は話を中断して、書類の回覧が終わるのを待った。
デカルトの身になにが起こったのか。ストックホルムから東京に戻ったところまで分かっているが、そのあと、M星の秘密工作員である諜報部員らがデカルトを見失ってしまったらしい。それにしても、一体、誰がデカルトを処刑しようとしているのか。
「委員長、まだ、デカルトの行方が掴めないのですか。確か、若い男と女の地球人が一緒だったとか」

メンバーのひとりが委員長のこころのなかを見透かすように言う。
「そうだ」
委員長は苦虫を潰したような顔をした。
「このリストは誰がどこから手に入れたのですか」
「地球のインターネットから手に入れたらしい」
「信憑性はどうですか」
「リストに載っている処刑候補者が処刑に値するかどうかについてはなんとも判断しようがない。リスト登載者がどの程度環境悪化に関与しているか判然としないところがあるとしても、彼らは地球の環境悪化に対してなんらかの責任を有するひとりであると考えていいだろうが……、まあ、そんなことはわれわれにとってどうでもいいことではないのかね」
「リストの信憑性は一応置いといて、こういうリストが存在するとして議論をさきに進めてはどうですか」
「そうしようかね。リストの信憑性をいますぐチェックしたくても、それはできないからな」
委員長は苦笑を洩らしながら、いままでリストを当然のことのように受け取り、指摘されるまでどうしてその信憑性についてなんら思いが至らなかったのかと思った。
「デカルトが処刑されると、どうなりますか。リストの候補者たちが処刑されるとどんなことになるのですか」
「多分、地球上の環境悪化が一時的に収まることになるかもしれない」
メンバーの一人が応える。
「ところで、委員長。このリストの続きは手に入っているのですか」
「手元に届いた分はこれだけだがね」
「このリストは一部の地域のもので、まだ残りがあるはずです。地球上全域をカバーしていないですよ、このリストは」
「残されている分はどのくらいありそうかね」
「この三倍はあるんじゃないですか」
「じゃ、リストアップされた数は全部で数万というオーダーになるかね」
「そんなところかと思います。ですから、数万人を対象として、どう対応するかということですか、議論すべきことは」
「そういうことになりますかな」
「なんとかデカルトを探し出して、彼に善後策を講じさせてはどうですか。一体、彼はどこへ行ったんですか。諜報部員が彼を処刑してしまったんじゃないんでしょうね」
「まさか……」
「あの連中ならやりかねない」
「ほかに意見はないですかね」
「デカルトを探し出すことが先決だ。彼がなにかを知っているにちがいない」
「なにを知っているというんだね」
「このリストの作成者は誰か、その作成意図はなにか、それにあのメールの発信者は誰か、そしてその意図……。まあ、こんなことですかな」
「デカルトを見つけ出しても、結局、環境悪化を食い止めるために、彼もリスト登載者を処刑せざるを得ないということになるんじゃないか。それに彼ひとりで数万人を処刑することは不可能だ。とすれば、対象地域を日

本あるいは東京と限定して、いまから留保条件付きで処刑を実行してはどうか。M星には残されている時間的余裕がないからだ」
「留保条件付き処刑？」
「時間差処刑のことですよ、例の遺伝子技術を用いて……」
　M星では生命の寿命をコントロールする遺伝子操作技術が完成していた。たとえば五年とか十年とか事前に残りの生存期間を設定したコントロール遺伝子を体内に注入すると、生命体を構成する細胞の生存が設定された期間内に抑えられてしまうことになるのだ。遺伝子は超小型のカプセルに注入され、経口から食物と一緒に摂ってもいいし、呼吸の際に、鼻腔の粘膜から吸収させても十分機能するものだった。また体内に入ったコントロール遺伝子に対して、その機能を阻害する物質も発見されおり、これを用いてコントロール遺伝子の指令を取り消す化学物質も開発され合成されていた。
「どうやって実行するのかね。まさか、一人ひとりに注射することもできないだろうし、かといって、空から無差別に散布するわけにもいくまい」
「リスト登載者を一人ひとり狙い撃ちする」
「誰が……、いや、誰にそんなことができるかね」
「黒い服の男たちにやらせればいい。当分、デカルト探しをお預けにしてやらせることだ」
「諜報部員のことかね」
「そうです。数万人を対象に、人知れずにカプセルの投与を行なうにはかなりの時間と経費が必要だ。いまからぼつぼつ始めてもいつ終わるか」
「じゃ、例のウイルスロボットを用いてはどうですかね。地球にはＧＰＳが張り巡らされているそうだから、これを利用してやれば、あれなら九九・九パーセントの確率だ」
「ウイルスロボット？　あんな旧式のもので大丈夫かね」
「あれのほうが確実だね。ウイルスロボットにリストデータをインプットするだけでいい」
　ウイルスロボットはM星で開発されたミクロロボットを用いて各種のウイルスを人体に注入する生物兵器だった。ミクロロボットはインプットされたデータに従って目標を追跡することのできるケシ粒ほどの極く小さなロボットで、これと人体を溶解するウイルスとを組み合わせたのがウイルスロボット兵器だ。ウイルスロボットが標的を探し出し、口腔や鼻孔はもちろん、皮膚からも体内に潜り込むことができる。体内に入るとカプセルが破裂してウイルスが血管に潜り込み、瞬時に体内に広がるのだ。
「とはいっても、リスト登載者を抹殺することが、環境悪化にとって果たしてどれだけ効果的か」
「たとえば、十年目になって、環境悪化に寄与する目ぼしい加害者がバタバタと命を落としていくことになると、社会に対してかなりのインパクトを与えることだろう」
「十年？　そんな悠長なことを考えれおれないよ。地域を決めて、明日からでも処刑していく必要があると思う」
「たとえば？」
「最初のテストケースとして、差し当たり、日本がいいだろう。現代文明の先端国だし、環境悪化の先端国でもある。それに島国で、孤立しているので、効果判定もしやすい。とにかく、日本列島に限定してリスト登載者

を順次処刑していく。デカルトも日本のどこかにいるはずだし、黒い服の連中も彼を探して日本中を駆け巡っているはずだ。これは格好のケースだ」
「なるほど。諸君、ほかにないかね」
委員長はゆっくり委員たちを見回した。彼は日本が対象として取り上げられたことに至極満足して思わず左手で顎髭を何度もしごく。彼はまえからM星宇宙船の地球における第一次寄航候補地点に日本を選んでいたのだ。即刻反応を知りたければとりあえず東京に限定することもできる。
「電子メールにあったように、現代文明に覆われた地球には危険がいっぱい潜んでいる。地球の現代文明にはコントロール装置もなければブレーキもない。その上、環境悪化が自動的に増幅増殖しつづけ生存条件の劣悪化が進んでいるというではないか。M星人が地球に移住するには、これらをなんとか早く処置して、地球環境を清浄なものにしておかなければならない。だがこんなことが簡単にできるのか。リスト登載者を片っ端から処刑していけば、環境悪化を自動増幅増殖するという現代文明の暴走を本当にストップすることができるのか」
「きみはできないと思っているのかね。それともこれに代わる案をお持ちかね」
委員長は不機嫌そうに問う。
「べつにアイデアがあるわけではないけれども、地球における現代文明の暴走はもはや行き着くところまで行かなければ、ストップすることはないような気がするのです。PCBやダイオキシンなどによる環境汚染はなかなか消えないし、フロンによるオゾン層破壊も止まりそうにない。加害者の処刑によって、環境悪化を一時的に食い止めることができても、新たな問題が出てくるのではないでしょうか。たとえば地球上に大量に保有されている核兵器が問題です。これを凍結するとしてもどう処置すればいいのでしょうか。それに地球資源が枯渇しはじめているということも問題です。十分な食糧がないし、過剰な農薬使用や過放牧で痛め付けられた土壌や生態系はなかなか元の形に戻らない。原生林の開発や有害紫外線の増加による刺激的な環境のもとで突然変異を繰り返したレトロウイルスが新たな感染症を引き起こすことも考えられます。このように多くの問題や危険があるところに、敢えて移住しなければならないのか……」
「やるだけやってみて、ダメなら、そのとき考えればいいのではないか。はじめからダメだと決めつけるのはどうかと思う」
「そんな安易な態度で議論するような問題ではないと思うが」
「まあ、地球人たちのことはどうでもいいというわけではないが、彼らは文明の暴走の果てにいずれ絶滅することを考えれば、多少犠牲を払っても、現代文明の暴走を止める試みをする意義はあるのじゃないか」
「その暴走はわれわれが仕掛けたものだ」
「だから、デカルトを派遣してストップしようとしている。絶滅へ向かって歩み出している地球人たちを引き止め、引っ返させようとしているだけではないか」
「その可能性は極めて低い。むしろ、地球を一大カタストロフィーが襲う可能性のほうが極めて高い。ほぼ確実に地球人は絶滅への道を歩んでいる。デカルトもそれに巻き込まれてしまうことだろう」
二つに分かれたメンバーたちの意見をどう収拾するか、委員長は迷った。彼は黙って、議論の行く末を見守った。だが彼の耳にはもはやメンバーた

ちの声が聞こえていなかった。彼はデカルトを思い浮かべた。地球に派遣したデカルトが死の危険に直面することははじめから分かっていた。このことを承知のうえで、M星人を救うためには、デカルトに託して、一か八かの賭けに出るほかなかったのだ。

「さて、諸君。対象地域を日本に限定して、ウイルスロボットを用い、処刑を段階的に実行することにしよう。あれを使えば証拠が残らないからな。デカルトに対して、誰か分からないが、穏やかでない動きが出ている以上、事態は急を要する。リスト登載者の処刑が実行されたと分かれば、デカルトも連絡してくるだろう。さもないと、彼自身も処刑されてしまうおそれがあるからね。デカルトのことはそのとき考えることにして、取り敢えず、日本列島に限定して処刑を開始することにしよう」

メンバーが解散すると、委員長はすぐ日本を対象区域とする処刑執行命令を発した。彼は日本列島にM星宇宙船を安全に着地させ、M星人を無事に上陸させるために、この機会を利用するほかないと考えていた。

14

処刑候補者リストが地球上でも思わぬ波紋を描いた。候補者リストは協力登録者から寄せられたデータを集めただけの草案に過ぎなかったが、いつのまにかもっともらしい処刑リストとして独り歩きをはじめていたのだ。

電子メールには冷淡な態度だった各国の政府組織、国内企業、国際企業、多国籍企業、NGOなどが急に慌ただしく動き出した。反応はさまざまだった。受け取り手の違いで対応の仕方もさまざまだった。だが担当責任者や社長がリストアップされていることが分かると、先に送信されてきた電子メールを取り出し、あらためて再検討が行われた。やり玉に上がっている政治家や行政担当者、御用学者なども同様だった。

だが結果は、完全に無視して放置するものと、環境対策等の見直しを始めるものとに、対応が大きく二つに分かれた。もっとも前者は極めて低い割合にすぎなかったが、それでも全体ではかなりの数に上った。

一方、水面下で、各国の公安当局が関係機関と協力してメールの発信元の割り出しやリスト作成者探しに動き出した。ことに処刑実行に関する情報収集に躍起となった。新手の国際テロという見方もあり、自由主義経済を信奉する先進諸国を中心に国際的な連携による諜報活動が進められた。

日本では、まず、リストを手に入れた企業が業界団体に連絡し、そこから監督官庁の担当官へ届けられた。最初は無視していた担当官も、業界の再度の陳情や担当官自身もリストアップされていることを知らされると、ようやく重い腰を上げた。

「誰だ、こんな悪質な悪戯をするのは。これは恐喝だ。絶対許せない。リスト作成者を徹底的に追及して、割り出せ」

業界よりの発言が多いゴルフ焼けしたK省のキャリアの一人が喚いた。だがリストの一人ひとりに付けられた処刑事由である行状に関するデータは正確で詳細を極めていた。そして一人として不当にリストアップされたと思わせるものがなかった。

「国の法律に基づき許可を受けて事業をやっているわれわれがなんで処刑されなければならないのですか。われわれのお陰で現代文明を謳歌できる

んじゃないんですか。われわれが仕事を止めたらどうなりますか。現代文明は糞詰まりを起こして死んでしまうのに、われわれを処刑するとは一体、なにを考えているんだ」

こんな産廃処理業者の声とともに、業界団体から担当官のもとに寄せられた廃棄物処理関係の処刑リストには、産業廃棄物処分業者のほかに、産業廃棄物最終処分場責任者の殆どがリストアップされていた。なかには組織の責任者である社長や理事長のほかに、地元住民のデータ開示要求に頑として拒否を通している現場の所長が連名で登載されているのもあった。また、地方自治体の焼却施設のうち、ダイオキシン類の排出量の多いところの責任者もやり玉にあがっていた。

行政担当官の処刑事由には業者に対する行政指導が不十分かつ不適切との指摘があり、それに該当する事例が羅列してあった。それらの事例はひとつとして間違いはなく、本人にとってすべて思い当たるものばかりであった。

「ジョージ、これはまえのデータかね」

デカルトたちの要請に応じて、再度世界各地から処刑候補者リスト用のデータが送られてきた。集計段階を秘密裏に行い、データが途中の段階で盗まれないように気を配り、いちいちチェックしながら整理していく。

「そうだと思いますが……。前と同じのものを送るように依頼しましたから」

「直接、環境悪化の現場に関わっている人のものが目に付くが、環境悪化を裏で演出している者のデータが少ない」

「環境悪化を演出するものですか……」と応えながら、ジョージはクリスティナに振り向く。

「これらは前と同じのデータだろう、クリスティナ」

「ええ、そうよ。まえに見たことのあるものばかりだわ」

「現象面に重点を置きすぎている。これが出回っているとすると問題だ。これで環境悪化が収まると考えられたら、間違いだ。早急に追加要請しなくちゃいかん」

デカルトにはさらにデータに偏りがあるのが気がかりだった。ダイオキシン汚染とか、ＰＣＢ汚染といった人目を引く現象に偏しているし、現象面からは見えない隠されている環境悪化の発生原因に関わるデータが殆どないのだ。たとえば、ごみ処理問題やダイオキシン汚染など、社会の注目を集めている事柄に関わるものには、末端の焼却炉の運営実態や焼却灰の捨て方まで目が行き届いているのに、ごみ（廃棄物）となる包装材などの量や質に関わるものに対する取り組みが安易だった。また、国内法で禁止されている殺虫剤や農薬などの原料の生産をつづけ、国外に輸出するといったケースが後を絶たないのに、この辺の追及が足りないのだ。

とにかく、環境悪化の自動増殖自動増幅を裏で支えている資本主義的市場経済の仕組みや構造に関与し、これを悪用する者への追及が甘い。これでは結果的に環境悪化を助長し、かげで甘い汁を吸っている者を見逃してしまうことになる。

「たとえリスト登載者をすべて処刑しても、これでは表面的に一時環境悪化を食い止めることができても、環境悪化を永続的に食い止めることはできない」

「一時的にでも環境悪化を食い止めることができれば、それでいいではありませんか。なぜいけないんですか」

「そうかね。たとえば、家庭から出されるゴミを一時的にストップしてみても、毎日食べる肉や魚に野菜といった食料品を包んでいるプラスチックラップやトレー類、ペットボトルや空き缶、それに食べ残し、紙くず等までが消えてなくなるわけではない。環境問題の対応には一時しのぎの『臭いものには蓋』方式は通用しないのだよ。水を出したまま、水槽の嵩上げをするようなものだから。どうしても元栓を止めるようにしなければならないのだ」

「すると、環境悪化を食い止めることは、結局、現代文明の総チェックになってしまうのか……」

「環境悪化を食い止めるには、その仕組みやメカニズムを知らなければうまくいかないということだよ」

「仕組みか」

「そうだ。環境悪化、すなわち、環境を悪化する事象とはこういうものだ……」

デカルトは立ち上がると、壁際に寄せてあるホワイトボードに「環境悪化事象の方程式」と書いた。

「事象は原因、現象そして結果へと因果的関係をもって展開するんだよ。だから、原因面や結果面を見ないで、一番目立つ現象面だけ見ていてもダメなんだね……」

環境悪化事象の方程式はこうだ。

環境悪化事象にはまず、原因となるものがある。これには原因体と発生源とがあって、これらに関わる者すなわち行為者がいる。原因体とは、環境を悪化する原因となる物質やエネルギーあるいは情報といったものだ。発生源とは原因体を環境に放出放置する工場や発電所あるいは自動車といった施設や装置などのことである。一般家庭の厨房やトイレなどもこれに含まれるのだ。

環境に原因体が放出されつづけると、即座に分解されたり無限の彼方に吹き飛ばされない限り、原因体は環境に集中集積していく。そして現象が形成されるのだ。それゆえ、環境悪化事象の現象とは環境を悪化する原因体が環境中に集中集積して環境が悪化している状態ということができるだろう。

このような環境悪化状態、すなわち現象のなかで活動もしくは棲息している人間や動植物などの生物あるいはそのなかに置かれている物体や物質は、現象（形成している原因体）に曝されることによって影響を受け、潜在的もしくは顕在的になんらかの被害を被ることになる。これが環境悪化事象の結果である。いいかえれば、結果（被害）とは悪化した環境すなわち環境悪化現象のもとで、生命体や物が集中集積した原因体に暴露したり摂取したりした結果生じる悪影響のことである。

「環境悪化事象の方程式のほかに、忘れてならないことは、これらの因果的展開過程の各段階において作用するさまざまな因子のことだ。これらが作用して、原因や現象や結果を激化したり減殺したりすることがある。というより、世界市場経済システムや大量生産大量消費大量廃棄方式などの巨大な加速器ともいうべき現代文明システムのなかで、これらを構成するさまざまな因子が環境悪化事象の各段階においてさまざまな作用を及ぼし、

自己増殖自己増幅を促しているといったほうが適切かもしれない……」
「これらは相互に結びつき、相互に関係し合って存在し、自己増殖し自己増幅しつづけているということですか」
「そうだ。だから表面的な現象のみにとらわれていると、肝心の環境悪化を自己増殖自己増幅する構造やこれを悪用する者が取り残されたままになる。本当はこっちのほうが悪質なのに、結果的に放置されることになる。環境悪化を食い止め、新しい文明へと繋ぐためには、環境悪化の原因面とそれを産みだし促進する構造を徹底的に追及して改善を図ることが不可欠だね」
デカルトは「どうする?」というように、二人をじっと見る。
「うむ……、そうですね。リストを作り直すのがいいのでしょうが、まえのリストとの関係で混乱を呼びそうだし……、こうしたらどうですか。取り敢えず、まえのリストを第一次候補リストとして、残されている分を第二次候補リストとして追加していくのはどうですか」
「普通は最初のほうに重要人物をリストアップするものだが……。まあ、そうするほかないかね。処刑の順が逆になるかもしれないがね」
「そうだ。いっそのこと、そういう連中を現代文明の暴走対策に絡めてリストアップしたらどうですか。彼らをけしかけて現代文明を変えさせることができないかしら。彼らにしても、本当は現代文明との共倒れを回避したいと思っていることでしょうから」
これはひとつのアイデアであった。これまで環境悪化の元凶のような存在だった巨大企業のなかにも環境対策や社会的責任に真剣に取り組もうとする動きが散見される。
各種の化学合成物質を生産する化学工業は有害な廃棄物を産出する一方、エネルギー多消費産業でもある。ある世界的な巨大化学会社はこれまで生産に使用してきた石油などの化石エネルギーを太陽光や風力などの自然再生エネルギーに切り替えたり、原材料においてもバイオ技術を活用して植物などの再生可能な資源に替える計画があるという。また、セメント工業でも高温焼成セメント製造技術を応用して、産業廃棄物などを石灰に代わるセメント原材料にしてしまうという。僅かではあるが巨大企業にも変貌への動きがあらわれていた。
「このような巨大企業の動きを多少でも助長させることができればいいが、そのためにも手を拱いている連中を徹底的にリストアップする必要があるかな」
デカルトはクリスティナ・ライネンに微笑んだ。
「では早速協力登録者に連絡して、環境悪化の原因面と絡め、現代文明の暴走に寄与している者たちのリスト作成に必要なデータを送ってもらいましょうか」
クリスティナ・ライネンは目を輝かした。
「そうだね。そのほうが効果的かもしれない」
この一言が、作業開始のベルとなった。デカルトはつづけて「これはいままでとは大違いの仕事だよ」と言おうとして、口を噤んでしまった。折角やる気を起こしている二人に敢えて水を差すこともあるまいと思ったからだ。
最初の戸惑いが消えると、協力登録者からデータが届きはじめた。なかにはかなり的外れなものも混じっていたが、現代文明の暴走に加担し、環

境悪化を助長している企業や団体等の組織体とその責任者や担当者に関するデータが着々と集まってきた。

だがこの作業中、デカルトはなにかに追われているような気がした。彼はなぜこんな気分に襲われるのか、自分にも全然見当がつかなかった。というより、彼は自分でも気付かずに自分を追いつめていたらしい。こんな気分が彼にクリスティナ・ライネンのアイデアをひとつの救いのように勘違いさせていたのかもしれない。

確かに、もし可能なら、大量生産大量消費大量廃棄を押し進めている巨大企業に現代文明の構造上の問題を認識させ、自らそれらを改善するように仕向けることができればそれにこしたことはない。そのほうがいたずらに抵抗されたり、また邪魔をされたりするよりもましなのだ。この意味で、現代文明の問題点を取り除くことに彼らの力を利用しようとする考えは妥当で効率的であるが、反面、これはまた極めて危険な賭でもあった。

というのは、彼らの改善の方向が必ずしもデカルトの意図する新しい文明の方向と合致するとはかぎらないからである。ことに問題は、どんなことがあっても彼らに自ら存在を否定することは期待できないのだから、彼らの目指す改善が彼らの都合で進められるおそれがあることだ。それはデカルトの考えと真っ向から対立する可能性があったし、問題をさらに複雑にするおそれがあった。

だがデカルトはこのような危険を過小評価していた。そればかりか、彼はいつもと違い、自分が過ちを犯していることに全然気付かなかった。

巨大企業を支配する資本には自己増殖本能がある。これは有限の地球で必要とされる自己コントロールと相容れないものだった。それにもかかわらず、彼は巨大企業に散見される地球環境を重視しようとする動きを知らず知らずに過大評価してしまっていたのだ。

「みんなに目指すべき新しい文明の姿をもっと明確に示す必要があるんじゃないかしら」

データを整理しているクリスティナ・ライネンが呟くように言う。

「なんだって?」

「ジョージ、だって、返ってくるデータは環境悪化に偏りすぎているんじゃないの。現代文明の暴走を問題にしているはずよ。新しい文明を明示して、方向性をはっきり示さなきゃならないわ。そうでしょう」

クリスティナはデカルトに同意を求める。

これまで取り敢えず環境悪化を食い止めることを目標にしていたことが尾を引いているのだ。ことに環境悪化の現象面を中心に作業が進められたあとだけに、現代文明の暴走対策への切り替えが不十分だった。

デカルトとしては、環境悪化の仕組みやメカニズム全体を視野に入れて、とくに環境悪化の原因面に加担し寄与する行為者をリストアップしていけば自ずから現代文明の暴走対策に繋がるものと期待していた。というより、いまの段階で現代文明の暴走対策を前面に出せば、あまりにもショックが大きすぎて逆効果を招きかねないからだ。

だが事態はデカルトの思惑通りに進んでいなかった。彼が意識的に避けていたためにかえって事態が複雑になったのだった。協力登録者は相変らず環境悪化の現象面を対策の中心に据えていたし、巨大企業も片手間の環境対策でお茶を濁した。

土台、現代文明にとっぷり浸かっている巨大企業に現代文明の暴走を実

感することはできなかった。巨大企業自体が暴走車だった。暴走する現代文明とともに、巨大企業自体が暴走していた。というより、現代文明を暴走させている元凶が巨大企業自体だった。

「まず、現在暴走し迷走している大企業をリストアップしましょうよ。これで暴走が幾分収まると思うわ」

「一体、なにを基準にして暴走中と判断するのか」

「まあ、そんなこと、大量生産大量消費大量廃棄に加担しているかどうかに決まっているんじゃないの」

「それだけでいいのですか。デカルトさん、違うでしょ」

「現代文明の暴走というのは、一言で言うと、限度を超えた巨大化高度化大量化ということだね。これにはもちろん、大量生産大量消費大量廃棄システムも当然含まれる」

「すると現代文明の暴走には兵器の巨大化高度化大量化も含まれるいうこと……ですか」

「まあ、現代文明の暴走は必然的に自らの生存条件を劣悪化させ、これを自己増幅増殖させていくものだ。とどのつまり、人類を自滅へと導くことになる。要するに、問題の根源は人類が自らの生存を省みることなく、野放図に現代文明を展開させて有限な地球（自然）に対して無限の征服・支配を挑んでいることだよ。だから、極論すると、現代文明の展開に加担し、これを押し進めている連中はみな同罪といってよい」

クリスティナを目を丸くしてデカルトを見た。

「そこまで範囲を広げてリストアップするのですか」

ジョージが怒ったような声で言う。

「さあ、どうするかね」

大きく息を吐くと、デカルトは夢想するような目を二人に向けた。

処刑候補者としてリストアップしたからといって、彼には彼らをすぐさま処刑するつもりはなかった。地球の有限性への認識に基づく新たな行動を密かに期待して、彼はデータを小出しにリークしていった。頃合いを見て、第二次、第三次と順次にリストを公開していけば、新たに処刑候補者としてリストアップされた者が自分の行動を反省し、自ら自分の行動を是正して、新しい文明への円滑な転換に自ら協力しはじめるだろうと予想していたのだ。現代文明の問題点を明示したこともその表れであった。だがリストアップされた地球人たちの反応は、彼には全く思いもよらぬものであった。

巨大企業は現代文明の問題点には目もくれず、地球の有限性を無視して互にさらに激しい競争を挑み、相手を倒し、残されている限られたパイを独占しようとシェア争奪戦に励み出した。

これに呼応するように、デカルトが提案する現代文明に代わる新しい文明に対する反論が世界のマスコミに溢れ出した。不思議なことに、これらの反論が時代や世相に対する辛口のコラムニストや現代社会を縦横に切りまくる売れっ子の文明評論家、ときには世界的に著名な科学者や大学教授によってなされたのだ。

論調の多くは、現代文明が現在暴走しているとは思えない、たとえ暴走するようなことがあっても、それは現代人によって十分コントロール可能なものだという趣旨だった。

大体、現代文明の暴走を制御やコントロールができないかのようにいう

のは全くの言い過ぎだ。そのようなことは、法的規制を加えることによっていとも容易いことだ。だがいたずらにこのような規制を実施することは現代文明の活力を殺ぐことになり、かえって社会に不利益をもたらすことになるから問題だ。それに現代文明が人類の生存条件を自動的に劣悪化し増幅増殖するというのは、一体、なにを根拠にそんな無責任なことが言えるのか。笑止千万なことだ。

このような自信満々の論調がマスコミに溢れる一方で、不思議なことに、デカルトたちに対する妨害行為が激しさを加えた。協力登録者に対して匿名でさまざまな嫌がらせがなされた。

「自分たちの生存基盤や活動の場が失われようとしていることに、なぜ、気付こうとしないのだろうか。地球人はそれほど愚かだったのか」

デカルトは気が気でなかった。「地球人絶滅」というダイナマイトに繋がれた導火線がすでに点火されているのだ。火は音を立てて、ダイナマイトを向かって刻一刻近づいていく。もうすぐ臨界を超え、後戻りはおろか、消火することも不可能になってしまうことだろう。

デカルト本人はなんとか自分が播いた種を刈り取ろうとしてもがいているのに、逆に、地球人はなんの疑問も持たず、彼が書いた旧いシナリオに躊躇なく従い、既得権の美酒に酔い痴れ、ただひたすら「絶滅」への大破局に向かって駆け足の大行進をつづけているのだ。彼は土煙を立てて「絶滅」へ邁進する地球人の大行進を想像した。それはまるで集団自殺を図るタビネズミのように、なにものかに憑かれ、「絶滅」の海に向かって突き進む地球人の大集団だった。

さらに不思議なことに、このような大行進を手助けするかのように、マスコミに煽られた政治家や官僚が国家権力を楯にデカルトたちの口封じに出た。その尻馬に乗った官憲がデカルトたちを執拗に追い回した。

彼らにはデカルトたちの行動が現代文明の危機的状況を知らせる警戒信号であることが理解できなかった。それは単なる扇動で、現代文明社会を破壊する危険な挑発行為としか映らなかった。

大半の地球人たちはまさに「茹で蛙」の心理的状況にあったのだ。現代文明を謳歌する富める国の人々はさらなる恩恵を期待し、貧しい国の人々は富める国に憧れ、いつか現代文明を謳歌する日を夢見て、富める国のおこぼれに縋った。だが現実は、力の強いものが弱いものから搾取を繰り返し、富める国はますます富み、貧しい国はますます貧しくなった。これは有限な世界における限りない征服・支配行動の当然の帰結に過ぎなかった。

「デカルトさん、そろそろ別のところに移りましょうか。あのビルの陰にも見張りがいるでしょ」

デカルトはカーテンの隙間から、窓の外を覗く。ジョージが示す方向にそれらしい人影があった。彼はふとその反対側のビルに目を向けたとき、黒い影がすーっと線を引くようにビルの間に消えた。彼らがとうとうデカルトのアジトと処刑リストの発信基地を突き止めたのだろうか。

デカルトはインターネットからの発信を広く世界に向け、自分たちが拠点としている日本をできるだけ刺激しないように気を配った。またこの国の協力登録者との電子メールによる連絡は複数の外国経由にして直接の受発信を控えていた。そのせいか、ボロアパートはこれまで取り立てて官憲からマークされることもなかった。

「どうしたのですかね。ここにきて急に厳しくなったのは……。彼らは自分に楯突く邪魔ものを虱潰しに探し出し、つまみ出そうと躍起になっているのだろうな」

むしろ日本国内への電子メールの受発信が少ないために、かえって日本からの電子メールが目に付いたのかもしれない。

「そろそろ、きみたちともお別れだね。べつべつに行動するほうが危険を分散できるし……、それに日本にいなくても仕事はできる」

「でもまだ仕事は終わっていない」

「わたしの方針はすべて話した。データも一応整った。これから相互に補充しあえば十分だよ。きみたちは協力登録者全員を動員して、合法的な行動で現代文明を新しい文明へと変えていくようにすればいい」

「そこにいくにはまだまだクリアーしなければならない問題があるのではないですか」

「それはそれぞれ自分で考えることだ。わたしは自分が播いた種を刈り取るだけだからね。そのあとはきみたちの仕事だよ。どんな文明を築くか、きみたち地球人が考えることだ。ただ、地球が有限であることを決して忘れないように。これが基本だからね」

デカルトはM星人の移住のことを忘れたわけではなかった。それよりも地球において現代文明を新しい文明へ転換させることが先決問題だった。そのあとのことはそのとき生き残ったものたちで考えればいいことなのだ。彼は幾分先走って、新しい文明への転換の必要性を発信してしまったことを後悔した。このことが現代文明という既得権にしがみつく巨大企業を刺激し、政治家や官僚を奮い立たせ、何も知らない官憲に不必要な仕事を課すことになったにちがいなかった。

「多分、きみたちはまだマークされていないだろう。いまのうちに日本から脱出したほうがいい。世界の方々に活動拠点を設置することだ。きみたちがそれをやるんだね。協力登録者のなかから適したものを選び出して、彼らと行動を起こすのだ。行動拠点は多ければ多いほどいい」

「デカルトさんにいろいろ教えて欲しいことがまだたくさんある」

「それでも一緒にいる必要はないよ。これからは世界中で同時的に行動を起こすことが重要なんだ。それには拠点が多ければ多いほうがいい。現代文明を新しい文明に転換することはそう簡単なことではないんだ」

「だからまだまだ……」

「危険が迫っている。きみたちに日本の外で、わたしに代わっていろいろ仕事をやってほしいのだよ」

「ここにいても仕事はできますよ。世界規模の活動はインターネットを使ってやればいい」

「これから大資本や国家権力からの追及が一層厳しくなる。これを掻い潜って仕事を進めなければならないとなると、日本のようなところじゃないほうがいい。もっと仕事の遣りやすいところのほうが能率的だ」

デカルトはなんとかして二人を説得して日本から追い出したかった。窓から見張りの様子を窺っているとき、黒い影に気付いて、事態が逼迫していることを悟ったのだ。そのとき彼はひとつのプランを思いついたのだった。

15

得体のしれない原因による死亡事故が続いた。元気に働いているひとを死が突然襲うのだ。最初はなんの疑念もなく通常の死亡例として処理されていたが、同じような事例が何例か続いて、病院関係者の間に奇妙な噂が広がった。人体を溶解する未知のウイルスが原因らしいというのだ。

地方の公立病院で、救急車で運ばれてきた患者が死亡し、引き取り手がないまま、暮れから年始にかけて、たまたま霊安室に放置されていた遺体が消えうせるという事件が発生した。監視カメラのビデオに残された映像が解析された。

記者会見の席上、そのときの担当医がこんな説明をしたのだ。

「死後二十四時間ほどは死体になんの変化もみられないのですが、それ以降になると、皮膚細胞を除いて体内の細胞が溶解して液体化しはじめ、七十二時間で人体が完全に液体となってしまうのです。開口部分から液体が漏れて空になると、皮膚細胞も溶解して、人体が跡形もなく喪失してしまったようです」

K省の担当課でおこなわれた情報収集の結果、世界的にこんな事例は日本にしか発生していないことが判明した。研究班が設置された。

病原体検討グループによって、病死者の解剖がなされ、死亡原因の追及と病原体の特定がおこなれた。内蔵の標本がアメリカのCDC（疾病管理予防センター）など内外の研究機関へ送られ、ウイルスなどの病原体のチェックが徹底的になされた。だが病原体らしいものは見つからなかった。

一方、疫学調査グループでの検討から意外なことは判明した。

これによると、患者には産業廃棄物処理業者が目立った。

「廃棄物処理の過程で発生するダイオキシンの影響だろうか。それともなにか未知の化学合成物質が発生しているのだろうか。それにしても、骨まで液化してしまうとは。なぜこのような患者がわが国にだけに発生するのだろうか」

担当課の若い課長補佐はデータを手にして首を傾げた。

「へんな病気が流行りだしたようですよ」

ジョージが電子メールを見ながら、デカルトの耳に囁く。ジョージもクリスティナ・ライネンもまだ東京から離れようとしなかった。いくら説得しても、二人はデカルトのもとを去ろうとしないのだ。

「なんだって、へんな病気って、どんな……。それでその病気の原因が分かっているのかね」

「まだ解明されていないようですね。死亡した後、短時間のうちに死体が解けて、液体化するそうです」

「え？　もしかしたら……」

「どうかしたのですか」

「最初のリストと亡くなったひとの名簿を照合してみてくれないか」

「亡くなったひとはリストアップされていますが……」

「そうか。するとやはり、処刑がはじまったのか……」

「処刑？」

「……かもしれない」

「誰がそんなことを……、まさか、あなたが……」

「きみたちはすぐここを離れなければならない。さもないと、日本から永久脱出できなくなる。そうなればこれまでの努力が水の泡だ。すぐ用意したまえ。これは地球人を絶滅から救うためにも必要なことだ。きみたちのわたしに対する思いや感情はどうでもいいことだ。地球人を破滅から救うことはきみたちにしかできないのだからね。いいね。どんな困難に直面しても、このことを決して忘れないように。どこへいってもわたしがこれまで教えたことを実行するのだよ」

二人はデカルトの剣幕に恐れたというより、まるで催眠術を掛けられたように彼の言いなりになって、その日、夕方の便で日本を離れた。

デカルトは「これからＵＡ八五二便に搭乗します」という空港からのジョージの短い電話を受け取ると、彼は窓辺に立って空を見上げた。

二人はまずアメリカに向かい、それから第三国へ向かう計画だった。彼は薄い雲が覆っている空を感慨深そうにしばらく眺めていた。

下に目を移すと、二人が出ていくのを待っていたように、ビルの陰に立つ見張りの警官の数が急に増えた。残っているデカルトを逮捕するつもりか、アジトを遠くから包囲するように、普段はあまり見かけない黒っぽい大きな車がアジトのあるボロアパートの周りの道路の要所要所を封鎖するように何台も駐車している。

黒い服の一団も現れ、アパートから離れたところで警官の動きを見守っているのが見えた。

当局は奇病と処刑リストの関係に気付いたのだろうか、とデカルトは思った。そしてボロアパートのアジトがなんらかの関わりをもっているらしいと疑いをかけ、強制捜査に入ろうとしているのだろうか。

奇病の流行を知らされたとき、デカルトはそれが黒い服のＭ星特殊工作隊員の仕業であることを直観した。だがなぜ日本だけで奇病が流行したのか、分からなかった。奪われたリストは全世界の分で、なにも日本だけのものではなかった。それにもかかわらず、日本だけが処刑の対象地域として選ばれ、ここだけに奇病が流行したとなると、そこにはなにか作為が隠されているはずだった。一体、彼らはなにを考えているのだろうか。

委員長はいよいよ移住計画を実行に移すことを決定したのだろうか。そのための中継基地として日本列島を選んだというのか。だがどうしてよりもよって化学合成物質の汚染列島である日本を選んだのか。まだましなところはいくらでもあるだろうに。

デカルトには彼らの考えていることが理解できなかった。それが一体なにを意味しているのか推測すらできなかった。ただなんとなく彼を取り巻く包囲網が段々と狭まり、身近に危険が迫っているような感じがしてならなかった。委員長は所在を明らかにしないデカルトに業を煮やして、彼をあぶり出そうと虱潰しのローラー作戦をはじめたのか。

原因が掴めないまま、日本では奇病による死亡者数はうなぎ登りに増えていった。だがテレビや新聞から奇病に関するニュースや記事が急に消えた。時折、一部の週刊誌に関連記事が載ることがあったが、それもなぜか小さな囲み記事だった。

政府は当初日本をターゲットとした生物兵器によるテロ活動か某国諜報機関の謀略を疑った。マスコミの報道規制を敷き、秘密裏に犯人探しを行なったが、なんの手掛かりも掴めないまま、奇病の原因さえ解明できず、

謎が深まるばかりであった。

処刑リストの存在を知っている者の間で、リスト登載者と奇病による死亡者とが全く一致していることが囁かれ出していた。だが厳重な箝口令のもとで、このことが外部に漏れることはなかった。

Ｋ省の研究班や大学の研究グループも病原菌探しに躍起となっていたが、手掛かりさえ掴めずにいた。

奇病の発生が日本列島に限られていたことからＷＨＯは当初日本特有の風土病が突然暴れだしたものと推測して様子を見ていた。だが死亡者が依然として増え続けていることに対策の必要性を感じ、ＷＨＯは新たな感染症の疑いをもって動き出した。日本政府に対して原因となる病原菌やウイルスが明らかになるまで出入国を制限するように勧告するとともに、世界の研究機関に協力を求めた。

ようやくこれまで地球上で見たことのない未知のウイルスの仕業らしいことが分かった。だが、遺体とともにウイルスまでが溶解してしまうらしくなかなか正体を掴むことが難しかった。

警察は死亡者と処刑リストの符合からリスト作成関係者を割り出そうと懸命だったが、大概のことは無駄骨に終わった。ただ一ヵ所だけ、怪しいところが網にひかかった。デカルトのアジトのひとつだった。だが証拠となるものが掴めず、内偵の状態から一歩も出ることができなかった。四六時中見張って処刑の実行を押さえようとしていたが、そんな動きはあるはずがなかった。

関係する巨大企業には行政からさまざまなルートを通して情報が流され、対応が図られた。ことに、新たに第二次、第三次リストにリストアップされた巨大企業の社長や担当役員あるいは行政の担当責任者などの身辺には二重三重に警護網が張り巡らされ、処刑の実行を阻止するための完璧な態勢が敷かれた。

廊下を微かな足音が近づいてくる。デカルトはソファに身を横たえたまま耳を澄ましてドアのほうに目を向けた。

ドアのまえで、足音が止んだ。デカルトは半身を起こし、息を止め、身構えた。ノブが静かに回された。施錠されていることに気付いたらしく、ノブから手が離れたのか、微かな金属音を残してノブが戻る。

ドアの外で、なにやら考え込んでじっと佇んでいる人の気配があった。デカルトはそおっとドアに近づいていく。彼はドアに耳を当て、向こう側の様子を伺う。そのとき、ドアと床の隙間から、白い封筒の端がのぞいた。まだ人の去る気配はなかった。

デカルトはじっと待った。しばらくして封書が静かに押し込まれてきた。すっかり押し込んだところで、ドア越しに吐く息が微かに聞こえた。

小さな足音が次第に遠のいていった。デカルトは立ったまま床のうえの白い封書に目を落とし、しばらく眺めていた。

デカルト殿

ようやく貴殿の居所が掴めたので、用件のみ至急連絡する。

貴殿作成の処刑リストに従い、貴殿を援護するために、貴殿が潜んでいると睨んだ日本列島を対象に処刑を実行した。実行方法にはＧＰＳを利用し自動的に攻撃目標を探査する自動探査ウイルスロボットを用い、攻撃目

標として処刑リストをインプットした。手違いにより、処刑リストから貴殿を除外することができなかったので、最悪の場合に備えて同封の攻撃予防ワクチンを至急服用すること。

なお、第二次、第三次リストも手に入っているので、順次、攻撃範囲を広げ、実行する。追って、迎えを派遣するので、準備をしておくこと。幸運を祈る。

以上

最高会議査問委員会委員長

「なにが手違えだ」

デカルトは吐き捨てるように呟くと、白い封筒ともども薄い連絡用箋を細かく引き裂いた。白い粉末が入っているカプセルをハサミで慎重に切り裂き、粉末を洗面所に流した。

そのとき、デカルトは微かに薔薇のような香りがしたように思った。彼はすぐ鼻から勢いよく息を吐き、何度もうがいした。空中に霧を吹き、急いで換気扇のスイッチを入れた。水道水を流したまま、手にうけた流水で顔を何度も洗い、手をごしごしと石鹸で洗った。

洗面所から離れると、デカルトはキーボードに向かった。

第４章

１６

電話のベルが鳴った。最初のベルが鳴りだした途端、デカルトは反射的に手を伸ばし、受話器を取った。待っていたジョージの声だった。

「やあ、無事だったかね」

「ええ、サンフランシスコに着きました」

「クリスティナ・ライネンも一緒だね」

「はい」

「時間がない。これから話すことを忘れずに、きみたちで必ず実行してくれたまえ。わたしの遺言だと思って……。いいね」

「遺言だなんて……、また、お会いできるんでしょ?」

「いや、わたしの処刑のときがきたらしい」

封書を受け取ってから、五時間が過ぎていた。封書にウイルスロボットが仕掛けてあれば、時間はあまり残されていないはずだ。デカルトは封書を手にして、最後の手段に訴える決心をした。これから起こる大混乱を考えればこれしか方法がないのだ。

「いいかね、ジョージ。わたしの処刑のときが迫っている。残されている時間は殆どないだろう。処刑後、七十二時間すると、わたしの身体は地球上から完全に消えてしまう。だからそのまえに、わたしがＭ星秘密工作員で地球人の絶滅のために派遣されたテロリストだったことを告白することにした。これを全世界に向かって発信するつもりだ。もう準備は済んだ。発信する前に処刑されるようなことになったら、メモリーからわたしの告白を取りだして、全世界に向けて発信するように。文明転換の混乱を解消するにはこれしかない……」

「……」

「このままではいずれリストに従い、処刑が全世界にわたって実行されるだろう。われわれが追加的に作成した第二次、第三次の処刑候補者リスト分も順次処刑が行われるはずだ。もし処刑終了前にわたしの告白が発信されれば、処刑は中断されてしまうだろう」

「……」

「だが、一方、処刑が始まれば、世界は大混乱に見舞われることだろう。旧勢力はあくまで現代文明を守ろうとする行動に出るにちがいない。これに与する御用学者や御用評論家たちは、われわれが主張している新しい文明を非難し、現代文明を擁護しつづけることであろう。その結果、現代文明がさらに永らえることになるかもしれない」

「……」

「現代文明が永らえれば、やがて現代文明は自爆して、地球人も現代文明ともども絶滅へと突入することになるだろう。地球人を絶滅から救うには即刻現代文明の息の根を止めなければならない。だから、現代文明擁護派が巻き返しを図ろうと躍起となったそのときに、わたしの告白を大々的に公開し、わたしが秘密に仕組んだ現代文明の問題点を明らかにして、これらがデカルトの工作によるものだと大々的なキャンペーンを行ないたまえ。一番効果の上がるときまで待って、わたしの告白を全世界に発信するんだ。

このことを決して忘れないように」
「……それでは手遅れになるんじゃないですか」
「なにが手遅れになるというんだね」
「処刑が始まれば、あなたの安全を確保できないじゃありませんか」
「そうだ。かといって、処刑の実行は決して簡単なものではない。きみらの手に負えるものではない。あれはプロに任せておけばいい。きみたちは『蟻の軍団』の手を借りて現代文明から新しい文明への転換を進めることだよ」
「そのプロたちはわれわれの行動を手を拱ねいてみていてくれるのですか」
「多分、そうなるだろう。いや、そうするほかないだろう、彼らには……」
「デカルトさん、処刑を免れる方法はないのですか。デカルトさん、どうしてわれわれと一緒に新しい文明の到来を迎えることができないのですか。なぜですか」
「わたしはもう十分生きた。それに地球人にこんな仕打ちをしてきたのだよ。どんなことをやっても、罪滅ぼしにはならない。それに……」
「それに……なんですか」
「わたしはM星にとっても不要なものになってしまったんだよ。彼らは早く厄介者のわたしの口を封じてしまいたいだけだ」
「デカルトさん、つぎの便で飛んでこれるじゃありませんか。なにも日本にいることはない。早くこちらに来てください」
「もう、ここから一歩も出ることはできない……んだよ」
「そんなこと、これからそちらへ戻ります」
「バカを言っちゃいけない。わたしの言ったことを忘れないように。きみたちには地球人を絶滅から救う仕事が残されているんだ。こっちに来るのは、それが済んでからだよ。幸運を祈る。それからいまいるところをいますぐ離れて新しいところへ移動するのだ。彼らはきみたちをも探しているはずだから」
　デカルトは委員長がよくやっていたように、電話を一方的に切った。それから彼は窓から漏れる薄明かりを頼りに、足を絨毯の上を這わせるように引きずりながら窓辺に近づき、カーテンの隙間から外を覗いた。
　街灯に照らし出された街角は白昼の姿とは一変してどこかよそよそしい雰囲気を醸し出している。彼は監視の見張り番が佇んでいた辺りに目を向けた。見張り番の姿は闇に消え、街灯の光が届かないビル陰に暗い不気味な暗闇が支配していた。
　そのとき、デカルトはふと地球上を覆い尽くしている現代文明の黒い闇を見たような気がした。自分が仕組んだ「地球人絶滅」の仕掛けを内蔵した現代文明が、暗い闇に身を紛らわし、細くて長い真っ赤な舌を風に煽られた炎のように振り回しながら、いままさに地球人を一人残さず舐め尽くそうとしているように思えた。
　封書を運んできた黒い服の男はどこから来て、一体どこへいったのだろうか。あのとき、ドアの外に佇む黒い服を取っ捉まえ、ひとをとことん利用することしか考えない委員長へ最後のメッセージをもたせるのだった。
　デカルトは僅かに後悔を感じながら、封書を開封するとき、微かに薔薇のような匂いを嗅いだことを思い浮かべた。あれがウイルスロボットの匂いだったろうか。それともあの白い粉末のそれだったのだろうか。
　窓から差し込む薄明かりのなかで、デカルトはなにもすることなくただ

ぼんやりとして佇んでいた。

デカルトの脳裏には過去のさまざまな映像がなんの脈絡もなくつぎからつぎに浮いては消えていく。つい最近、初めて会ったジョージ・アンダーソンやクリスティナ・ライネンさえも遠い思い出の世界に去っていた。彼は最後の気力をふりしぼり、二人の背を押すように、彼らが彼と会ったばかりに辿ることになる未来の道筋を辿っていく。

そのとき、突然彼は深い暗闇に包まれた。なぜここが連中に知れたんだ。それもジョージたちが発った直後に連中に居所を突き止められたのはなぜか。単なる偶然と思いたかった。まさかジョージやクリスティナ・ライネンが黒い服と関わりがあるとは思えなかった。いや思いたくなかった。

デカルトはしばらくぼんやりと窓の外を見ていた。

最後の最後でまたしても平たい大きな顔の委員長に竹篦返しを受けることになるのか。デカルトは口元をゆがめ、俺も焼きが回ったな、と思った。そのとき不意に背の低い風采の上がらない男が脳裏に浮かんだ。彼とコーヒーを飲んだことを思い出した。

デカルトは最後の賭けに出た。「デカルト処刑」のホームページに対して送ってきたいささか見当違いの激烈なメールを検索すると、そのアドレス宛に「告白」のコピーを送信した。

17

「地球上の処刑実行プロジェクトは予定通り順調に進んでいるというんだね。これが済んだら、M星人移住実施計画に着手するが、万事抜かりはないだろうな」

委員長は大きな顔をさらに大きくして、鼻の下に白毛のヒゲを貯えた黒い服の男をじっと見る。彼は諜報部長官の付けヒゲのような白い顎ヒゲが自分の頭の鋭さをカモフラージュするためのものであることを見抜いていた。この男はデカルトの二の舞いになることを恐れているのだ。

「はぁ、デカルトを見付けたので、引導を渡しました。これで『地球人絶滅』プロジェクトの秘密が洩れる心配がなくなりました」

「よろしい。で、全リストの処刑が終了するのはいつになるかね」

「現在、地球上全域にわたり作戦を展開中ですので、これはもうじき終了します。ですが、われわれの処刑に対して疑念をもたれないように、これがインフルエンザウイルスのような一般の感染症の流行パターンで進行するように配慮しておりますので、全世界の処刑が終了するには幾分時間が掛かります。六ヶ月後には完了することでしょう」

「そうか。それで、リスト全員の処刑が済むと、地球はどうなるのかね。地球人はいつ絶滅するのかね。それとも残っている地球人たちはわれわれM星人を無条件で受け入れてくれることになるのかね」

「処刑は地球の環境悪化の進行を食い止め、地球上の生存条件をこれ以上劣悪化させないための当面の作戦行動ですので……」

「分かった。処刑後の地球の様子はまだ分からないというのだな」

委員長は冷たい視線を黒い服に向けた。

この男は自分で思っているほど頭がよくないな。デカルトのほうがまだ切れる。それにしてもなんということだ。あれはなんのためのリストだっ

たのか。それを十分確かめないで実行命令を下すとは、おれも些か焦っていたかな。そういえばリストが第三次まであったが、地球人全員がリストアップされていたわけではなかった。人口比で見れば、極く僅かに過ぎなかったが、あれで一体どんなことをデカルトが期待していたのか。
「はぁ、早急に調査します」
「うむ、ところで、あのリストにはデカルトが載っていたが、あれはどういう意味だったのだろうな。もしかしたら、デカルト本人がリストに載せることにしたのだろうか。きみはどう分析するかね」
「はぁ、自分もそれが不思議でして、引導を渡すときに、こうすることはデカルト氏の希望に添うことなのかとも思いました。もっとも、自星人を処刑するという後ろめたさがそのような気を起こさせたのかもしれませんが……」
　委員長は嫌なやつという顔をした。男は見て見ぬふりをしてつづける。
「確かに、デカルト氏にはどこかM星に対して挑戦するようなところが見受けられました。部下の尾行を嫌がったり、それにずっと雲隠れしていたのですから弁解の余地はありません」
「そうかね。きみもそう思うかね」
　この男は油断のならないやつだ、と思いながら、委員長はもう一度、男の目をじっと覗く。
「きみはデカルトがなぜリストに載っていたと思うかね。誰が彼をリストアップしようと考えたのだろうか」
「それはよく分かりません。多分、彼自身の発案のような気がしますが……」
「なぜかね」
「地球上では三百数十年前に彼は死んだことになっているはずですから」
「地球人の普通の感覚ではすでに死亡した人間を処刑しようとするようなことは考えないというのかね」
「まあ、そんな感じがします」
「それなのにデカルトがリストアップされていた。ということは、あれを考えたものはデカルトが生きていることを知っているものに限られるということだ。それはデカルト本人か、それともM星関係者ということになる。だがあのリストはM星人以外が作成したものだ。となると、あのリストにデカルトをリストアップしたのは本人のほかにいない、ということになるのかね」
「そんなとこですか」
　男はこころのなかを読まれることを警戒しているのか、短く無愛想に応える。
「ところで、長官。きみの調査分析力からして、なぜデカルトが自ら処刑を所望したと思うかね」
「それは……、わたしには分かりかねます」
「遠慮はいらん。はっきり言いたまえ。取って食おうなんて思っていないから、心配せんでいい」
「はあ。地球上で彼が生きていることを知っているのは本人のほかにいないとすれば、でも、なぜ自らリストアップしたのか……。あれは単なるデモンストレーションだったのかもしれないですね。リストアップしたのも彼であれば、処刑を決定するのも彼で、別に問題視することはなにもあり

ませんが……」
「そうかね。まあ、あのリストはいわばデカルトの同類項を選んだようなものだろう。すると……」
「はあ、同類項と言えばそうですが……」
「違うかね。デカルトは自分をリストアップすることで、なにかをカモフラージュしたかったのではないのかね、長官」
委員長は黒目を錐のように尖らして、白い顎ヒゲの男を凝視した。
「……」
「とにかくデカルトの監視をつづけたまえ。ウイルスロボットが彼の身体を食い尽くすまで見守るのだ。それから念のために、日本では特別強いウルトラウイルスを用いるように」
「ウルトラウイルスですか。全土が汚染されてしまうかもしれませんが……、よろしいですか」
「止むを得ない。移住するM星人全員にはワクチンを接種しておけばよかろう」
委員長はデカルトが処刑リストに載っていることを知らされたときから、彼がなにを企んでいるのか気になって仕方がなかった。だがこのことに関する情報がないまま処刑してしまったというではないか。諜報部の長官ともあろう男がなんという間抜けたことをしたのか。これではデカルトが処刑まえになにを仕組んでいたか口を割らせることができなくなったではないか。彼のことだ。ただで処刑されるようなことはしないだろう。彼はなにかを企んでいるにちがいない。一体、なにを彼は企んでいるのか。彼の企みを単なる企みのまま終わらさせるには企みに絡んでいる関係者全員を根こそぎ退治するほかないではないか。日本から早くこの件に関わっている痕跡を消し去らなければ地球でM星人が地球人たちと安んじて共棲することが不可能となるのだ。
長官を追い返してから、委員長はしばし窓辺に佇み、荒涼とした風景に目を向けた。見渡すかぎりむき出しの赤い土で、緑の葉をつけた木は一本も見当たらない。デカルトが赤い土の底から手を出し、彼の足を引っ張っているような気がする。彼は大きなため息をついた。やはり無理やりデカルトを地球に再派遣したことは間違いであったかと思った。彼がこんな気持ちになったのははじめてであった。

18

奇病が全世界に広がった。犠牲者がつづいて発生した。
日本での経験が世界各国に発信され、緻密な予防対策が講じられていたにもかかわらず、ヨーロッパからはじまった奇病が瞬く間に世界の全域へと広がった。日本の風土病かと疑っていたこともあって、事態の急変にWHOは慌てた。
最初は奇病のウイルスが世界の主要都市間を結ぶジェット機の国際線網によって全世界に広まったと思われた。だが詳しく調べた結果、それより早いスピードで各都市に拡がっているケースがあることが判明した。
WHOは広く関係国の協力を求め、そのようなケースを対象にさらに詳しい調査を行なった。だがこれといったデータは見当たらず、なにも分か

らなかった。

いくつかの国の関係当局者が処刑の噂を耳にし、その真偽を確かめるためにわざわざ担当者を日本に派遣した。だが詳しいことはなにも分からなかった。ただ噂の処刑リストを密かに取り寄せ、奇病の犠牲者と照合したところ、両者が完全に一致することが確かめられた。それでもはじめは半信半疑だった。

単なる偶然が重なったのかもしれないという指摘もあった。ＷＨＯは感染源についてさらに詳細な調査をつづけた。それにもかかわらず、感染源はおろか、ウイルスさえ特定することができなかった。

相変らず犠牲者の発生がつづいた。新らたな犠牲者もリスト登載者であることが判明した。それ以来、各国治安当局も安閑としていられなくなった。

最初のリストから、第二次、第三次のリスト登載者へと奇病の輪が広がっていくに連れて、社会不安が増幅していった。といっても、先進国と開発途上国とでは違っていた。富裕国と貧困国の間にも違いがあったのである。

先進国では犠牲者が問題の多い企業の経営者や業界側に立つ指導熱心な行政官僚、それに財界や企業の代弁者である政治家が中心であったことから、一般大衆の間にはさほどの動揺が見られなかった。もっとも、一般大衆の間にもインターネットを通してすでにリストに関する情報が流れていたことも与って力があったというべきかもしれない。そのなかにあって動揺が激しかったのは企業サイドの御用学者や研究者だった。それに提灯持ちの記事を書いたジャーナリストや評論家なども新たなリストが発表されないかと戦々恐々としていた。

直接の当事者である政官業の関係者の受け取り方は深刻だった。現体制のなかにとっぷり浸かって仕事をしていた者たちはなんとかこの事態をやり過そうと必死だった。ことにリスト登載者は急にしおらしい態度でこれまでのいたらぬ行動をなんとかカバーしようとするか、逆に、開き直り、さらに威猛々しく振る舞おうとした。だが奇病は時計の針のように、正確な足取りで、リスト登載者を襲い続けた。

これに対して、貧困国の開発途上国では、はじめは得体の知れない奇病はただ恐れられ、社会全体がパニックに陥った。だが奇病が狙うのはリスト登載者に限られることが分かるにつれて、人びとは次第に落ち着きを取り戻した。ことにリスト登載者の多くが外国資本や富裕層に属し、一般大衆を食い物にしてきたいわば社会の敵であったことから、処刑はむしろ喝采をもって迎えられた。

日本でも、第一次のリストにつづいて、第二次、第三次のリストの処刑が始まった。最初の流行で処刑が終わったと思っていたところに、追加の処刑リストがあることが判明して、関係者にパニックが走った。登載者のなかには自殺するものまで現れた。

彼らの多くはすでに奇病の恐ろしさを目の辺りにしていたし、そうでないものでも奇病の怖さは耳にしていた。それだけに初めて奇病に接する他の国々とは反応が違った。自分がリスト登載者であることが分かれば、誰もが蒼い顔をして液体化して流れ消える自分の姿を想像した。そして誰もが精神的に次第におかしくなっていった。

企業や行政体では、社長や担当者が処刑されても、組織までが消滅するわけではなかった。いくつかの組織では生き残りを賭けて、事業活動の全

面的な見直しが図られた。だが結果的には、大多数は手を拱き、漫然と嵐が過ぎるのを待っているだけであった。

実際、嵐が過ぎれば、元の木阿弥だった。デカルトが期待した効果はほとんどなかった。処刑候補者リストの公開は処刑者を特定してしまい、逆にリスト除外者に安心感を与える結果となった。これはかえって逆効果となった。

だがひとつだけ幸いするものがあった。リストが第二次、第三次と分かれて発表されたため、これからも新たなリストの発表があるかも知れないと思わせたことだった。このため企業の活動に慎重さが見られるようになる一方、変わり身の早い行政官僚は業界に対して環境対策を声高らかに唱えはじめた。

一方、奇病がリスト登載者に限られていることが確かめられると、俄然処刑実行犯探しが熱を帯びた。官憲による捜査は苛烈を極めた。警察はもちろん、公安関係の情報調査員や秘密組織の諜報部員までが動員された。処刑実行者のほかに、背後関係が徹底的に探られた。ことにリスト作成者や情報提供者が洗われた。

だが処刑の手段となったと推測されている奇病の解明が思うように進んでいなかった。ウイルスらしいことは掴めたが、その特定が難しいのだ。ウイルスは短時間で変異を重ね、変貌してしまうらしい。これが特定できなければ、処刑が行われたという証拠が定かでないし、また、ワクチンを作ることは難しい。そのうえ、当該ウイルスがどのようにして特定のリスト登載者の体内に入るのか、その仕組みすらまだ解明できていなかった。どうして特定人のみに取り入れられるのか、その仕組みが判然としないのだ。まさか、プログラムされた微小ロボットが運び屋であるとは気がつかなかった。死体をくまなく調べれば、あるいはウイルスロボットの侵入箇所となった微小な傷を見つけることができたかもしれないが、七十二時間が過ぎると、死体ともどもウイルスロボットそのものが消失してしまうので、調査はいつも不十分のまま終った。

そうこうしているうちに、リスト登載者以外の犠牲者が現れた。はじめはリスト登載洩れか、リスト登載の先取りかと思われた。次第にその数が増えていった。ことに遺体処理業者やウイルス特定のために死体解剖に従事していた研究者が犠牲になることが多かった。犠牲者からの感染が疑われ、感染源と感染経路の調査が行われた。その結果、死後直後の犠牲者との濃厚接触が原因と判明した。それ以降、遺体は監視下のもとに七十二時間放置され、ウイルスともども消失するにまかせることとなった。

奇病による死亡者は、日本がずば抜けて多かった。世界全体では数万人を超えた。大小さまざまな国を含めて、世界には二百前後の国がある。単純に国の数で割れば、一国当たり、死亡者は二、三百人前後をとなるが、一国で一万人に近い死亡者を記録した国もあった。

サンフランシスコに着いたジョージ・アンダーソンから電話があった日から数日後、日本の警察はデカルトのアジトがあるボロアパートの建物に強行突入した。家宅捜査という名目であったが、裁判所の令状をもっていたか、今となっては定かでない。なにしろその日、捜査官が部屋なかで押収できたものは、ソファのうえにもぬけの殻のように脱ぎ捨てられていたデカルトの洋服だけであったからだ。

「遅かったか。やはり、この男も処刑されたのかもしれない」
そのとき、ひとりの捜査官が呟いた。だがデカルトが処刑されたふうを装い、着ていたものをもぬけの殻のようにして残して雲隠れしたかもしれないのに、不思議なことに、誰一人としてそのような疑いをもつものはいなかった。
だがそれを機に、環境関係のＮＧＯへの取り締まりが厳しさを加えていった。ダイオキシンや環境ホルモンはいうにおよばず、景観保全運動やダム建設反対運動、有機野菜が食べたい会、遺伝子組み換え食品を考える会など、広範におよんだ。
このような傾向は全世界に共通するものだった。処刑の実行犯が見つからないことに苛立った当局者が現代文明批判や反体制の匂いを嗅ぎ取っては手当たり次第闇雲に牙をむき出したのだ。
「ジョージ、そろそろデカルトさんの告白を発信したほうがよくなくて……。協力登録者たちに手が伸びてしまってからでは遅いのよ。それに、わたしたちもいつ捕まるか分からないわ」
「でも、クリスティナ、あれを発信すれば、デカルトは決して助からないよ。もう二度と会えなくなってしまう」
クリスティナは大きな目を潤ませて、じっとジョージを見つめる。何日も眠ることができないせいか、目は充血していた。
「そうね。でも……、何日もデカルトから連絡がないわ。日本で猛烈な勢いで奇病が流行しているというじゃない。リストに載っていないひとにも犠牲者がでているそうよ。いくら待っても無駄かも、きっと。もう、デカルトは……」
「もう一日待とう。それでも連絡がなければ、きみの言う通りにしよう。あとはきみに任せる。いいね」

１９

「四百年前、Ｍ星人を移住させる目的で、地球を乗っ取るために派遣された秘密工作員でした……」
「デカルトは告白する」というタイトルの電子メールが全世界に向けて発信された。これには「現代文明がいつまでもつづくと信じている人びとへ」のサブタイトルが付され、書き出しにつづいて、つぎのようなことが書き連ねてあった。
このたび、わたしは担当した「地球人絶滅」プロジェクト計画の遂行状況のチェックと、プロジェクト完遂時における地球環境の保全を図り、Ｍ星人を円滑に受け入れのための工作をする目的で再度地球に派遣されたのですが、いまごろになって、なぜ、秘密工作について告白する気になったのかと言いますと、全く私事に関わることで申し難いことですが、今回の訪問で、偶然わたしの子孫のひとりとおぼしき若者に出会ったからです。そして地球上には他にもわたしの子孫とおぼしき者たちが地球人として多数生存しているらしいことを知りました。
ところで、わたしの告白をとくに読んで欲しいと思っている人びとは、現在世界を覆い尽くしている現代文明（現代科学技術文明、以下同じ）を

至上なものと思い込んでいる人びと、千載一遇のチャンスと現代文明を濫用（悪用）し金儲けに狂奔している人びと、現代文明にどっぷり浸かって抜け出ようとしない人びとなどです。まあ、一言で言えば、現代文明体制擁護派（保守派、体制派）の人びとです。このような人びとがこのままの行動をつづければ、二十一世紀中に、現代文明はあなたがたを引き連れ、地球人ともども確実に自爆し自壊し果てることになるからです。

では、いまから四百年まえに、わたしが「地球人絶滅」プロジェクトとしてどんな工作をおこなったか（工作の内容）、その結果、地球が現在どんな状況にあるか（工作の現況）、そしてこのまま進めばどんな事態が訪れることになるのか（工作の予測）について、今回地球を目の辺りにしてどのように判断しているかをお話しいたしましょう。取り返しの付かない大それたことを仕出かしたわたしには全く口幅ったいことですが、最後に対策に関するアドバイスをさせてください。

秘密工作の内容

まず、わたしが四百年まえに「地球人絶滅」プロジェクトのために行なったことについてです。

最終ターゲットは地球人の絶滅です。これを実現するために、文明を暴走させ、限度を超えた巨大化高度化大量化を促し、その果てに、文明に酔い痴れた地球人を自滅へと導くことにしたのです。

それにはつぎのような仕掛けを考えてあります。具体的に説明いたしましょう。

端的に言って、地球人の文明の展開過程で、地球環境が自動的に悪化するように仕組んだのです。これが文明の暴走によって増殖増幅し、地球人の生存条件が加速度的に劣悪化するように仕向け、ついには地球人の生き残りが不可能となるように仕組んだというわけです。

これが基本の仕掛けですが、文明の暴走によってこのほかにも地球人の生存を脅かすようなさまざまな事柄が派生することでしょう。

たとえば、核兵器や生物化学兵器などの大量殺戮兵器が限度を超えて巨大化高度化大量化すれば、これによって、人間同士の殺し合いが大規模化し、戦争による大量殺戮から地球人の絶滅へと発展することになるかもしれません。

このほか、文明の巨大化高度化大量化による浪費の果てに地球資源が枯渇したり、地球人の人口が限度を超えて爆発的に増加して食糧不足を招き、食糧不足から大量餓死にいたるかもしれません。

また地球人に対する他の生物の反乱・攻撃も考えうることです。長い間、未開の土地で休眠状態にあったレトロウイルスが開発によって呼び覚まされ、突然変異を繰り返えし、地球人を襲いかかることもあるでしょう。

文明の暴走から派生するこのようなさまざまな事柄は相互に関係しあって相乗的に作用し、自爆への歩みを指数関数的にスピードを加速して突き進むのです。

ところで、現代文明（現代科学技術文明のこと）は近代ヨーロッパ文明を母体とするのですが、これにはつぎのようにして暴走システムを組み込んだのです。

まず、文明（当時の近代ヨーロッパ文明）が展開する場である地球が有限な球体であることを無視して、地球に無限の広がりがあるかのように錯覚させ、文明の展開が無限に可能であるとすることによって、文明からブ

レーキを取り除いたのです。有限な地球で無限性を前提にしたということです。

つぎに、主体客体の二元論のもとに、自然（地球）を客体化することによって、地球人による無制約かつ野放図な征服・支配を煽ったのです。言い換えれば、文明から制御・コントロールの機能を取り除いたということです。

無限性の前提と無制約かつ野放図な征服・支配を組み込むことによって、以前は一地方の地域文明だった近代ヨーロッパ文明の暴走がはじまり、いまや地球全体を覆い尽くす現代文明（現代科学技術文明）までに成長したわけです。でもこの現代文明は、当初からハンドルやブレーキを欠く、いわばアクセルのみの欠陥文明だったのです。

このようにして、現代文明には暴走システムが構造的に仕組まれてしまっているのです。ですから、現代文明は暴走の果てに、いずれ地球の有限の壁に正面衝突して自爆する運命にあり、その暁には地球人ともども自壊に至るほかないのです。

もうひとつ指摘しておくべきことは、無限性を前提とする構造においては、構造的に環境悪化等の「マイナス」面についての配慮を欠くことから、これに対するなんらかの対策を講じない以上、「マイナス」が自然発生的に自動増殖増幅するということです。この文明のもとで、文明的活動をすればするほど、言い換えれば、現代文明を展開し利用すればするほど地球環境が悪化し、増殖し増幅していくのです。これによって自動的に地球人の生存条件が加速度的に劣悪化することになります。

以上がわたしが「地球人絶滅」プロジェクト実行計画として、現代文明に組み込んだ仕掛けです。

このような仕掛けを十二分に機能させるためには、文明が展開し成長しつづける必要があります。このために強力なエンジンを用意し、これにエネルギーを注ぎ、活性化してやらなければなりません。そこで、わたしは当時ようやく隆盛期を迎えようとしていた近代科学を選び、明解な方法論を提示し、文明の原動力に育てたのです。

文明の中核に近代科学（科学技術）を据えることによって、現代文明は強力なエンジンを獲得し、さきの無限性の前提と地球（自然）の客体化による征服・支配という枠組みのもとで、エンドレスな展開が可能となるようなったのです。

要するに、地球が有限であるにもかかわらず、無限であることを前提として、エンドレスな科学技術の展開によって文明の暴走を企て、あげくの果てに、文明が地球人ともども自爆するように仕向けたのです。言い換えると、この地球が有限であることを隠して、地球人に際限なく勝手気ままに振る舞わせたということです。その果てに、地球人が自らの排泄物（現代文明のアウトプット）で自滅するということになるのでしょうか。丁度、人工培地のシャーレで分裂を繰り返すバクテリアが自分の排出物で突然死に絶えるように……。

秘密工作の現況

現在、現代文明がどのように暴走し、地球人の生存条件がどのような状況にあるかについて簡単に総括しておきましょう。なにもわざわざこんなことをわたしがやるまでもないことでしょうが、老婆心までに、これを仕組んだ張本人が地球の現状をどう見ているか、お知らせしておいたほうが

なにかと参考になろうかと思ったからです。

四百年前、当時の神秘主義的で専断的な錬金術が近代科学へと生まれ変わる過程で、近代科学に新しい方法論を提示し、その発展に大いに寄与したものですが、その際、暗黙のうちに、わたしはいわゆる無限性を仮定して科学と技術のエンドレスな展開を仕掛けたのです。

その直後、わたしは止むを得ず地球を離れたのですが、競争心や闘争心の強い地球人は案の定ハンドルもブレーキもないことを忘れ、ただただアクセルを踏みしめ、科学と技術の展開に邁進し出したようです。最近では、科学と技術を結合してさらに加速に加速を重ね、現代科学技術文明は超スピードで暴走中といったところでしょうか。

このような暴走の結果、わたしのプロジェクトの計画目標年である二一〇〇年の遥か前に、現代文明は自爆の臨界に達し、地球人ともども自壊の淵を彷徨いだすような状況じゃありませんか。

現代文明は大国間の終わりなき軍拡競争や企業の飽くなき利益追求に後押しされて肥大化をつづけているようです。研究活動や開発研究による科学技術のエンドレスな展開は一層の巨大化高度化大量化を押し進める一方、大量生産大量消費大量廃棄システムのもとで大量の物質（資源）と大量のエネルギーを浪費し、大量の廃棄物を産み出し、自らの生存環境である地球環境を日増しに悪化させていますね。

環境悪化にはいわゆる状態の悪化と機能の悪化とがあります。前者には有害化学合成物質や放射性物質などの有害物質による地球環境の直接的汚染で、ダイオキシンや環境ホルモンによる汚染、原発や原子力施設などからの放射性物質による放射能汚染などが該当します。後者は地球環境の有する機能を阻害するもので、たとえば地球温暖化による気候システムの変動やオゾン層破壊、森林破壊や生物生態系崩壊などですね。

地球上の環境悪化が現在どんな状況にあるかというと、もはや後戻りができないところまできているといえるでしょう。というより、地球人は自ら大気や水域や土壌に吐き出すガス・液体・固形廃棄物によって自らの生存条件を脅かしつづけ、確実に絶滅への道を辿りつつあるのです。さらに問題なことは、地球人絶滅後に残された地球環境が汚染され尽され、他の生物生態系も破壊され、地球システムも撹乱されて狂ってしまい、もとに戻すことが容易でないということです。もとの地球環境に戻るには悪化に費やした時間の十倍百倍のオーダーの時間が必要となるでしょう。

それはそれとして、いまや臨界が目の前に迫っていると思われる環境悪化以外の派生的な問題を取り上げ、それらの現況をチェックしておきましょうか。

地球人同士が相争う戦争用の大量殺戮兵器に関しては、すでにさまざまな核兵器が開発され、地球上には全地球人を何十回と殺せる量の核兵器が保有されているそうですね。このほか、核と同等に恐れられている生物化学兵器の開発競争がつづけられているというじゃありませんか。

ということは、地球人はいまや全滅の一触即発の状況にあるということでしょうか。さまざまな大量破壊兵器を大量に各国が分散保有している状況ではいつこれらが暴発してもおかしくないわけですから。

問題は核をはじめこれらの大量破壊兵器が一度使用されると地球環境に対して多大なダメージを及ぼすことです。また核兵器は究極的な武器であるにもかかわらず、さらに兵器開発がつづけられており、今後、核兵器を

超える武器が開発されることもありうることでしょう。

その一方で、地球の資源が枯渇しはじめているようですね。石油や希少金属などの資源の枯渇がいずれ現実問題となるでしょうが、森林資源、水資源、あるいは漁業資源など環境と関わるいわば環境資源の悪化や喪失が緊急の問題になっています。

人口の急激な増加も問題ですね。なぜ人口が爆発的に増加しているのでしょうか。食糧は十分あるのでしょうか。人口は七〇億を超えても、まだまだ増加することでしょう。このような増加傾向にあるというのに、食糧生産のほうは頭打ちの状態ですね。漁獲量はマイナスへ転じているはずです。干ばつや長雨など、天候異変があれば、世界の穀物生産は多大な影響を受け、たちまち食糧危機に突入することになるんじゃありませんか。さらに飢餓状態が広がり、大量の餓死者が出ることでしょう。食糧不足のうえ、飲み水さえ欠く有り様じゃないですか。

まだまだ問題がありますが、このような現況をあなたがたはどう見ているのですか。まだまだ大丈夫と思いますか。それならあなたがたは冷水の状態から鍋の中にいる蛙のように、火にかけられて水温が変化しはじめていることに気づかない「茹で蛙」の状況に置かれているといえましょう。

秘密工作の予測（絶滅シナリオ）

わたしはあなたがたの現代文明がいつ最終段階を迎えてもおかしくないと思っているのですが、このまま進めばどんな事態となるか、敢えてのべてみましょう。

四百年前、わたしは計画達成年を二一〇〇年に設定して「地球人絶滅」プロジェクトの実行計画に着手しましたが、経過はほぼ順調で、予定より早めに目標が達成しそうです。ただ問題は思った以上に地球環境の汚染状態が酷いということです。これがもし最終段階で世界中の核兵器や原発を含む核施設が暴発するようなことにでもなれば、放射能汚染という最悪の地球環境汚染が発生することになってしまいます。これでは「地球人絶滅」という目標が達成されても、他の生物生態系も大打撃を受け、地球上の生物はおろか、M星人も地球に移住できなくなることでしょう。

それはそれとして、現在の傾向がつづけば、つぎのようなシナリオで地球人は絶滅にいたるでしょう。

しばらくの間、飽くなき資本主義的市場経済活動がつづき、相変わらず、世界的な大量生産大量消費大量廃棄が展開され、資源枯渇傾向のもとで、富裕国貧困国の区別なく、地球環境が一段と悪化することでしょう。生産現場はもちろん、人口稠密な大都市から周辺部へとＰＣＢやダイオキシンなど有害化学合成物質による環境汚染が進み、大勢の人びとが不可逆的な障害に苦しむことになるでしょう。その一方で、人口の爆発的増加傾向は沈静化せず、世界的な食糧不足傾向のもとで熱帯雨林を開発して食糧増産が計られるものの、地球温暖化による気候変動によって干ばつ、熱波、高温、豪雨、洪水、長雨などの異常気象が頻発し、食糧生産はかえって減少傾向をたどることでしょう。世界中で大量の環境難民が国境を越えて彷徨うことになるでしょう。

これにオゾン層破壊による有害紫外線の影響などが加わり、さらに食糧の生産量が減退し、世界的に飢餓状態が広がるのです。ことに貧困国を中心に飢餓状態が慢性化して、餓死するものが出る一方、飢餓難民が食糧を求めて暴徒化しいたるところで小競り合いや戦争が生じることになります。

熱帯雨林の開発から得体のしれないウイルスや病原菌が出現し、地球温暖化やオゾン層破壊のもとで変異を重ね、マラリアなどの既知の病原菌とともに、世界的に蔓延していきます。

最終段階では化学合成物質複合汚染と食糧不足と新ウイルス等感染症の蔓延とのトリプルパンチと三者の相乗作用によって、大都市の崩壊がはじまり、瞬く間のうちに、地球人人口が半減し、残りの人口も急激に減じていくことになることでしょう。

最後のアドバイス

わたしは程なく処刑されることになりますが、別れに際して、一言アドバイスさせて頂きます。「地球人の絶滅」を仕組んだ張本人がいまさらなにを言うかとお叱りのことでしょうが、願わくば、わたしのアドバイスを受け入れていま辿りつつある絶滅への道から引き返して欲しいのです。いますぐなら、なんとか間に合います。是非そうしてください。ただ注意していただきたいことは、急激な方向転換でいたずらに混乱を招かないように。

わたしはあなたがたの無知に乗じて地球が有限であることを隠してさまざまな仕掛けを講じてきましたが、あなたがたはすでに地球が有限であること実感していますよね。でもいまもって地球には無限の広がりがあるように振る舞っているのはなぜですか。

いかに大きい地球でも有限であり、宇宙船のようなものである以上、地球は限られた環境容量や資源しかもっておりせん。有限な地球のなかで大量生産大量消費大量廃棄をつづければ、どうなりますか。限られた環境容量や資源が使い尽される一方で、環境悪化や資源枯渇などを招来し、地球人の生存条件がますます劣悪化していくはずです。これは当然なことです。

有限な地球で野放図に活動を限りなくつづければどうなるか、誰にも分かることです。それにもかかわらず、地球人はよくもつぎつぎとフロンティアを探して無限の可能性を追及しつづけてきたのには感心させられます。

まず、未開の地からの収奪にはじまって、人間が人間を搾取するために植民地をつくり、富裕国は貧困国から資源を掻き集め、いまではバーチャルリアリティと称してひとの頭のなかに作り出した架空の世界で商売しようとしているのですから見上げたものです。さらに神の聖域を侵して遺伝子を弄くり、細胞を融合させ、クローン人間を造って永遠の命を掌中し、地球人の王国をつくり出そうとしています。全くよくやるものです。

この結果、どこに行き着くのか、地球人は知っているのでしょうか。既得権はひとを盲目にするものでしょうか。地球人自身行き着くところまで行かないと行き先がどこか気づくことはないのでしょうか。あなたがたは有限な地球に棲息していながら、有限な地球に適した行動のあり方を探ることをなぜしようとしないのですか。全く不思議です。現代文明の暴走を仕掛けた張本人であるわたしがこんなことをいうのはおかしなことですが……。

ここでもう一度、わたしが仕掛けた現代文明の暴走のメカニズムと構造を思い返してください。

何度も言いますが、これは無限性を前提として、わたしが現代文明の母体となったヨーロッパ近代文明の揺籃期にその原動力となる近代科学に自然（地球）に対する無限の征服・支配を刷り込んでおいたからです。この仕掛けによって、現代文明は科学技術の野放図な展開を加速させ、有限な

地球で限度もわきまえないまま暴走の限りを尽くし、現代文明の際限なき巨大化高度化大量化を招いているわけです。こうして、あなたがたはひたすらプラス面のみに目を向け、地球そのものを食い潰しつづけていることにも頓着せず、これにともない生じるマイナス面である「毒唾」を垂れ流し、自らの生存条件を幾何級数的に劣悪化しつづけているのです。

仕掛けの解除とこれにともなう無用な混乱を避けるためには、このようなメカニズムと構造にしたがって順次つぎのような対策を行なうことが不可欠です。くれぐれも順序を間違えないように。

第一は、現代文明の暴走を止めることです。これは行動原理を変えることで可能です。

●行動原理を変える

暴走する現代文明を生み出した根源は、わたしが地球には無限の広がりがあるかのような幻想を吹き込んだことに起因しているのですが、これに加えて、主体客体二元論のもとに、あなたがたはアクセルを目一杯踏んで、地球（自然）に対して無限なる征服・絶対の支配を試みることになったからです。そして無限性を前提とする行動原理は欲望本位の野放図な「プラス最大化原理」だったわけです。これが資本主義市場経済のもとで、効率性の追及と結び付き、現代文明の暴走に最大限の力をかしてきたのです。

しかしこの行動原理「プラス最大化」は有限な地球とは相容れないものです。この行動原理に立って暴走行動をつづけるならば、いずれ現代文明は地球の有限の壁に激突するほかないからです。

そこで地球が有限であることをあらためて再認識し、これを前提として、これまでの行動原理に代えて現代文明の吐き出す「毒唾」といったマイナス面を最小化する「マイナス最小化原理」を新しい行動原理とすることです。プラスとマイナスのバランスを取ろうとする「最適化原理」はダメです。土台、神でないあなたがた地球人にはムリです。というより、有限性と無限性とは相容れない概念だからです。

とにかく、有限の地球という現実を十分認識して、有限の地球のもとで活動する個人および国や企業などの組織体は「プラス」追及の活動に先立って、すべての活動を対象に、事前に、それがもたらす「マイナス」の有無程度を十分チェックし、まず「マイナス」を最小化することです。「プラス」の追及は「マイナス」を最小化できる条件を満たしたうえで行なうのです。

「マイナス最小化原理」と似たようなものに先進諸国で実施されている事業者による大規模開発行為を対象にした「環境アセスメント」がありますが、「マイナス最小化原理」は「環境アセスメント」などと違い、大規模開発行為等の「プラス」追及の前提として実施するものではありません。「マイナス最小化原理」ではすべての行動に先立ち「マイナス」を事前にチェックし、これを最小化できなければその活動はどんなに多くの「プラス」をもたらすものでもこれを実行することがないのです。「マイナス最小化原理」は行動を決定する基本ということです。

「マイナス最小化原理」の具体化はつぎのように考えればいいでしょう。活動全般を対象として「マイナス最小化アセスメント」により事前にチェックし、活動にともなう「マイナス」をチェックしその最小化を図ることにするのです。「マイナス最小化アセスメント」のチェック項目は地球の有限性を前提とし、望ましい地球環境の観点をから選定し、これにパスする

ことが活動開始の条件になるということです。

まあ、環境影響をチェックする「環境アセスメント」やテクノロジーの社会影響をチェックする「テクノロジーアセスメント」などの各種のアセスメントを網羅拡大して対象を活動全般に広げたようなものですが、地球の有限性を前提とすることと「マイナス」を最小化できなければ行動をはじめることができないところが基本的に異なります。

忘れてならないことは、すべての人間活動を地球の有限性から事前にチェックし、地球上での活動はこれに適合するもののみに限定することです。なお、行動原理の転換による混乱を避けるためには、まずマイナス面の事後的規制対象を順次広げていき、次第に多方面にわたって実施するように図ることも有効でしょう。これとともに、研究開発から事業活動のあらゆる活動に対して事前のアセスメントを強化徹底していきながら、事前にチェックする対象の範囲を広げながら、徐々に行動原理を転換していくことです。また対象範囲のほかに、「マイナス（地球の有限性を阻害するものなど）」のチェック項目を順次徹底拡大していくことも併せて考えておくことです。

とにかく、現代文明の暴走を穏やかに止めるにはこの方法しかありません。そしてこの方法によれば、単に現代文明の暴走を止めるだけではなく、有限な地球という現実を前提とする新しい文明に近付くことができるのです。従来の「プラス最大化」行動原理は現世人間中心のものですが、新しい「マイナス最小化」は現世代から次世代へとつづく未来の人類に配慮するものですから。

●システムを変える（「マイナス」を発生させ、増殖増幅させるシステムを改善する）

行動原理を「マイナス最小化原理」に変えながら、つぎにすることは、政治経済社会や技術など現代文明がつくり出したすべてのシステムや人間活動の所産を見直して、有限性と合致するものに変える必要があります。このためには、有限性の観点から全システムや所産の点検を行い、環境悪化など地球人の生存を脅かすようなマイナス面を発生放置し増殖増幅させているものを排除し、それに代わる新たなシステムの構築を行なうことになります。

新たなシステムは「マイナス最小化」をより徹底する構造にしなければなりませんが、これは目指すべき新しい文明に関わることです。

新しい文明の具体像に関しては部外者のわたしが申すべきことではありませんが、ご参考までに一言いわせてください。

有限な地球がいわば大きな宇宙船のようなものであるという意味で、新しい文明は、一言で言えば、宇宙船「地球号」文明といっていいでしょう。限りある容量しかない宇宙船「地球号」のもとでは、従来の現代文明のように地球資源や地球環境が有する限られたパイをわれ先に力に任せて奪い合うのではなく、地球人は地球資源や地球環境を調和のとれた適度な活動を通して互いに有効に活用し、これらを分け合うようにしなければなりません。新しい文明がどんな具体的内容となるかはあなたがた地球人次第ですが、永続するためには地球の生い立ちを参考にして考えるべきだということです。

なお、新しいシステムの構築においては、旧システムのうち利用できるものは利用してスムーズに実行することが重要です。老婆心ながら、現代文明の改善点を若干ごく簡単に触れておきましょう。文明は総合的なもの

ですので全体的に捉える必要があるのですが、分かりやすくするために、いくつかの側面に分けて説明いたします。

第一は、現行科学の基盤となっている近代科学を見直すことです。近代科学は無限性を前提とし、その展開の場である地球（地球環境システム）の有限性を無視しているからです。現行科学は暗黙のうちに無限性を指向する近代科学を基礎として有限な地球環境システムのなかに技術的物質的所産を限りなく詰め込み、現代文明を成熟させてきたのですが、いまや地球環境問題などさまざまな矛盾を生みだしています。それゆえ、この近代科学のパラダイムを転換して、現実の有限な地球環境システムに適合するものにする必要があるのです。

これには機械論的要素還元主義・二元論的地球（自然）観と無限性・非循環的思想構造の近代科学のパラダイムを見直し、全体論的（有機体的生命論的）・一元論的地球（自然）観と有限性・循環的思想構造の新しいパラダイムのもとに再編成することです。

現行技術体系についても見直す必要があります。資源やエネルギー（石炭、石油など）を大量に浪費するような環境負荷の大きい高温高圧タイプは旧タイプに属する技術です。これらは環境負荷の面からの再チェックを行い、問題の多い旧タイプの技術は取り除き、環境負荷の少ない新技術と取り替えることです。

第二は、現行政治システムを変えることです。従来の軍事力や既得権に安住する国家権力構造は見直し、宇宙船「地球号」文明時代にはそれに適した政治システムが必要でしょう。

第三は、世界経済システムを変えることです。いわば先進国を中心とする大量生産大量消費大量廃棄タイプの経済システムは環境負荷の点から行き詰まりつつあります。早急に、適度生産適度消費廃棄物ゼロタイプの経済システムへ転換する必要があります。

新しい文明のもとでの経済システムにおいては、情報の移動を世界規模で行い、モノの移動を最小限度にとどめることを考えるべきでしょう。こうすることによって、モノの移動にともなうもろもろの問題、たとえば、エネルギーや資源のロス、大気汚染、海洋汚染などの環境汚染、事故の危険、長距離輸送による時間のロスや物品の損傷等のほかに、長期貯蔵に伴う穀類や食品の残留農薬問題や食品添加物問題なども解消されることになるのです。

第四は、社会システムも変えることです。なによりも地球情報に関して平等社会を実現することが必要です。このために、地球環境システムに関する情報が各人に平等かつ同時的に伝達される世界共通のネットワークシステムをつくることです。

第五は都市です。人類の滅亡は大都市から始まることでしょう。地球上の都市は現在、全く行き詰まっています。都市とは名ばかりで、人間の単なる集積場にすぎないものです。完全に構造疲労を呈して、このままでは都市は内部に無数の問題を抱え込みながらさらに無秩序に都市域を拡大するほかないでしょう。まるでガン細胞のように増殖を繰り返し、やがて都市は廃墟と化していくでしょう。

これではそのまま放置しておいてもひとりでに解体の道をたどり、やがて廃墟と化する運命にありますが、そのまえに都市を解体してこれに替わるものを造りださなければなりません。

以上は現代文明の見直すべき問題点と新しい文明システムのスケルトンの一部にすぎません。

要するに、まず、行動原理を変え、それからシステムを変えることです。この順序を決して間違えないように。システムを変えるまえに、現代文明の暴走を止めなければならないのですから。そのうえで暴走を加速させているシステムを排除することです。

とにかく、わたしの仕掛けによって絶滅したくなかったら、地球が有限であることを肝に銘じ、地球を小さな宇宙船だと思って、新しいシステムを構築するように。そして各人各組織体がそれに適した適度な行動を取ることです。わたしとしてはもっと具体的に提案したいのですが、この程度にしておきましょう。地球人の絶滅を仕掛けた張本人の提案では説得力を欠くでしょうし、どんな新しい文明を築くかはあなたがたが考えることですから。

このアドバイスをどう受け取ろうとあなたがたの勝手です。あなたがたがどのような未来を選択しようと、わたしにはとやかく言う資格はありません。ただ最後に重ねて申し上げておきたいことは、このままではわたしの仕掛けた時限爆弾によって、現代文明ともどもあなたがた地球人が確実に絶滅を迎えるということです。振り返るならいまです。まだ間に合うと思います。

幸運を祈ります。さようなら。

ルネ・デカルト

20

「突然お集まり頂いたのは、今朝、諜報部よりこんな情報が届いたからです」

委員長は左手で数部のコピーを力なくかざした。大きな顔はいつもと違い、まるで血の気が失せたように青白く、艶がなかった。

「デカルトがM星の秘密工作員だったことを告白したのだ……」と言いながら、委員長は左右隣の委員にコピーの束を手渡す。コピーは一部づつ取られ、委員に行き渡っていく。

委員長は委員たちがコピーから目を上げるのを待った。

「デカルトはまだ生きているのですか」

「さあ、諜報部では処刑済みと言っていたが……」

「確認されていないのですか」

「諜報部長官はいないのか」

「……」

委員長は発言した委員たちに弱々しい視線を向けたまま、応えようとしない。委員たちは初めて見る委員長の弱々しい様子に驚き、互いに顔を見合わせた。

「こうなった以上、地球への移住は当分お預けになった。とういうより、ご破算になったというべきかもしれない」

委員長はすっかり自信を失なっていた。地球人への敵対行為が明らかにされた以上、M星人が地球人と共存することは不可能になった。デカルトの告白によって、あの「地球人の絶滅」計画も期待できなくなっただろう。

かといって、いまから地球人を絶滅しようとしても時間的に無理なことだ。デカルトが順調に行っていると言ったのに、なぜ彼を信用して待てなかったのか。

「地球人はデカルトの告白を真に受けるでしょうか。現代文明に溺れ、すっかり傲慢になった地球人にはそんな謙虚さが残されているとは思えないのですが……」

いつも沈黙を守ってじっと座っていることが多い末席の委員が小さい顔を上げて甲高い声で言った。

「ということはどういうことかね」

委員長は委員がふたたび口を開くのを促すように目を向けた。だがその委員はなかなか口を開こうとしない。

「デカルトの仕掛けが不発に終わったときには、いっそのこと、地球人全員を処刑すればいいじゃないですか」

別の委員が口を挿んだ。

「それは無茶だ。何十億人もの地球人をどうやって処刑するんだ」

「例のウイルスロボットをばら播けばいい」

「それは不可能だ。そんな数を用意することは到底できない。たとえできたとしても、何年かかるか分からない」

「ウイルスだけで十分だ」

「誰がどうやってばら播くのか」

「何年かかっても、例のウイルスロボットが一番だ」

「そうはいかないのだ。時間がかかれば、ワクチン開発が進む」

委員長は黙って委員たちの議論に耳を傾けていた。だがなにも聞いていなかった。彼はただ聞いているふうを装っていたに過ぎなかった。彼はデカルトを再派遣したことを悔いた。デカルトを再派遣しようとどうして考えたのか。だがなにも思い出せなかった。あのとき、喚問に応じようとしなかったデカルトになにがしかのペナルティを課す気が起きて、地球に送り出してしまったのかもしれない。デカルトを地球に再派遣すればなにが起こるか予想できないはずはなかった。それにもかかわらず、四百歳にもなったデカルトを地球にふたたび派遣してしまった。これはミスだった。そのうえ、一方的に、リスト登載者を処刑したことも誤りであった。デカルトの処刑を放置したのも間違いだった。とにかく再派遣がミスと気付いたときに、すぐデカルトを召還すべきであった。

「デカルトの告白に対して、地球人がどんな選択をするか、このまま推移を見守るほかないだろう。今更、われわれがいくらじたばたしてもどうにもならない。地球人がデカルトの告白を無視してくれればチャンスが残る。そのときはデカルトの仕掛けが生きて、現代文明が自爆するだろう。そのときには地球人が絶滅する。地球環境は多少汚染しているかもしれないが、M星人移住の可能性が出てくる。だが地球人が彼のアドバイスを受け入れた場合は、それまでだ。そのときは移住先探しが振りだしに戻ることになる」

委員長はゆっくり自分に言い聞かせるように言う。

「そうするほかないと思うが、結果的に見て、デカルトを再派遣したことは無意味だったということだ。彼の言分を聞かずに半ば強制的に再派遣した結果がこれではなんのために彼を喚問したのか、分からない」

「結果的にはその通りだ」

「それではM星人の生き残り計画はどうなるのか。移住先が地球のほかにもあるならいいが、もし地球しか残されていないのなら、ここはひとつ自衛軍を派遣して地球奪取計画を実行すべきではないのか。このまま推移を見守るほかないなどと消極的なことを言っていたのでは、われわれM星人の生き残りは図れないと思う」

委員長は委員たちの発言に無遠慮な響きが増してくるのを感じながら、デカルトの面影を思い浮かべた。

「諸君、ただいまの意見に対して、どう思いますか。というより、M星が地球奪取の行動を起こすべきか、どうですか」

「そんなことはするまでもないでしょう。地球人はいずれ絶滅していきますよ。彼らはそんなに利口じゃありませんからね」

「そうですよ。デカルトの一時の感情に左右されることもないですよ。彼の告白も処刑をまえに気が動転した結果にすぎないのですから」

委員長はふとデカルトが生きているような気がした。M星が地球奪取の兵を動かせば、彼は地球軍の先頭に立って刃向かってくるだろうか。それとも、両者の和平を取り持つだろうか。

だがデカルトが生きているということはありうるのか。委員長はこころを落ち着かせてもう一度諜報部長官とのやり取りを思い起こす。

「デカルトの処刑を見届けたというんだね」

委員長はデカルトの告白全文のコピーを持ってあたふたと駆け込んできた諜報部長官に底意地の悪い目を向ける。

「それはもう……、そうするように命じておりますから……、多分、生前デカルトに依頼された者がこの告白を流したものと思いますが……」

「誰かね、それは……」

「以前、一緒にいた地球人男女の……いずれかでしょう」

「デカルトの……、だがあの二人は処刑リストに入っていなかったのかね」

「デカルトと一緒に処刑することになっていたのですが、いつのまにかどこかに消えてしまいましたので……、でもいずれ処刑される……」

委員長はデカルトが末裔らしい若い男女の二人連れと一緒にいると報告を受けたとき、しばらく様子を見るように指示したことを思い出した。自分の末裔に遭遇したことで、彼が真剣に地球環境悪化の改善に取り組むことを期待したのだった。

「とにかく、告白の発信者はデカルトでないということなんだね」

「はい、多分そうだと……」

「違うのかね」

「実は、あの告白が二ヵ所から発信されていたのです。それで……もしかすると……」

やはり、ここはしばらく様子を見るほかないのだ。慌てて行動に出てさらにデカルトを増長させることもあるまい。たとえ彼が生きていようといずれは年貢を納めてもらうことになろう。

そのとき、甲高い声がした。委員長は顔を上げ、声の方に目をやった。

「デカルトを再派遣した結果、彼が決して話そうとしなかったことがこの告白によって明らかになったわけです。これで現代文明崩壊後の新しい文明建設にM星人が地球人有志ともども参加できる道が拓けたと考えること

ができませんか」
「……」
「現代文明のもとではM星人が安住することは不可能なことです。移住するとすればどうしても新しい文明をつくり出すことになるはずです。デカルトが現代文明から新しい文明への転換方法を明示したのは、なにも地球人のみに対してではなく、われわれM星人に対してもなされたものと思います」
突然背中に疼痛が走った。
委員長は顔をしかめ、痛みを我慢した。
「委員長、どいかしましたか」
「いや……、諸君、これで終わりにしよう」
委員たちは怪訝な顔をして、会議室を出ていった。委員長は席に腰を下ろしたまま、執拗に襲う痛みにじっと耐えていた。彼は痛みと必死で闘いながら、デカルトがなぜ「行動原理」のことを最後まで明らかにしなかったのかと思った。

21

デカルトの告白は一瞬のうちに世界に広がった。表面的な反応はさまざまだった。現代文明のもとで豊かになった国とそうでない国とでも違いが際立ったが、共通点もあった。それは現代文明を擁護する旧守派がデカルトの告白を革新派の謀略だと言い張り、革新派はデカルトの告白に従い、問題の多い現代文明を新しい文明に変えるべきだと主張したことであった。
現代文明を盲目的に賛美するものはデカルトの告白をどこ吹く風と受け流し、現代文明が自爆するなんて頭から信じなかった。企業は相変わらず新しいフロンティアを探して巨大化を目指した。新しいフロンティアを探しあぐねると、無理やり新しいフロンティアをつくり出した。だが多くの人々には、一時の喧騒が過ぎると、日に日に悪化していく地球環境を目の辺りにして、意識の深いところで思わぬ波紋が広がっていた。
一人ひとりの意識にデカルトの告白が重くのし掛かり、彼らの精神を蝕みだした。現代文明を享受して地球を痛めつけてきたことに対する罪の意識だった。自分を責める意識が自身の破滅を願い、現代文明の崩壊を受け入れた。そして刻一刻と迫る自滅の時を楽しむかのように、最後の饗宴に耽った。
「逆効果だったか。こんなことになるとは、デカルトさんは思ってもみなかったにちがいない。これではむしろ地球人の絶滅を早めることになってしまう」
「結局、デカルトはM星人の移住を助けたことになってしまう。全く、彼の意図反してね。どうしたらいいのかしら」
別の展開を予想していたジョージとクリスティナ・ライネンは互いに顔を見合わせたまま、考えあぐねていた。デカルトが言う通り、あの告白が人々に強烈なインパクトを与え、現代文明を打破し、新しい文明への奔流を生み出すものと期待していたのだ。
「現代文明に溺れて、いつのまにか、われわれ人類はすっかり生命力を喪失してしまったらしい。もはやわれわれ人類には新しい文明をつくり出す

力が残されていないのかもしれない。そうであれば、いまなお生き残りを欲するM星人たちに地球を譲り渡したほうがいいんじゃないのか」

「かもしれないわね。でもそれでは折角のデカルトの好意を無にすることになってしまうわ。わたしたちは少なくとも協力登録者と協力して、現代文明の問題点を取り除き、新しい文明の構築を目指すべきだと思うわ」

現代文明は相変わらず暴走をつづけ、猛スピードで巨大化高度化大量化の道を邁進している。環境悪化など地球人の生存条件は日に日に劣悪化を辿り、自滅の時が迫っていた。だがそのことに誰にも気付かなかったし、誰の目にも見えなかった。それだけではない。現代文明が自滅への時を刻みはじめたことを誰も認識できなかった。環境悪化といった魔手は足音を消し、背後から息を詰めて迫っていた。デカルトの警告にもかかわらず、自爆の最終段階に向かって刻々と時を刻んでいることに気付くものは殆どいなかった。

不思議なことに、デカルトの告白が流れた日から奇病による死亡者が目に見えて減ってきた。ウルトラウイルスの感染者の数もめっきり減った。WHOや各国関係機関は努力の成果が現れたものと評価した。

地球温暖化で世界的に気温が高まり、異常気象が頻発するようになっていたが、この年、北米の中西部、ウクライナ地方の穀倉地帯をかってない強烈な干ばつが連続して襲った。小麦の種蒔き時期から全然雨が降らなかった。この強烈な干ばつが、その年の秋から暮れにかけ、オーストラリア、アルゼンチンなどの農作地帯を襲った。オゾン層破壊が改善せず、有害紫外線を含んだ強い陽射しが乾き切った大地を射、わずかに生き残った農作物を徹底的に痛めつけた。

世界の穀物生産量が年々減少傾向にあったところに、追い打ちをかけるように襲った強烈な干ばつで、ついに世界の備蓄穀物は底を尽き、世界的に食糧事情が一変した。

ジョージとクリスティナ・ライネンは忍び寄る現代文明の自壊の瞬間に戦慄きながら、協力登録者たちに電子メールを送り、新しい文明への転換のための行動を要請しつづけた。

一挙に世界の食糧事情が悪化し、瞬時に多数の飢餓難民を生み出した。貧困国は必要な最低限の量の食糧を手配すらできなかった。これらの国には飢餓難民を救う力はおろか、抑える力もなかった。飢餓難民は食糧を求めて国境を超えて彷徨った。国境付近では住民と難民との小競り合いが頻発した。食糧争奪を巡る住民同士の争いも世界中で日常的に発生した。

難民と住民との無数の小競り合いから国家間での小さな戦争が頻発した。それがやがて、大量の飢餓難民に襲われる裕福国と大量の飢餓難民を放出する貧困国間で、核兵器など大量殺戮兵器を使用する大戦争へと発展するのは時間の問題と思われた。

「核戦争になったら、元も子もないわ。なにかいい方法はないかしら」

クリスティナ・ライネンは誰とはなしに呟く。

かといって、来年になれば食糧事情が改善する保証はなかった。核戦争で死の灰が地球を覆い尽くそうと、餓死していく者には関係のないことだった。確かなことは、温暖化ですっかり狂った気候システムが農作物に実り豊かな秋を忘れさせ、ただ気まぐれに異常気象を頻発させていたことだ。

また現代文明の象徴でもある大都市はとっくの昔に食糧を自給することを放棄していた。それにもかかわらず、富裕国貧困国の区別なく、大都市

にはどこからともなく飢餓難民が押し寄せた。難民を呼び寄せても、難民に食糧を供給することができない大都市はただ死場所を提供するのみであった。いたるところに餓死者の山ができ、死臭が漂い、伝染病が蔓延し出した。新しい獰猛な人食いウイルスが出現し、大都市を襲いだした。もはや手の下しようがなかった。

「デカルトはどうしたのかしら。彼には地球人が絶滅する瞬間を是非見届けて欲しいわ。目を背けずに、自分が仕掛けた結果を正面から見る義務があるはずよね。いいえ、これはデカルトのせいじゃないわ。現代文明を選択したわたしたちの責任だわ。これはすべてわたしたちの自作自演にすぎないのね」

人類は地球の有する環境容量を食い尽くしつつあるのだ。そのことに気付かない人類には「茹で蛙」の運命が待っているだけだった。

ウイルスロボットに代わり、環境悪化による緩慢なる地球人処刑が延々とつづき、十年後、いや数十年後に「運命の日」が必ず訪れるのだ。そのときになってはじめて、人類は熱湯に茹だる自分の姿を見て、自ら効率良くお湯を沸かしてきたことに気付くのだろうか。それともそのまえに鍋から飛び出すことができるだろうか。

委員長は執務机に短い足を載せ、椅子の大きな背持たせに身体を埋めるような格好で何日も過した。諜報員の報告メモが机の上に無造作に投げ出されたままだった。

M星諜報部員の報告

第一信

食糧不足と病原性ウイルスの流行によって、人口稠密地域の貧困国を中心に、人口がじりじりと減っています。これらの犠牲者が今後さらに増え、地球人口がさらに減少の道をたどることは確実です。

それに加え、この数年来、地球の気温が急速に上昇し出し、南極の氷床が猛烈な勢いで溶けはじめています。海面がみるみる上昇しています。現在の海面上昇の勢いがつづけば、遠からず沿岸部の大都市や工業地帯が水浸しになるでしょう。日本などの臨海発電所の多くは稼働停止を余儀なくされ、近傍の大都市への送電が不足気味です。冷房用の需要がピークを迎える夏季には電力が不足し、広範にわたり大規模な停電を引き起こすことでしょう。この結果、富裕国においてさえ経済活動がマヒし、ライフラインを喪失した大都市は生命を失い、死臭を放つ死の街と化すことになりかねません。

このような状況にもかかわらず、自分の尻に火がついていることに気付こうとしない地球人は、相変わらず小競り合いや争いをつづけています。またいくつかの企業は投機商品化した小麦やトウモロコシの先物買いに走るなど、飽くなき利益追求に狂奔しています。

一方、新しい動きがあります。世界中に散在しているデカルトの残党らしいグループが連絡を取り合って、現代文明の残滓を捨て、新しい地球文明の構築を目指しています。リーダーはクリスティナ・ライネンという若い女性ですが、彼女が連絡を取っている名簿のなかにデカルトという名を見付けました。その者がルネ・デカルト本人なのか、現在、調査中であります。

第二信

デカルトはまだ生死不明です。クリスティナ・ライネンも彼を探しているようですが、所在さえ掴んでいないようです。生きていれば、彼の方から連絡があるはずですので、やはりどさくさに紛れて処刑されたのか、あるいは犠牲になったものと思われます。

第三信

新しい動きが広がっています。小グループがひとつの活動単位となって、ネットワーク型社会を形成しています。ネットワークに結びついたさまざまな文化をもった多様なグループは、小規模ながらそれぞれが支え合い、助け合って活動しています。

このような傾向はこれまでの巨大化高度化大量化の反動か、それとも反省の結果なのか分かりませんが、小グループが他の異質のグループから干渉や妨害を受けることなくネットワーク型社会の一単位として存在できるとすれば、M星人もこれに入り込む余地がありそうに思います。ただ問題は、依然として、デカルトの仕掛けの後遺症が残っていることで、原発から漏れでた廃液による放射能汚染や内分泌撹乱の恐れのある化学合成物質による環境汚染が心配です。それに地球温暖化による気候システムの撹乱もつづいています。

委員長は漸くデカルトの仕掛けの全容が理解できたように思えた。そして彼を再派遣したことがかえって事態を悪化させたことを悟らざるをえなかった。彼が言う通り、じっと彼が仕組んだ仕掛けによって地球人が自滅するのを待つべきであった。

委員長は自戒を込め、デカルトが描いた「地球人の絶滅」のシナリオをもう一度思い浮かべる。

デカルトが仕組んだ仕掛けはハンドルとブレーキの利かない現代文明という名の自動車をつくり、これに地球人を乗せてアクセルを踏ませ、暴走させたようなものであった。そして暴走する自動車が壁に激突するのをただじっと待っていればよかった。

だが委員長は暴走車のエンジンのことを理解できずにいたのだ。地球人も自分たちを乗せている車が『プラス最大化原理』を燃料にしてエンジンをフル回転させ、自爆装置である厚い壁に向かって突進していることに気付かずにいた。地球人は自滅を目の前にしながらひたすらスピードに酔いしれていたのに、デカルトを再派遣していらぬチョッカイを出してしまったのだ。

有限な地球で「プラス最大化」を押し進めていけば、仮にマイナスを排除し、プラスのみに限ることができたとしても、最終的には有限の壁に阻まれ、プラスがマイナスへと転化してしまうのだ。しかるに現代文明はマイナス面を放置したまま巨大化高度化大量化に走り、野放図に「プラス最大化」を追い求め、結果的にマイナスがマイナスを呼ぶにいたることになった。

彼はこのデカルトの仕掛けに気付かず、現代文明の基盤である科学技術を暴走させるエンジンはデカルトの教えを信奉する倫理観のない科学者たちだと頭から思っていた。彼らが国や企業あるいは大学などの研究組織に潜り込み、エンドレスな科学技術の展開に奔走し、地球（自然）に対して無制限な征服・支配を目指す。このような科学者たちの結果に対する自覚

と責任を欠く能天気な行動の結果、地球人は溢れ出る自らのアウトプットによって竹箆返しを受けることになるのがデカルトの仕掛けのすべてと思い違いしていたのだった。

倫理観なき科学者は自覚も責任感もなく、科学技術の操り人形となり、科学技術を神のように崇め、開発競争に明け暮れ、ひたすら技術の巨大化高度化大量化を押し進めた。その結果、プラスが巨大化高度化大量化すれば、マイナスも巨大化高度化大量化していった。さらに、巨大で高度かつ大量のプラスが有限の壁に衝突したとき、巨大で高度かつ大量のマイナスへと転化することを理解できなかったのだ。

たとえ有用なものでも大量生産大量消費大量廃棄経済のもとではすぐゴミとして廃棄される運命にある。現世中心のエネルギー浪費型物質本位思想が科学技術を武器に世界を征服し、アメリカ型大量生産大量消費大量廃棄方式を世界に広め、地球を残留性の高い有害なゴミで埋め尽くしていくことになった。ゴミの大量発生の一方で、資源枯渇に拍車がかかり、地球人を取り巻く環境が急速に悪化し出したが、これが地球人の自爆のはじまりだとは気付かなかった。

委員長は大きなため息をついた。

「有限な地球におけるプラス最大化原理」、これがデカルトの仕掛けのキーワードだった。だがデカルトは現代文明下の地球人の行動原理として「プラス最大化」を仕組んだことを最後まで明らかにしなかった。このことを知れば、デカルトの言う通り、有限な地球のもとで地球環境が指数関数的な勢いで悪化し、計画通りに地球人が絶滅することを十分理解できたはずだった。

委員長は余計なことをしてしまったという思いをどうしても消し去ることができなかった。デカルトに最後の切り札を持たせたまま、地球に追いだしてしまったのだ。もしデカルトを再派遣しなければ、いま頃地球人は放射能をまき散らす戦争を起す危険に曝されることもなかったろうし、またM星秘密工作員デカルトに嵌められ「茹で蛙」の境遇に追いやられたことにも気付かずに、目先のプラスに酔いしれたまま全速力で厚い壁に向かって突進し、激突の果てに自滅し果てていたことだろう。

たとえ地球人の死とともに体内に蓄積された化学合成物質が流れ出たとしても、地球上全体が日本のような高濃度汚染とはならないだろうし、また多少汚染が増したとしても放射能汚染よりもまだマシであるにちがいない。これまたデカルトの言う通り、M星人が地球を目指して航行を続けるうちに地球の自浄力がフル回転して化学合成物質を浄化し、瑞々しい地球がわれわれを迎えてくれたことだろう。

委員長は迷った。

かといって、決断を先に延ばしておくわけにいかなかった。このままM星とともに死に絶えるか、それともどんな危険が待ち受けているか分からない地球へ出発するか。そしてこころある地球人に協力して新しい地球文明を築くか。だが地球人たちは一度全滅の企みを企てたM星人を心安く受け入れてくれるだろうか。

残り時間は刻々と少なくなっていく。委員長は執務机に両手をつき漸く立ち上がると、よろよろとした足取りで机の周りを当てもなく歩き出した。

（完）

（この物語はフィクションであり、登場する人物および団体名は実在するものとは一切関係ありません。）

主要参考文献

天野博正『環境科学ー人間環境の創造のためにー』（１９８３）
同『人類は滅亡への道を歩みはじめた』（１９９４）
デボラ・キャドバリー（古草訳）『メス化する自然ー環境ホルモン汚染の恐怖ー』（１９９８）
WORLD・WATCH（ワールド・ウオッチ日本語版）および週刊金曜日、新聞報道記事ならびにテレビ等の報道を参考にさせていただきました。

デカルトはテロリストー現代文明の毒唾1
生野以久男
二〇〇五年一二月二五日第一版発行
(c) Ikuo Ikuno 2005

発行所　kinokopress.com
代表　森岡正博
所在地　大阪府堺市学園町一ー一　大阪府立大学人間社会学部
　倫理学研究室内
連絡先　www.kinokopress.com内の連絡先に問い合わせ
本文レイアウト＋デザイン　森岡正博

本書およびＰＤＦファイルの無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。
ＩＳＢＮ　なし